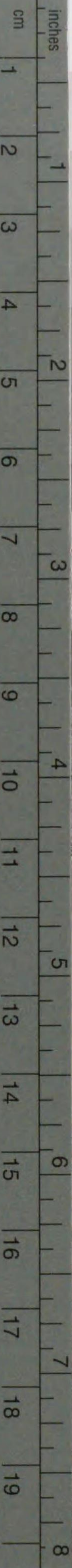


# Kodak Gray Scale



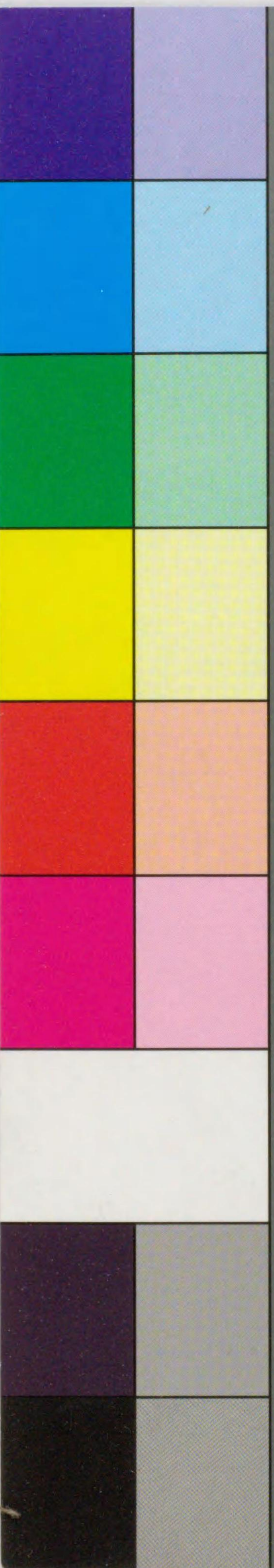
© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



# Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



160  
173

160-173  
\*1200800011142\*

Handwritten text in a rectangular box on the book cover, likely a title or author's name in Chinese characters.





はい  
なけ  
古今書籍一覽見



### 本書の出版に就て

本書の原版は大正八年に組み始めたが、活字の種類が複雑なので植字工が嫌忌するから遅々として容易に涉らなかつた。が、切りに督勵されたので漸のこと紙型に仕上げる事が出来た。さて印刷に掛らうとする時、大正十二年九月一日の大震火災突發の變事に際して發行者平元氏は此の紙型を背負ひ、二人の病人を擁護せられつゝ食はず飲まずに難を避けられたので、一枚の衣類も取出される暇が無かつたのは實に御氣の毒と申さねばならぬ。幸ひ今日この冊子を見ゆることが出来るのは全く同氏辛苦の賜である。故に當時の艱難を附記して永久に感謝の意を表する次第である。

大正十二年十二月十八日

鷺 洲



160-173



はいけ  
な

右

今

書

籍

一

覧



大正  
13. 1. 21

内交





他人ノ著書ニ由リテ己ヲ改良スルコトニ時  
間ヲ用ヰヨ然ラハ他人カ辛苦ヲ盡シタルモ  
ノニ由リテ容易ク改良ヲ遂クルコトヲ得ヘシ  
寧ロ富ヲ捨ツルモ智識ヲ取レ何トナレハ一ハ  
一時ニシテ一ハ永久ナレハナリ

ソクラテス

大正己未小春

愛石環享書







各遊歴地の著者  
(大正九年三月五日札幌にて)



はしぎき

著者が斯道に志して以來、花書を繙くは固より、先輩諸氏に就て故實其の他を調べた結果、勿論得る所はあつたが、然し次の様な遺憾がないでもなかつた。或時先輩某に或ることを尋ねたが、其の答が明瞭であり確實であつたから、その人の説として信じてゐた。其の後書見の節、不圖同説が或る古書中に見つかつた。或る程度まで到達すれば偶然古人と同一の説が出るものと聞いてゐるが、種々取調べて行くにつれ、追々と書籍の上迄まで、轉載自己説のあるのを見出した。大正の今日に於ける立派な肩書付きの著者までには右の如き事があつたから、十分に調べなければ誤があること云ふ懸念が動機となつて、日本全國に古より現今に至るまで、眞の著者が幾何程あるかを調べてみようといふ好奇心を起し、各地圖書館を巡廻して見た。其の外、友人の蔵書も出來得る限り廣くしらべて、書名その他を書き集めたのが本書の成り立ちである。唯後



進者に一言して置きたいのは、花書の説の悉くが皆著者の自説であると信じてはならぬ事である。本著者にも前年先輩に聞いた事が後になつて誤つてゐるのを發見した様な例があるから、花書の紐を解いたならば、熟讀して、自己に判斷の出來てから、其の事を實地に行ふのがよいと思ふ。古人と對話する安全な方法は、第一番に、本書列記の最も古い著者に説を聞き、順次に新しい方の諸説を聞くのがよい。眞摯な著者は自己の研究した事のみより説いてくれない。けれども不眞面目な著者は他説をも自己説のやうに、滔滔數千言に涉つて教へてくれる。『蓼食ふ虫も好好』と云ふことがあるから、聽く者も觀る者も各自の欲する方に就て學べばよからう。然し斯道の奥儀を極めようと思ふならば、秩序正しく研究せねば、名人上手と、人に云はれるまでには中中なれるものでない。そして本書名中の冊子には一冊しか無いものがあり、又各地に在るものがあるから、是非見たいと思ふ書籍は圖書館で調べてもよし、又本著者に何れの藏書或は何れの備付なるかを問はれても之が回答の勞を吝まない。

本書に引用せる語句は原本のまゝであるから、假名遣の誤記あるものもあるが、敢て之を改めなかつた。本書編纂に關して所眞澄先生の援助を蒙つたこと、同侶安井玉泉氏の古書閱覽を快諾せられたこと、及び各地圖書館主任の特に時間外閱覽を許可せられ事、其の他友人の古書を貸與せられたことに對し併せて茲に厚く謝辭を述べて置く。

駒込にて

大正十年初夏

著者識す



目次

一、發行年月日不明の書籍…………… 八

一、著者及び發行年月日不明の書籍…………… 九

一、斯道の機關雜誌…………… 九

一、追加書名…………… 九

一、唐書…………… 一〇〇

一、花道沿革梗概…………… 一〇一

一、書名索引…………… 一

一、年號索引…………… 二

一、年代早見…………… 附一

附 録

圖書館巡覽記

圖書館の利益…………… 附五

一個の頭腦に何程這入るか…………… 附五

七八歳の女兒と中學生…………… 附六

圖書館の盛衰…………… 附七

空地があれば斯くしてほしい…………… 附八

某圖書館主任の話…………… 附八

書庫が欲しい…………… 附九

病氣に罹らないでね…………… 附一〇

女の子が…………… 附三



いけ  
はな  
古今書籍一覽

小林鷺洲編

書名

著者

年號

紀元

種類 冊數

池の坊古傳法卷

六角堂  
池坊專榮

天文二十年十月

二二一一 寫本 一冊

附言 本書の年號は天文二十年と記してあるが、以後の書寫と思はれる。内容の一節に『瓶に花

を指す事古より有りとは聞き傳ふれど、殊更此風流先祖より相始めて世に廣まれり、しかあれど

此頃は如何なる故にや猥がはしくなりて、夫れともわかぬ花の風情數多出來て、見る人移うつろひあき、

心の花の色も取々なりしかば、其の流れ逆、中々愚なる身のふしなしと思ひたれ。下略。』その他

右長左短、前短後長、古今遠近の説あり。此の寫本は東京南葵文庫の藏書である。

◎天文二十年は百〇四代 後奈良天皇の御宇、足利十四代義輝將軍の時にして、所謂戰國時代なり。

花 傳 抄

六角堂池坊  
專

好

寛永三年七月十九日

二二八六 寫本 一冊

附言 前書「池の坊古傳法卷」と内容に於ては似たものである。一節に『生花の事定まりたる枝...



はなし、先さしあひを嫌ふなり、出生の姿肝要なり、生物の口のとをりよりも枝葉のさがりたるも一色をいく所に置きたるも苦しからず、草木のへだてなく、いく本にもいくるなり、座敷により牛物いせものによりて心遣ひ有るべし、諸道具に熱心淺く其の道を仕とぐる事侍るべからず、假令器用なしとも稽古の程ふかければ奥ある姿を立出す事あり、(中略)草の名も所によりてかはれるなれば只々當座に及びて作者の心遣ひ肝要たるべし、誠に千草萬木猶おほかれは中中注しもあへがたきものゆへ、よしなきたはぶれぐさのみはと筆をさし置きぬ。下略。』原本の年號慶長二十年(元和元年)五月のものを寛永三年に季齋が寫したものである。東京南葵文庫所藏。

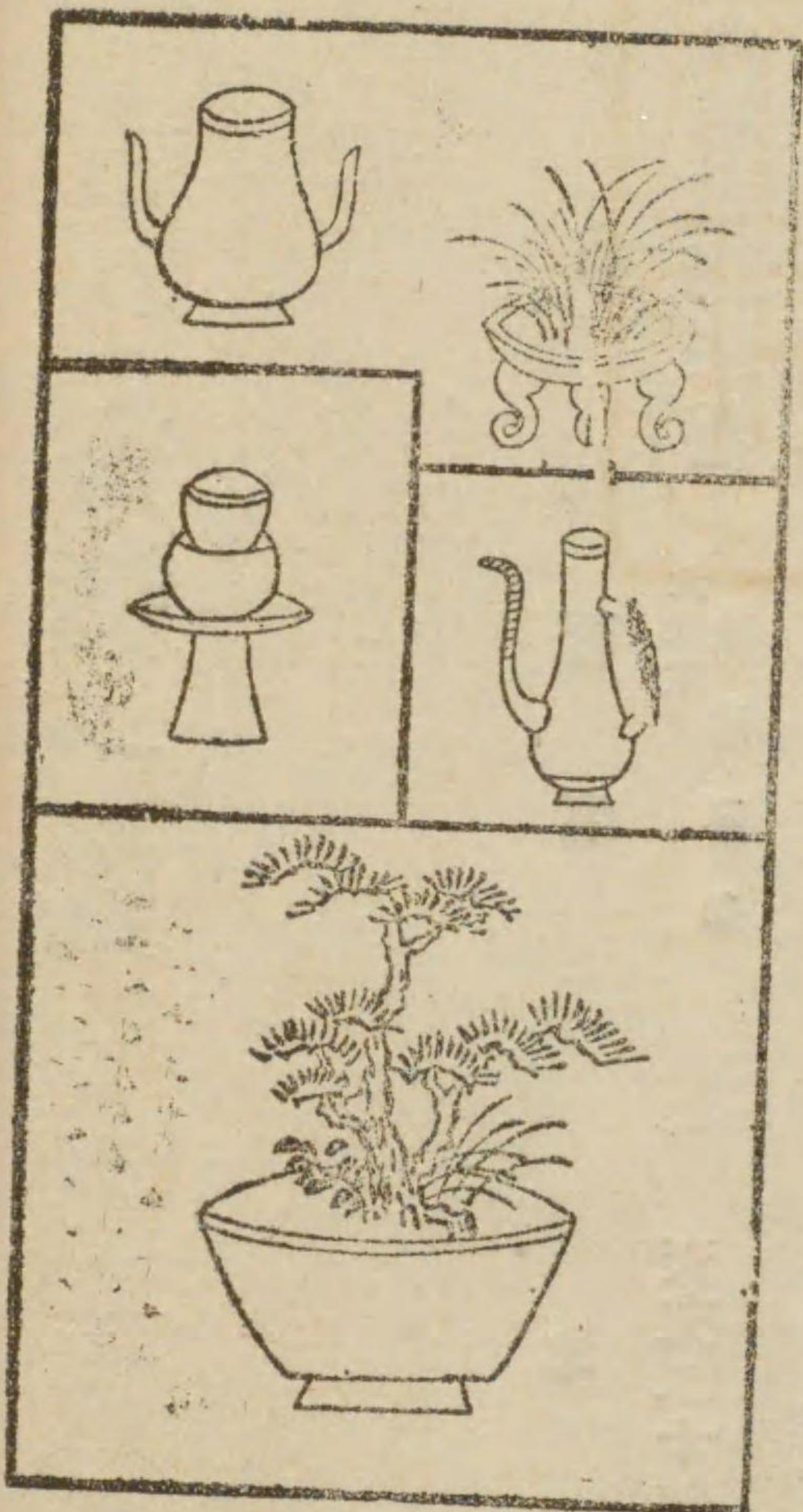
仙

傳抄

寛永二十年暮冬

二三〇三 版本 一冊

仙傳抄



書中の一節に『なげ入といふは船などにいけたる花のことなり』とあり。上圖中皿の如きものに入れたランもなげ入に屬するものと想像される。鉢に入れた木と草とはたてばなな範圍であらう。當時花を瓶器に挿すのをたてばなと云つた。本書中『前略、たゞくわび

仙傳抄



服繪 本尊 服繪

後世出版の書に抜萃せるものが多い。本書は東京帝國圖書館及び大阪圖書館に在る。

◎寛永二十年は百〇八代 明正天皇の御宇、徳川三代家光將軍の時にして、同十四年島原の亂、以後鎖國の令。

御

飾書相阿彌

萬治三年文月十日序

二三二〇 版本 一冊

替花傳秘書

寛文元年九月吉日

二三二一 版本 一冊

附言 立華に關するもの。



立花書院飾 加藤峰立の書  
立花百瓶

寛文十年三月上旬 二二三〇 書寫 一軸

寛文十三年二月 二二三三 版本 三冊

(延寶元年)

六角堂池坊並門弟立花抄  
の物圖并口傳書下卷附

寛文十三年二月吉祥日  
(延寶元年)

二二三三 寫本 二冊

立花初心抄 玉泉の序あり

延寶三年丙辰孟春

二二三五 版本 二冊

立花初心抄

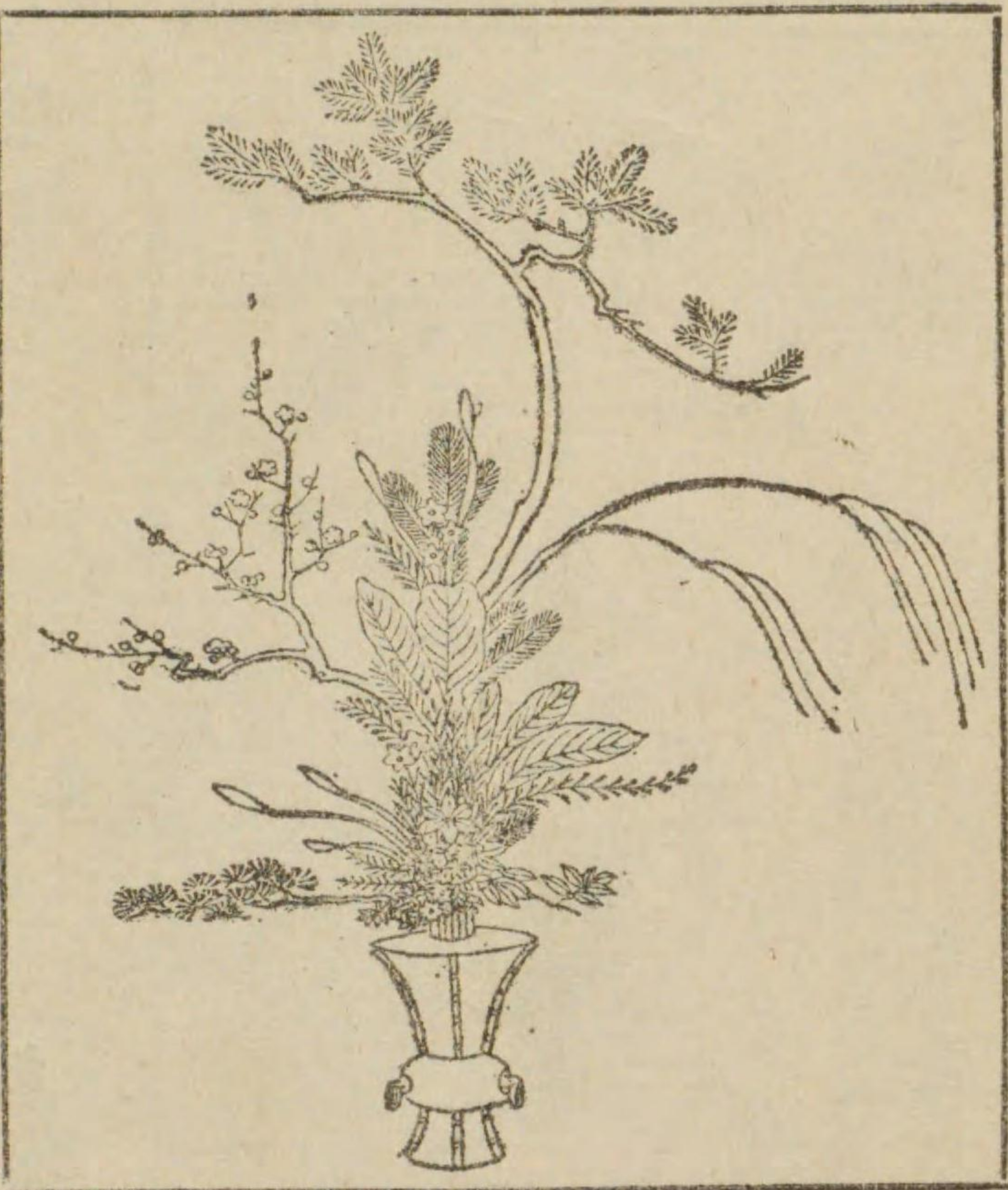


『仙傳抄』刊行以來三十三年の星霜を経たのであつて、此の間立花の方法に工夫を凝して幾分變化した形跡がある。上圖のヤナギは自然に曲つた形のものを用ひ、ヒノキ、ウメ其の他の木物類に至るまで悉く相當な恰好の枝幹を選び、而して是等の枝幹を集め一定の規矩に當條めて出來上つたのである。

古今立花大全

天和三年正月

二三四三 版本 五冊



本書中に記す立花の字にはりつくわと振り假名を附けてある。大正の立華の語原も本書の出版された頃であらう。編者傳へ聞くに、此の當時は一瓶の立花を大書院にたてる場合、數ヶ月或は一ケ年二ケ年以前に山野を跋涉詮索して、彼の所に在るマツは眞に適當であるからと云つて覺わて置き、此所のウメは何々によいからとて目印を付けて置く。而して必要の場合、前記の所より集めて一個の形を作るのが昔の立花の方法である。

古今立花大全

附言 本書の挿繪は彩色してあつて凸版に取れないから、敷寫させて後複寫したものである。

◎天和三年は百十一代 靈元天皇の御宇、後川五代綱吉將軍の時にして、此頃は萬事優美華麗、所謂元祿風起る。芝居、能



樂、淨瑠璃など盛んに行はれ、文學、美術、工藝の進歩頗る著し。

立華正道集

天和四年三陽日  
(貞享元年)

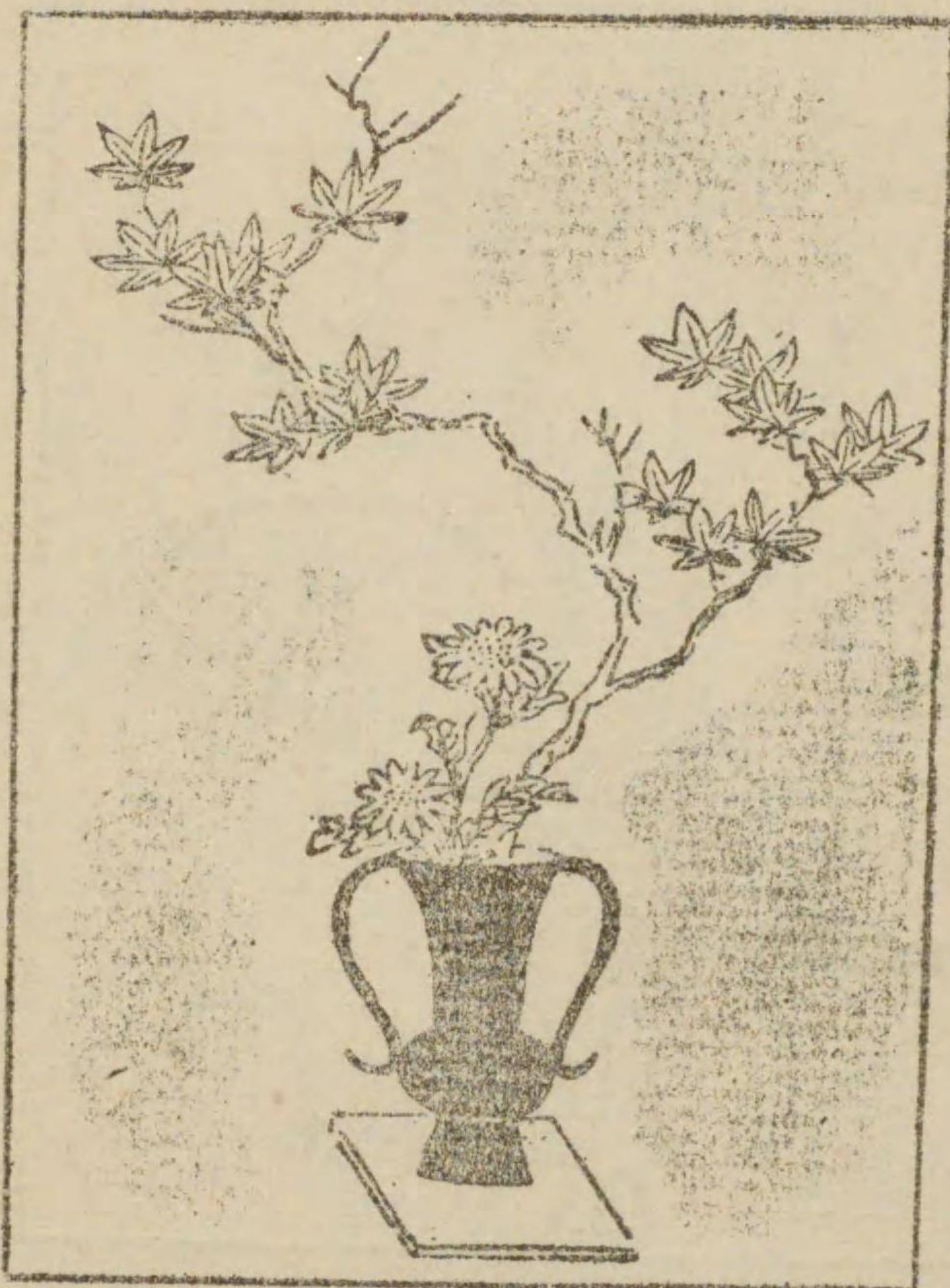
二三四四 版本 一冊

抛入花傳書

貞享元年六月

二三四四 版本 三冊

抛入花傳書



なげ入と云ふ熟語は『仙傳抄』に既に掲載されてゐるが、抛入と云ふのは前記立花の如く大袈裟にしないで、自然の枝を閑雅に入れ、書齋或は居間の裝飾にしたのであらう。上圖の如きも木は高く草は低くの例に倣つて入れたものと思はれる。

立花時勢粧 富壽軒仙溪

貞享五年五月  
(元祿元年)

二三四八 版本 八冊

立花秘要抄

猪飼入道

貞享五年九月  
(元祿元年)

二三四八 寫本 一冊

秘傳花鏡

西湖陳扶瑤彙

本朝の元祿元年

二三四八 版本 六冊

花傳書

元祿四年辛酉菊月仲旬

二三五二 寫本 一冊

附言 著者の見たのは元祿四年と記してあつたが後年の寫しと思はれる。

古今或問

元祿五年九月

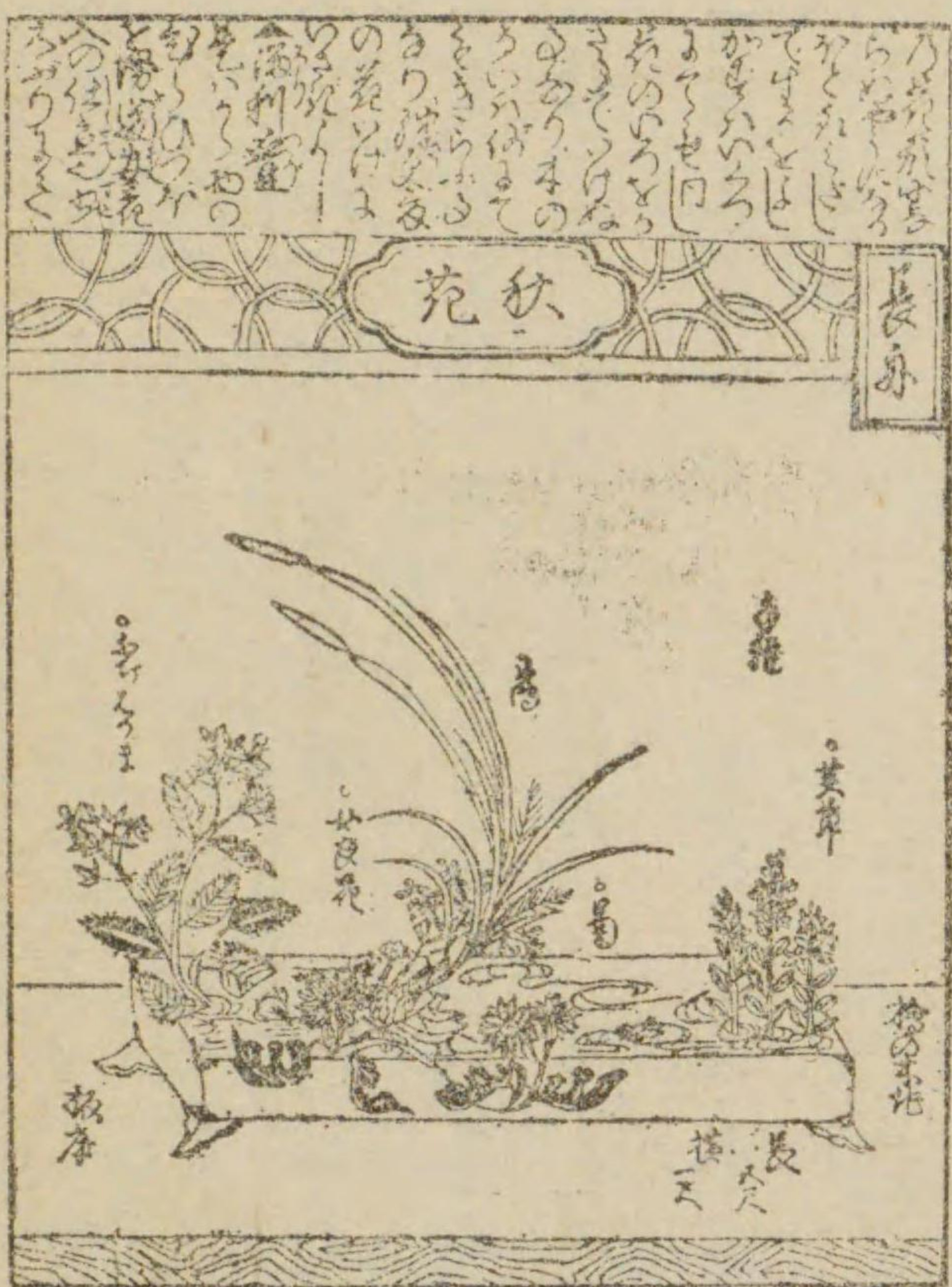
二三五二 版本

立華訓蒙圖彙

元祿八年

二三五五 版本 六冊

立華訓蒙圖彙



本書は元祿の當時抛入の流行につれて世に出たものと思ふ。書中の圖抛入花百瓶は、明治の末、大正の初に於て、世上『盛花』と稱へてゐる花形と變る所はない。上圖の如きを『自然本位盛花』と云ひ、他にも又變つた意匠のものがある。



附言 本書六冊中抛入花の圖以外のものと、發行年代不明の『古今立花大全』とは同版である。六冊完備したのは東京帝國圖書館、同南葵文庫、大阪圖書館の三ヶ所に在る。

當流茶之湯評林大成 廣長軒元閑

元祿十年正月

二三五七 版本 九冊

附言 卷之二は全部生花に關する事項を載せてある。

瓶花圖彙 山中忠左衛門

元祿十一年暮春

二三五八 版本 二冊

附言 極彩色で立華の圖のみ掲げてあるから、初心者が花の識別に苦まない。これは東京帝國圖書館に在る。

生花秘傳集

元祿十五年九月十一日

二三六二 版本 一冊

◎元祿十五年は百十二代 東山天皇の御宇、徳川五代綱吉將軍の時にして、士風の懦弱を覺醒すべき赤穂義士の吉良邸打入あり。

花道全書

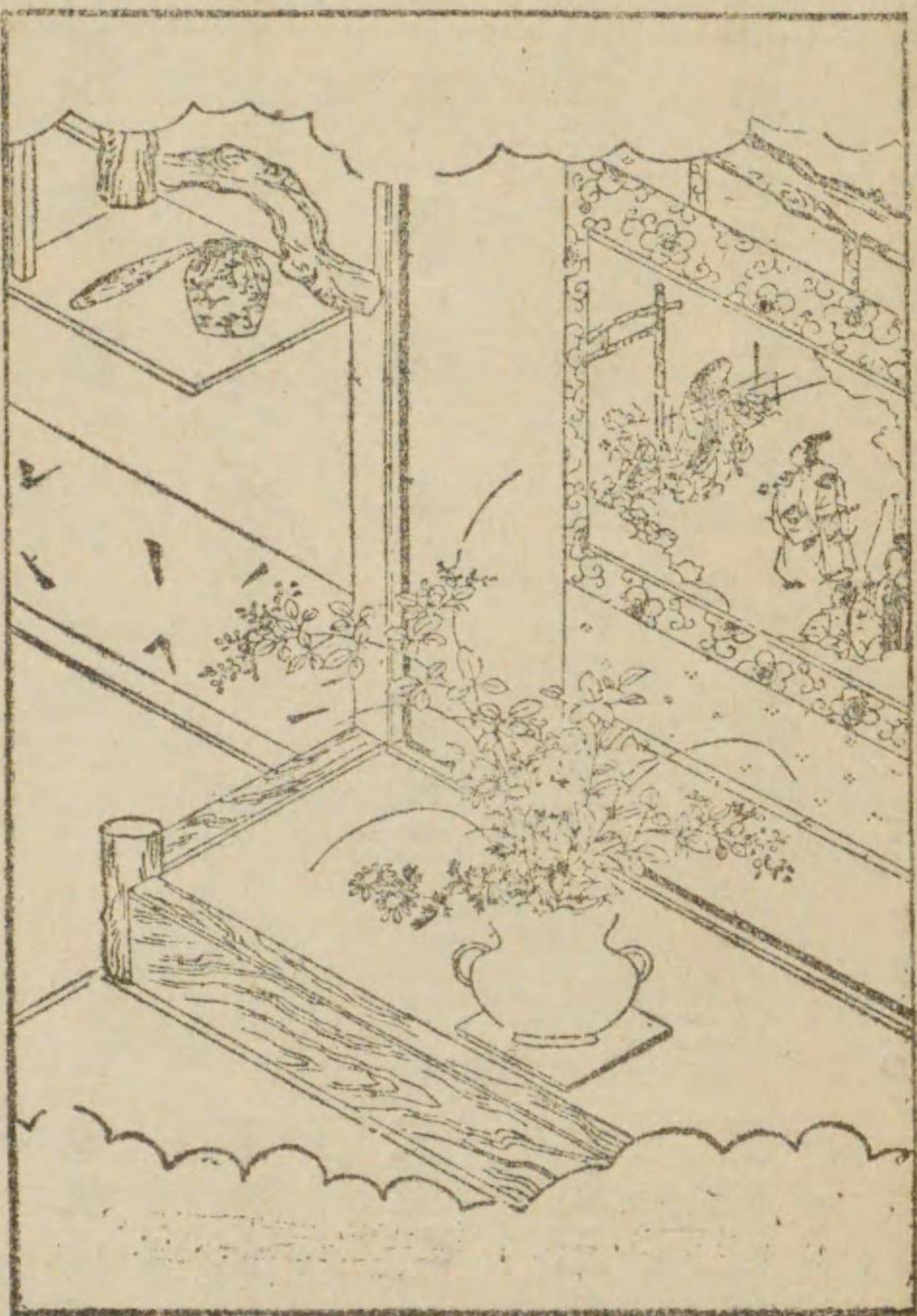
享保二年

二三七七 版本 四冊

附言 本書は東京帝國圖書館と同專賣局圖書館とにある。

◎享保二年は百十三代 中御門天皇の御宇、徳川八代吉宗將軍の時にして、人才を登庸し、元祿の弊風を一掃し、世大いに治る。大岡越前守江戸町奉行となり、裁判巧みに無比の名奉行と稱せらる。

花道全書



本邦に於て立花、抛入花に關する刊行本あり、元祿年間支那瓶花に因める秘傳花鏡及び生花秘傳集などの發兌を見る。本書などは流派の一方に偏せず、新道全般に涉つて通用するやうに書いてあるから所謂後進者の好い參考書である。上圖秋草を入れたのは抛入に屬するものと云へよう。支那風より見る時は瓶花とも云へる。

池新編立華百瓶圖彙 蘭 谿選

享保九年の序

二三八四 版本 二冊

槐 記 山科道安

享保九年より二十年まで

活版 一冊

附言 寫本を後年刊行したものである。

四季具分泌傳書 及 覺

享保十二年九月

二三八七 寫本 一冊



平城桐覆軒井上團支口授 栗原季林題  
井上幹舍

享保十四年九月中浣 二三八九 寫本 一冊

立花全書

享保十四年 二三八九 版本 一冊

花傳書 松葉軒一行

享保十六年<sub>亥</sub>八月十六日 二三九一 書寫 一軸

陰陽立花秘傳 松葉軒一行

享保十七年九月十六日 二三九二 書寫 一軸

立花傳書

享保十七年 二三九二 書寫 二軸

立華指要大成 松領山題

享保十八年正月 二三九三 版本 四冊

古今立花圖編 儉閑齋藤掛似水

元文<sub>丁</sub>二年 二三九七 版本 二冊

青山御流三日月之卷 園大納言基香

元文三年九月<sub>がし</sub> 二三九八 書寫 一軸

青山御流插花有明之卷 南都一乘院僧正鳳明

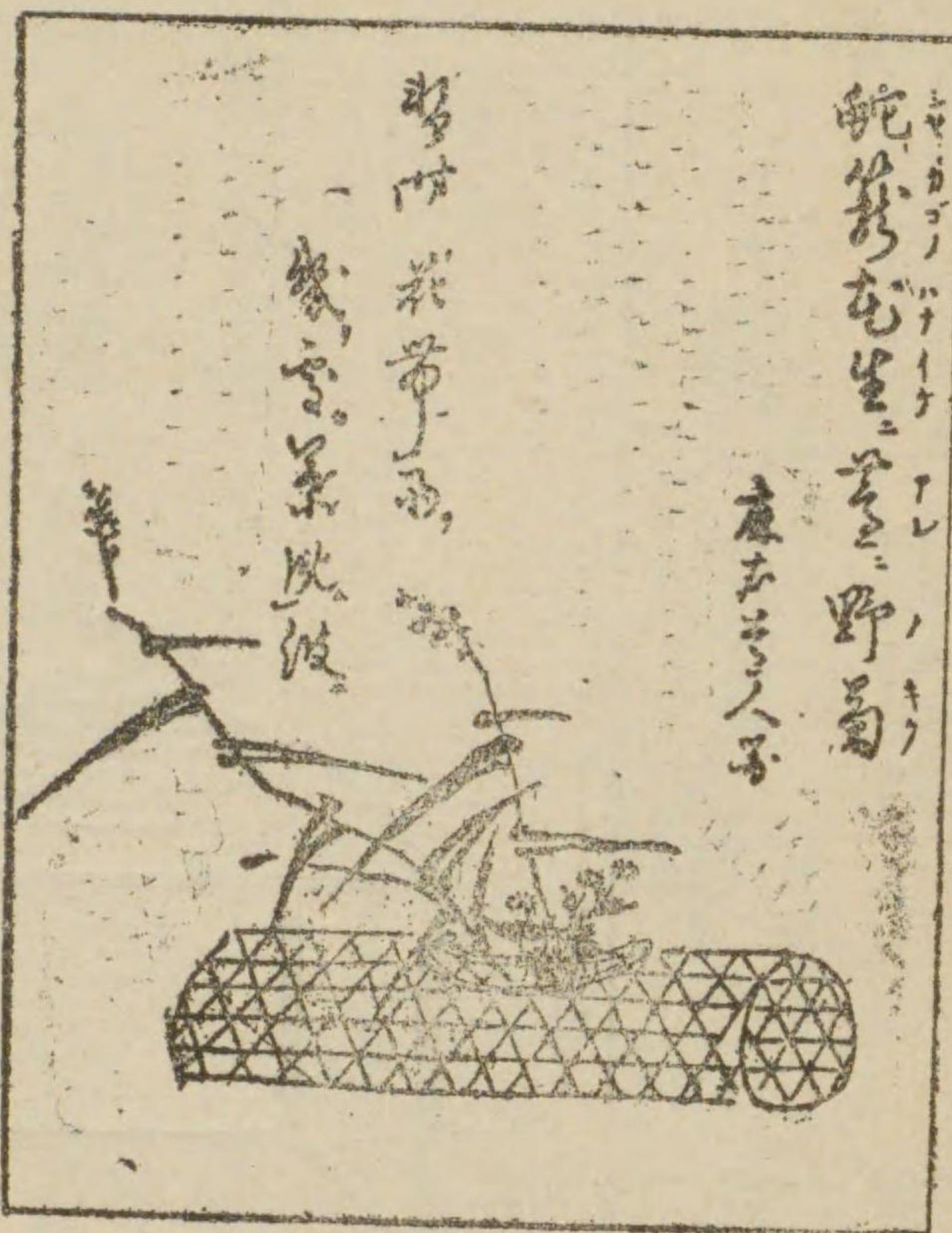
元文三年九月<sub>がし</sub> 二三九八 寫本 一冊

附言 著者の見たのは後年の寫しであつた。

本朝瓶花史(岸之波) 釣雪野叟

元文五年の跋あり 二四〇〇 版本 二冊

(波之岸)史花瓶朝本



本書の著者は支那風(文人畫風)の『餅花譜』を引用して諸説を述べてゐる。花形も技巧を加へず自然其の儘を、各種の瓶器に入れてゐる。世上には立花、抛入花、瓶花、生花の各系統があり其の他池坊、松月堂、源氏、青山等の流派がある。

瓶花軌法 柳葉堂鳥馴

元文五年 二四〇〇 寫本 一冊

池之坊古傳書 服部英翁

延享二年十月 二四〇五 寫本 一冊

怡顔齋蘭品 奥田萬元統選

延享三年二月の跋あり 二四〇六 版本 二冊



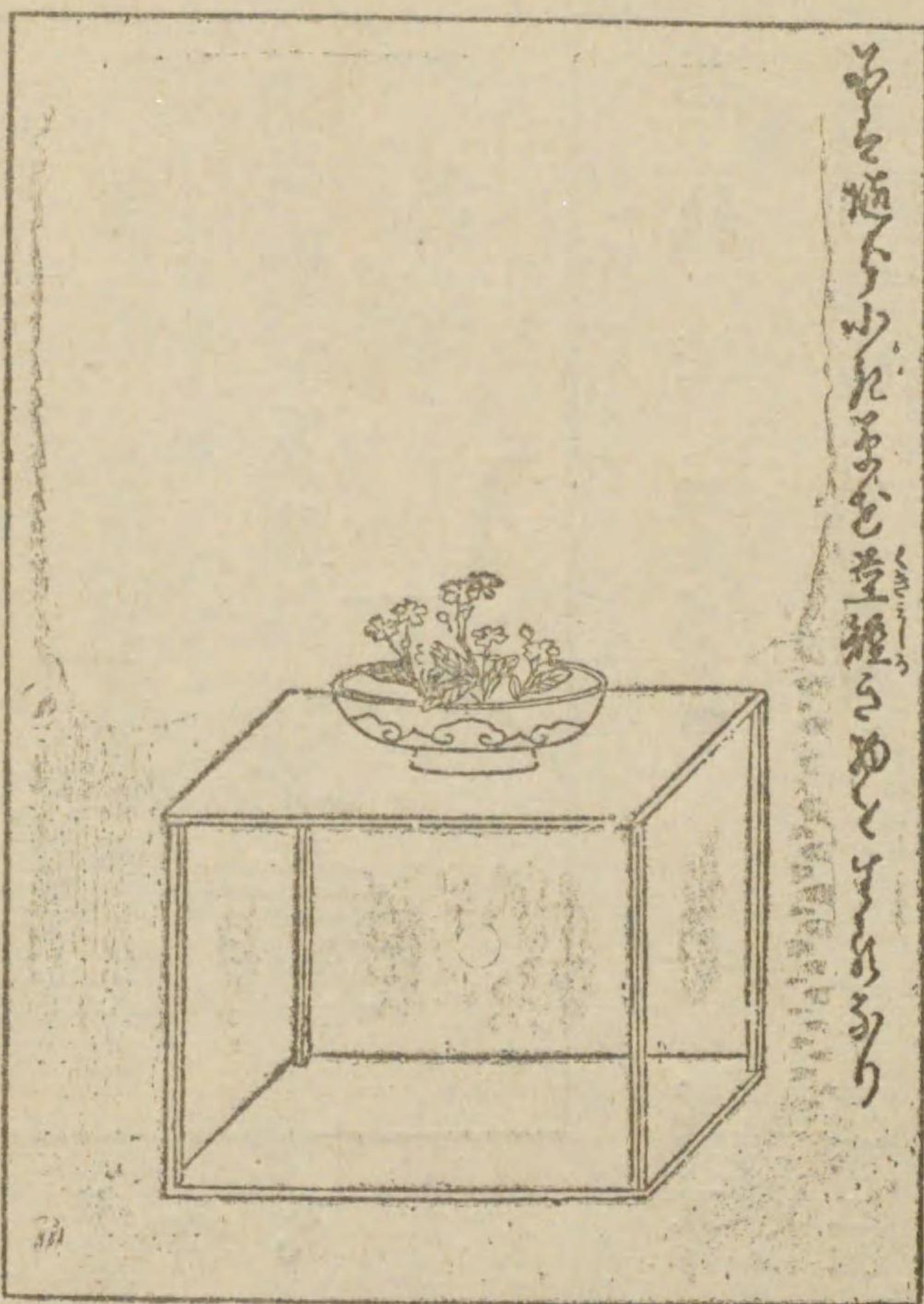
正生花 四季の友 落帽堂曉山

寛延四年一月  
(寶曆元年)

二四一一 版本 三冊

十二

正生花意 四季の友



本書發行以前十四五年、既に丸形の皿或は鉢様の如きものに、莖の短い草花を入れて『皿花餅』又は『皿生』と名稱を附してある。この花形は其の後中絶してゐたが明治の末舶來種の草花輸入せられ、西洋式室内の卓上裝飾として復活した。市人は之を見て『盛花』と云つたのである。

菊 經 黃龍源公

寶曆五年春

二四一五 版本 一冊

立花秘傳 正法眼藏 攢花雜錄 向陽軒梅橋

寶曆七年冬の序あり

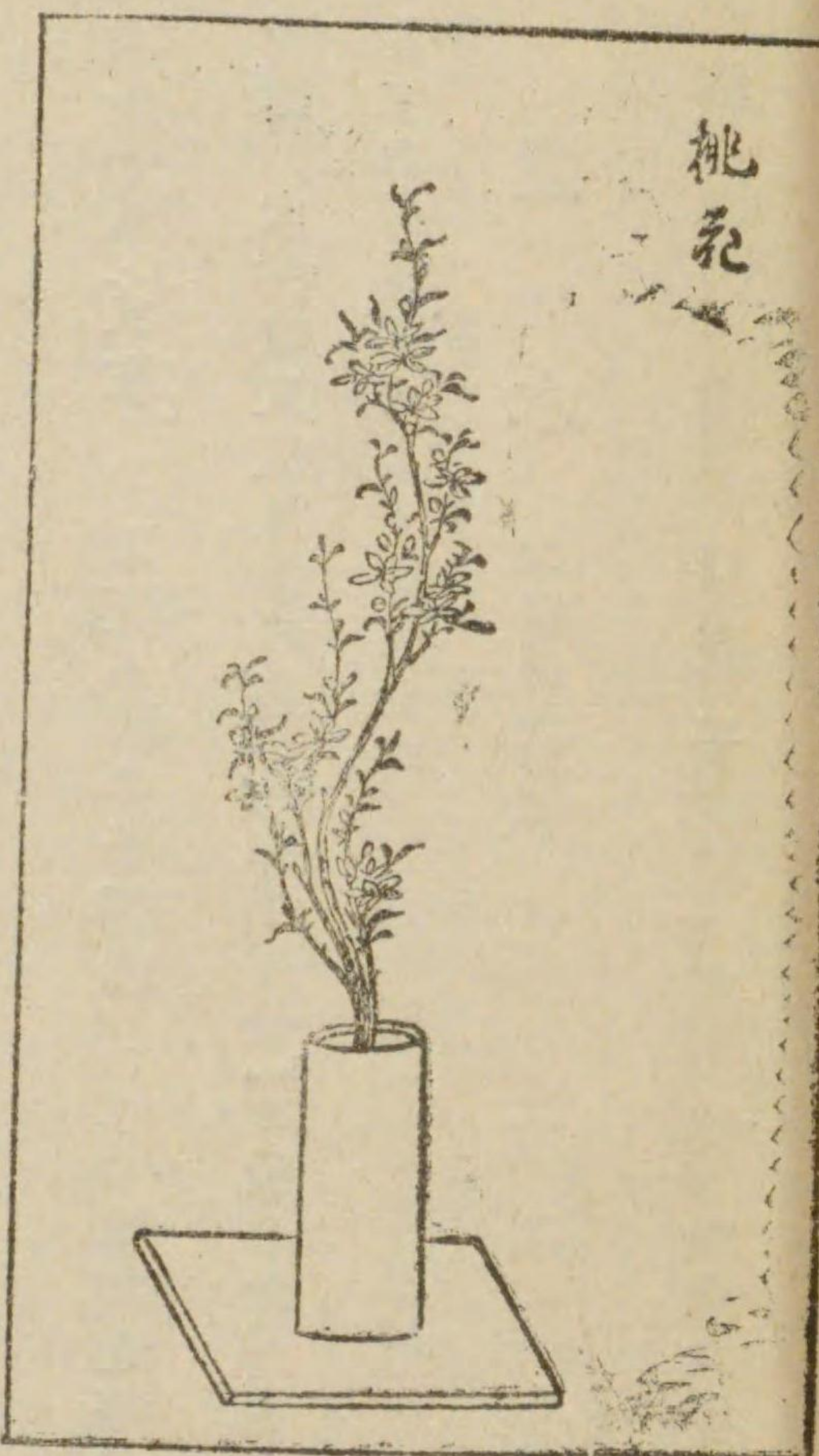
二四一七 版本 四冊

源氏活花記 千葉龍卜

明和二年秋

二四二五 版本 二冊

源氏活花記



一節に『予答曰。源氏活花と云ふ事は往昔室町將軍源義政公政事の暇、月花に御心を委ね給ひ康正二年丙初冬に江州芦浦寺、堺文阿彌、筑紫朱阿彌、京珠慶坊、徳大寺義門、大江廣末の六人に命じて五十四帖の花論を極め、花傳抄となし、探く秘して寶藏に納め給ひぬ。源氏の花法は尤生花の古流なり。(下略)』

華鈴集 摘採書 拋入華の圖 禿篋子

明和三年秋重陽九日

二四二六 版本 三冊

活花百瓶圖 松翁齋

明和四年睦月もちの日

二四二七 版本 二冊

挿千筋の麓 醉花齋玉蟾

明和四年の序あり

二四二七 版本 五冊

本挿瓶養花集 葛城山人編

明和五年十一月

二四二七 版本 一冊

拋入花薄 前編 後編 千葉一流

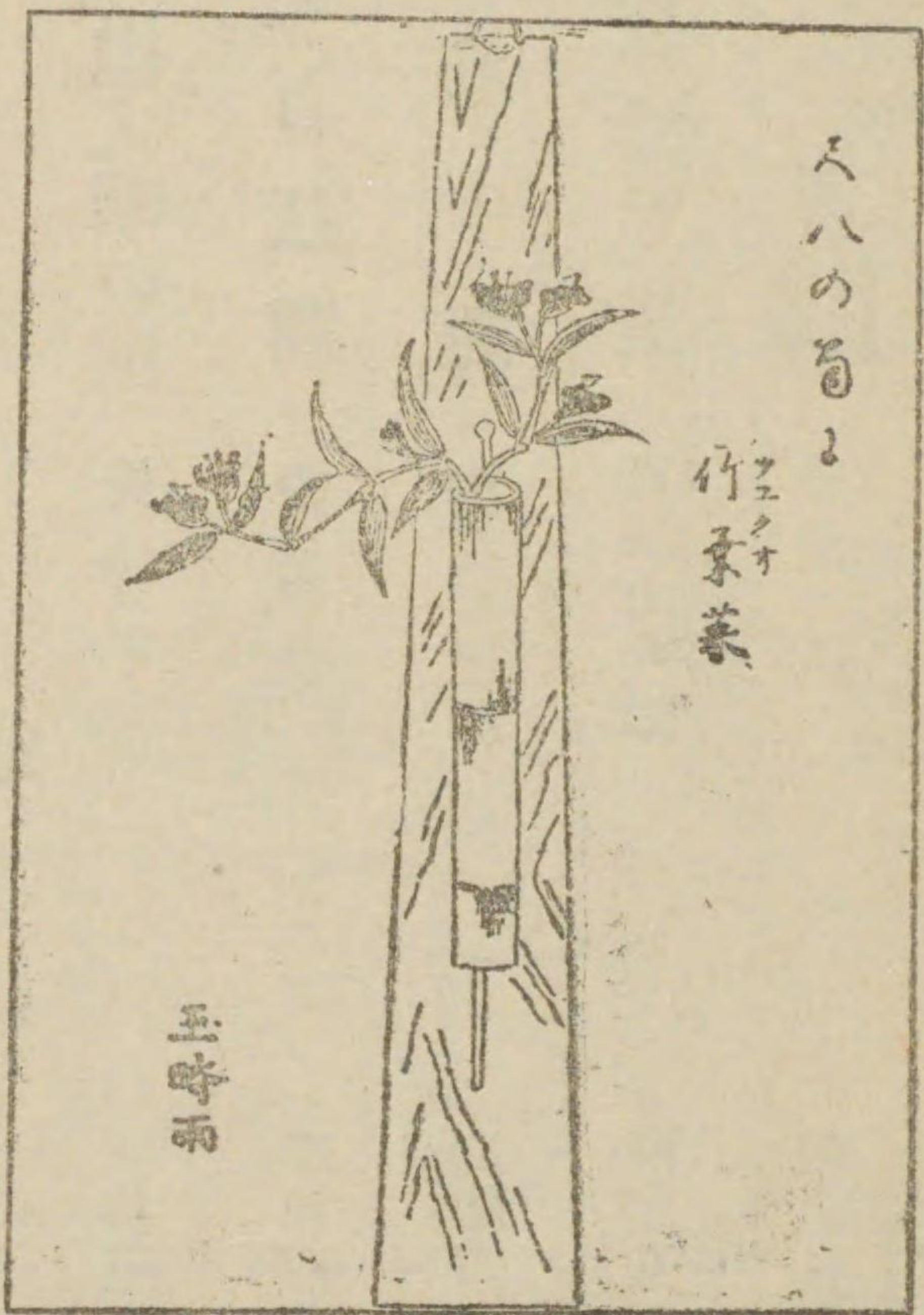
明和五年

二四二七 版本 五冊

十三



挿花 千筋の麓



本書に折入花、生入花等の熟字を用ゐ、  
 其の一節に『世に抛入と云ふは茶人無造  
 作に其の枝葉花の形なす事にや、客に對  
 して僂末の詞、我門の徒抛入とは呼べか  
 らず(下略)』とあり、折入をりいれに關して比類  
 のない圖を示してある。

千家新流 挿花直枝芽 入江玉膽の子惟忠

明和五年の序あり 二四二九 版本 四冊

附言 本書は入江玉膽の著で『生花百競』と云つた。花圖のみであつて、大正の現今世上投入と稱してゐる花形とよく似てゐる。

寛 濃 水 寫樂齋素庭

明和六年春 二四二九 寫本 一冊

生花傳書 口瓶子

明和六年

寫本 二冊

附言 本書は正徳元年の原著と記してある。

利久傳生花百箇條 宗 受

明和九年壬辰 林鐘  
(安永元年)

二四三二 寫本 一冊

插花正傳 春秋軒

明和九年  
(安永元年)

二四三二 寫本 一冊

生花枝折抄 千葉龍卜

安永二年仲冬日

二四三三 版本 一冊

百器圖解 千葉龍卜

安永二年仲冬日

二四三三 版本 二冊

甲陽生花百瓶圖 是心軒一露

安永三年仲夏序あり

二四三四 版本 三冊

附言 著者一露居士は松月堂古流を再興した人である。松月堂とは釋叡尊の雅號である。叡尊は大和西大寺に止住して後に興正菩薩と云ひ、正應三年(一九五〇)八月二十五日齡九十歳で遷化された

叡尊が追慕されたと云ふ明惠上人の庵は京都梅尾山よかので、同上人は寛喜四年(一八九二)一月十九日に齡六十歳で入滅された。

明惠上人が仰がれたと云ふ護命僧正は南都元興寺に起居して、花を植ゑられたと云ふ所が現今花園町と名づけられて残つてゐる。同僧正は承和元年(一四九四)九月十一日齡八十五歳で寂滅せら



れた。

(編者は京都梅尾山(昔時の梅、今は梅に造る)高山寺、大和西大寺、奈良元興寺の三箇所で調査したのである。)

生花見儘集 有來庵

安永三年夏

二四三四 版本 一冊

花天美希艸 陰到亭梅字

安永三年

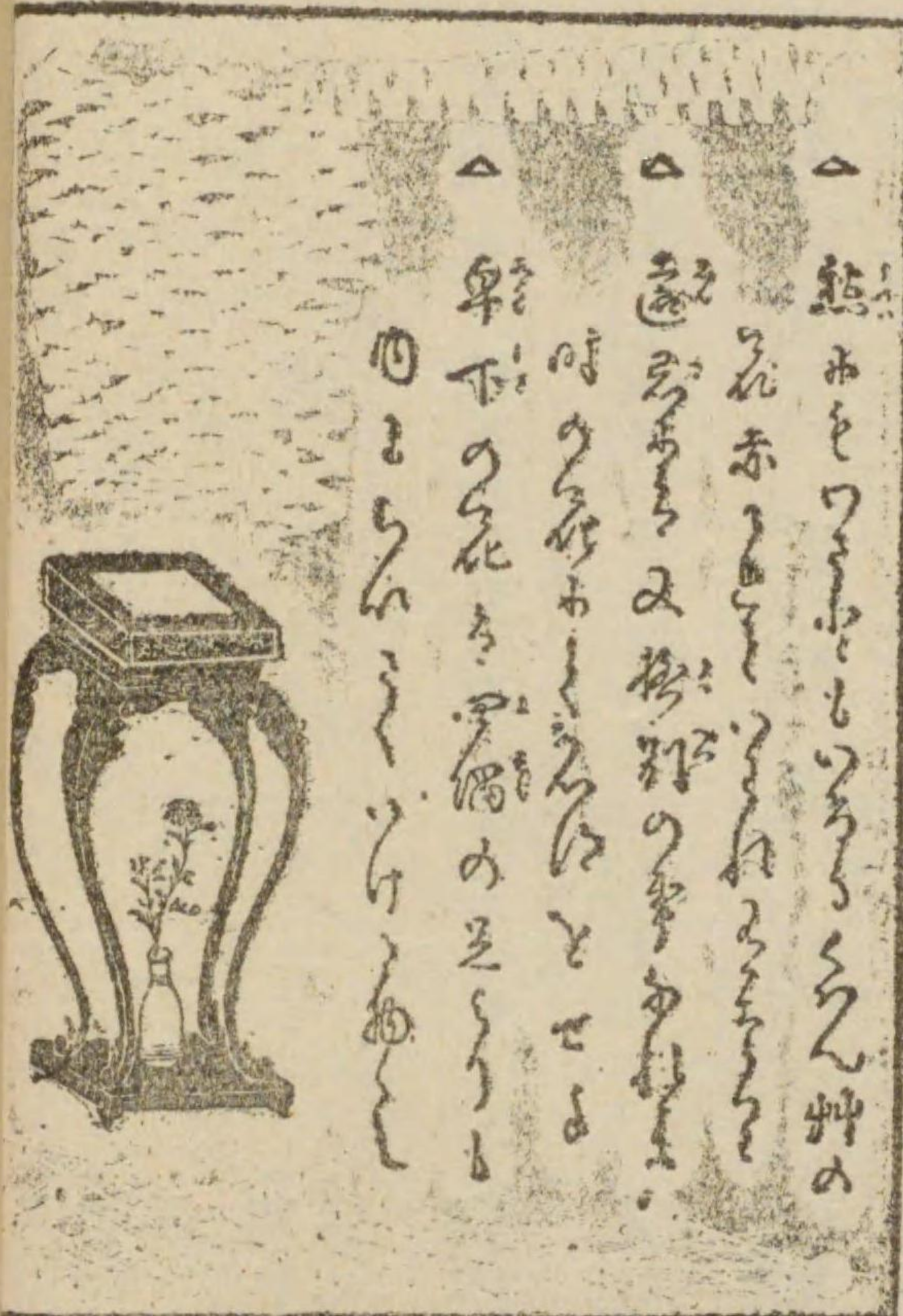
二四三四 寫本 五冊

花稽古 百首用捨庵

安永四年乙未正月

二四三四 版本 三冊

花稽古百首



卓下の花は説明の通り、足より外に枝を出すのは見よくない。この理由は卓下の花のみでなく、竹の二重切下方の内部、又茶籠の棚、牡丹籠などに入れるとき、各々の輪郭外に枝先を出しては恰好が悪いのと同じである。卓に依つてはウメの楚ウメを輪郭外に出す例がないでもない。

呦々齋瓶花全書(下) 横山潤仲徳

安永五年五月

二四三六 版本 一冊

遠萩原流眞理傳聞書 余語是恭

安永六年

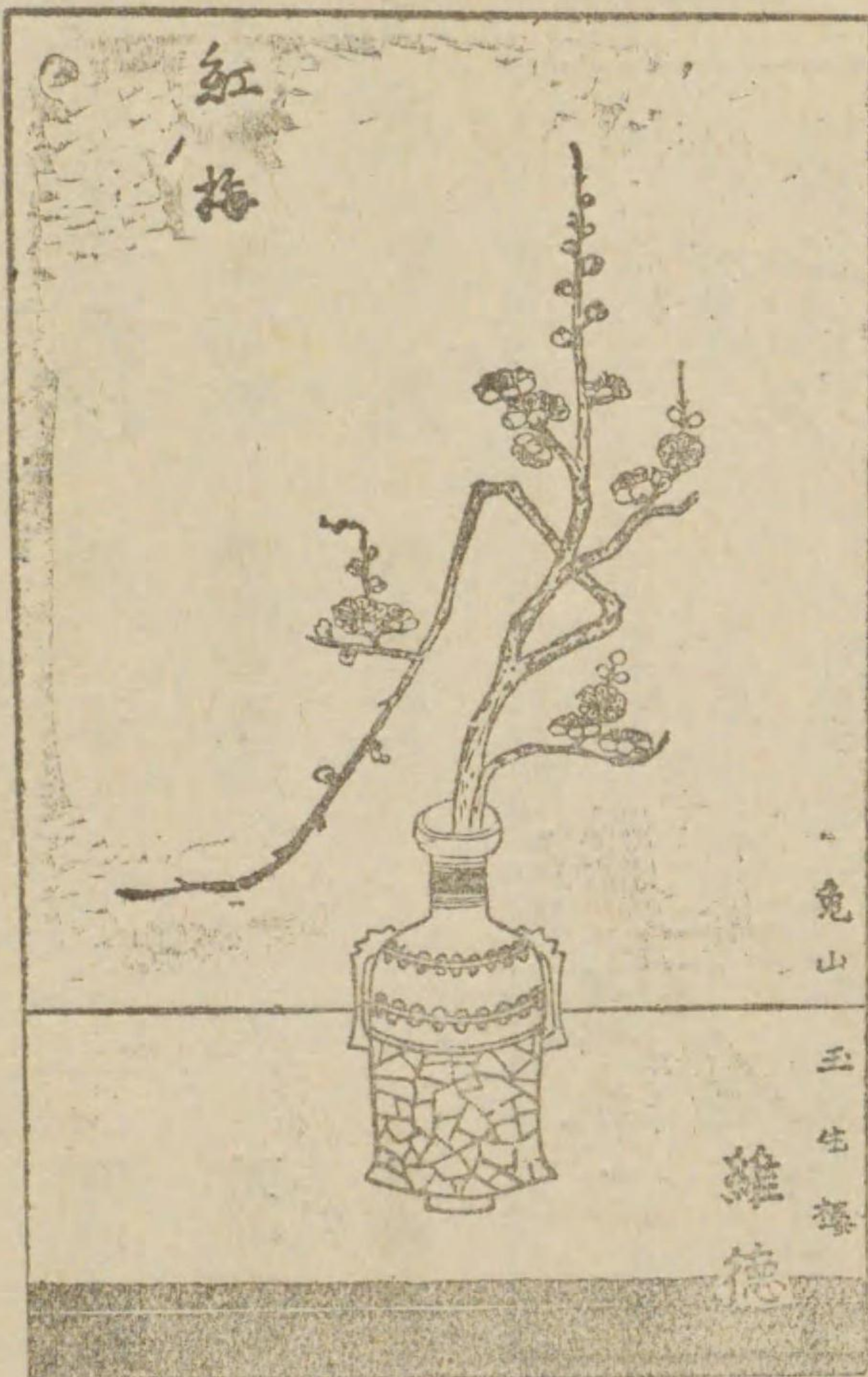
二四三七 寫本 一冊

古流生花四季百瓶圖 是心軒一露

安永七年正月自序

二四三八 版本 三冊

古流生花四季百瓶圖



外題が古流と附けてあるあら、大正の當今東京にある古流と間違つてはならぬ。本書は松月堂の系統である。本圖のウメは斯道で秘傳と云つてゐる女割を現さんとした理想の圖と思はれる。後進者はウメを瓶に挿す場合、自然の恰好があれば兎も角、不自然な女割を殊更に作る必要はないと思ふ。

插花故實化 渾沌子

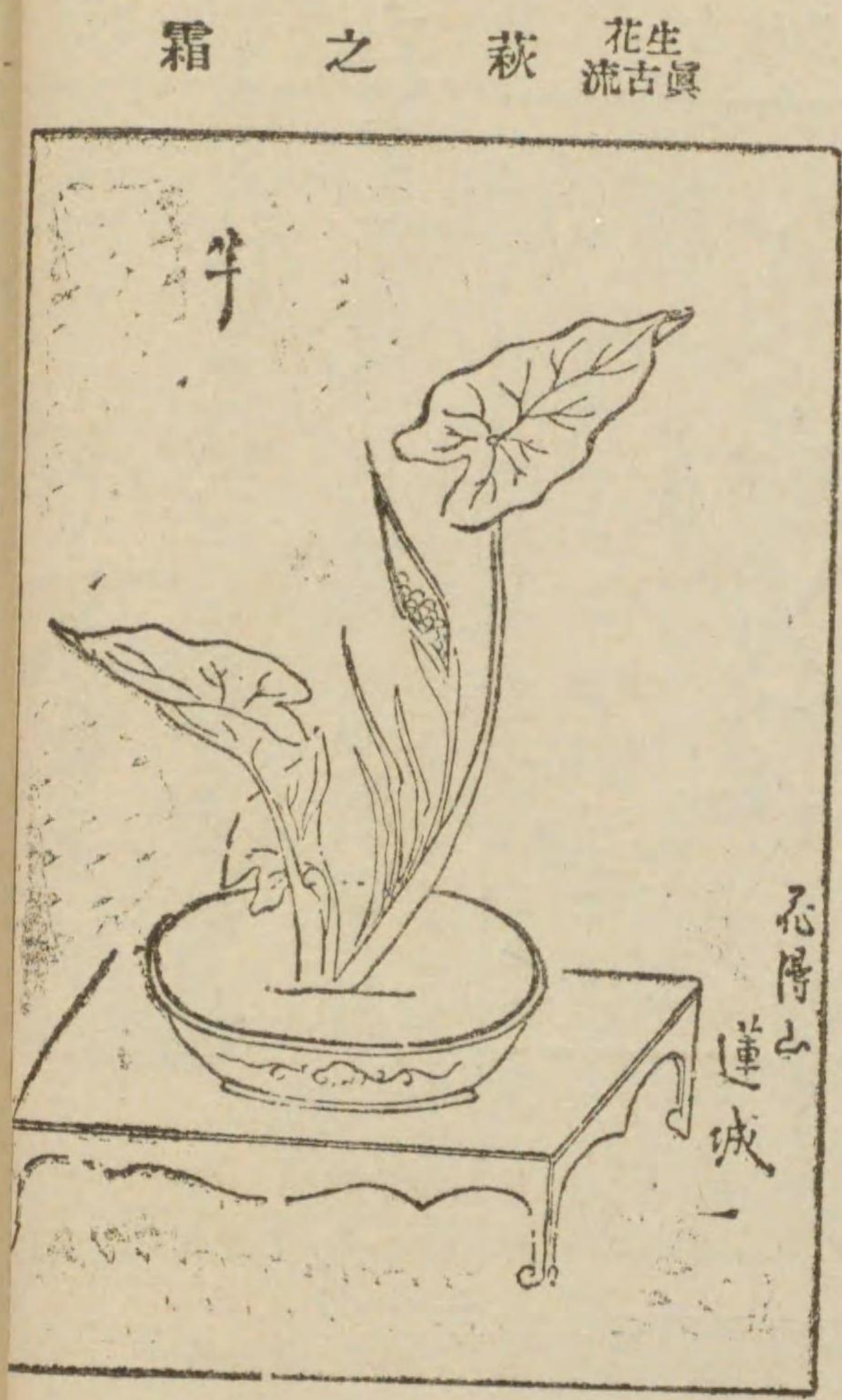
安永七年

二四三八 版本 一冊

附言 文政十三年『即席生花手引草』と改題して出版された。



插花萩之霜	花樂堂	天明六年七月自序	二四四四	版本	四冊
草木出生傳	五大坊卜友	天明六年七月	二四四五	版本	一冊
源氏插花碑銘抄	龍子	天明五年初冬	二四四五	版本	一冊
立花傳書	竹田可竹	天明六年四月廿三日	二四四六	寫本	一冊
禁忌之卷	明鏡堂	天明六年六月	二四四六	書寫	一卷



本書の花圖は全部通じて曲線の派手でなく、自然に近い恰好形である。流名が真に古い流儀のやうに思はれるが、さうとも限らない。他にも又明治の末、大正の初に何々古流と澤山の肩書附古流が出来たけれど、真に古いと思ふのは護命僧正の流れを汲む一流であらう。

生花傳書	明鏡堂	天明六年六月	二四四六	寫本	三冊
真古流萩之霜	從心軒の跋あり	天明六年九月	二四四六	版本	八冊
插花口傳記	明鏡堂中村繁義	天明七年春	二四四七	寫本	一冊

◎天明四年は百十八代 光格天皇の御宇、徳川十一代家齊將軍の時にして、老中松平定信(白川樂翁)吉宗の遺法に従ひ、大いに前代の弊政を矯正し、幕政再び振ふ。それより四十餘年間世の太平なるにつれ、文學藝術非常に進歩す。随つて花道に於ける著書の數も多し。この頃高山彦九郎、蒲生君平、林子平などの志士出で、皇室の式微をあげき、尊王論益々諸方に弘まる。林子平の六無の歌「親もなし妻もなし子なし版木なし金もなければ死にたくもなし」

生小篠二葉傳	五大坊卜友	寛政元年六月	二四四九	版本	三冊
松月堂古流傳書	龜齡軒在印	寛政元年神無月	二四四九	寫本	一冊
活花圖大成	桂月園	寛政元年	二四四九	版本	二冊
附言	花圖の枝振に無理な所がない。				
生花出生傳	初編 後編 五大坊卜友	寛政二年八月	二四五〇	版本	四冊



花 範 小 言 耕雲齋撰

生花出生傳圖式 五大坊卜友

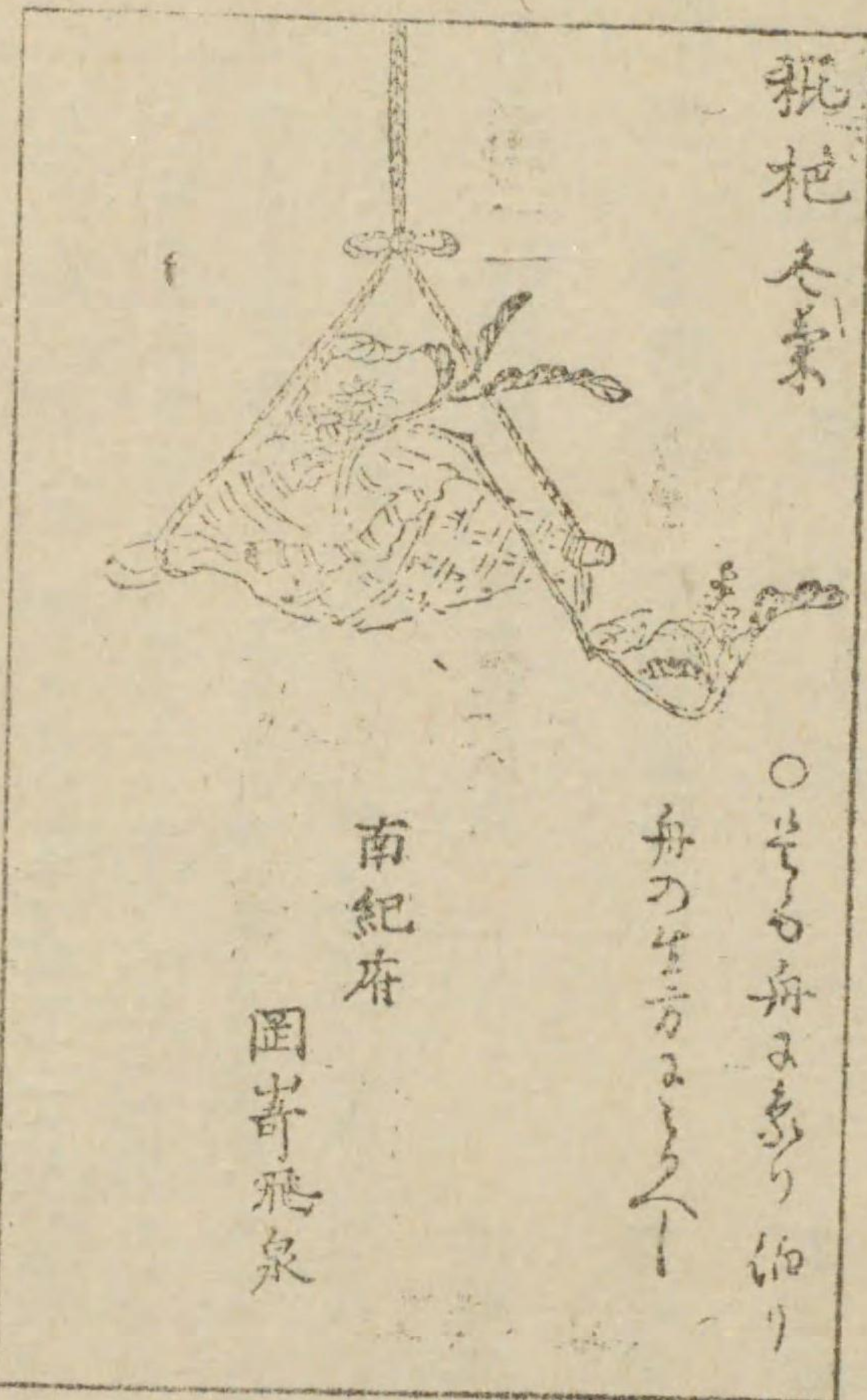
寛政二年九月

二四五〇 版本 一冊

二十

寛政三年一月の序あり 二四五一 版本 一冊

生花出生傳圖式



○そも舟もあり泊り

南紀府

岡寄飛泉

一節に『釣瓶の類其外色々の釣花器を用ゆるもみな釣舟のこゝろを以て花を生けなす也(中略)蔓ものなどの類は下へ垂るゝものゆへ釣花器に生くる。是を所詮のもの云ふべし。然れども片々よることなし。直ぐきものを生くるとも自然の姿を生けなすに論なし。宜しきに従ふべし。』云

遠州浮草記大意

法持坊茶道の生花極秘書

松月古流傳書

寛政三年仲秋

二四五一 寫本 一冊

寛政三年

二四五一 寫本 一冊

寛政四年仲冬日

二四五二 寫本 一冊

伊勢物語

寛政五年十一月

二四五三 版本 一冊

插花故實集(上中下) 龜齡軒莎來

寛政五年の序あり

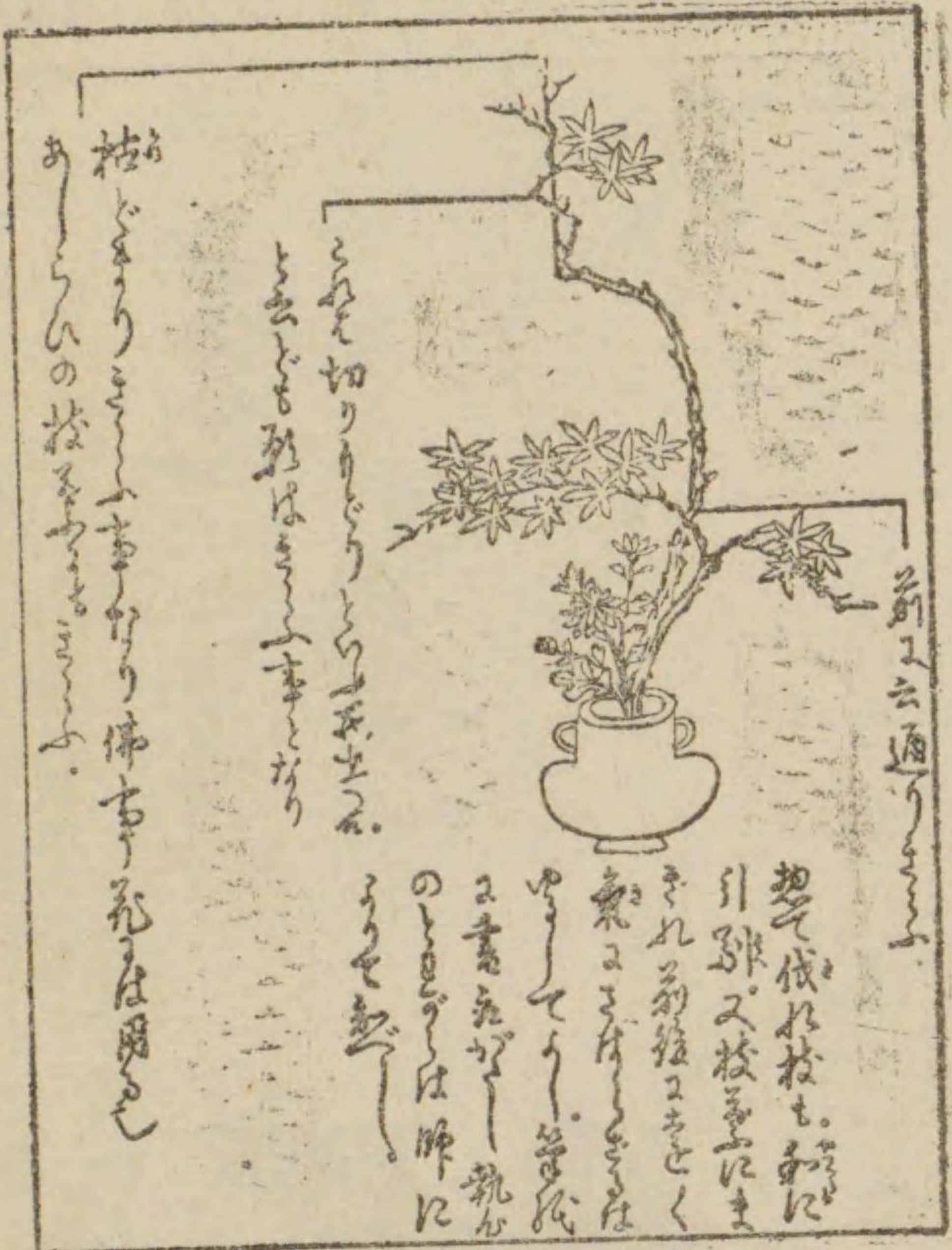
二四五三 版本 三冊

生入華葦芽 瀬丸齋一可

寛政六年九月上旬

二四五四 版本 四冊

生入華葦芽



圖中『前に云ふ通りさらふ』とは枝と枝とが交又して十文字になるを云ふのである。『これは切りもどり云々』とは真心の位置に在つても小枝なるがゆるに、成長しても真心となるべき性質を備へてゐないとの謂である。『惣て伐れ枝云々』とは正面から見ても十文字に見ても一方から見ると十文字に見えぬくらゐならば差支ないとの意味である。

附言 本書は『生花初心傳』の改題である。

二十一



古流 諸國百瓶圖

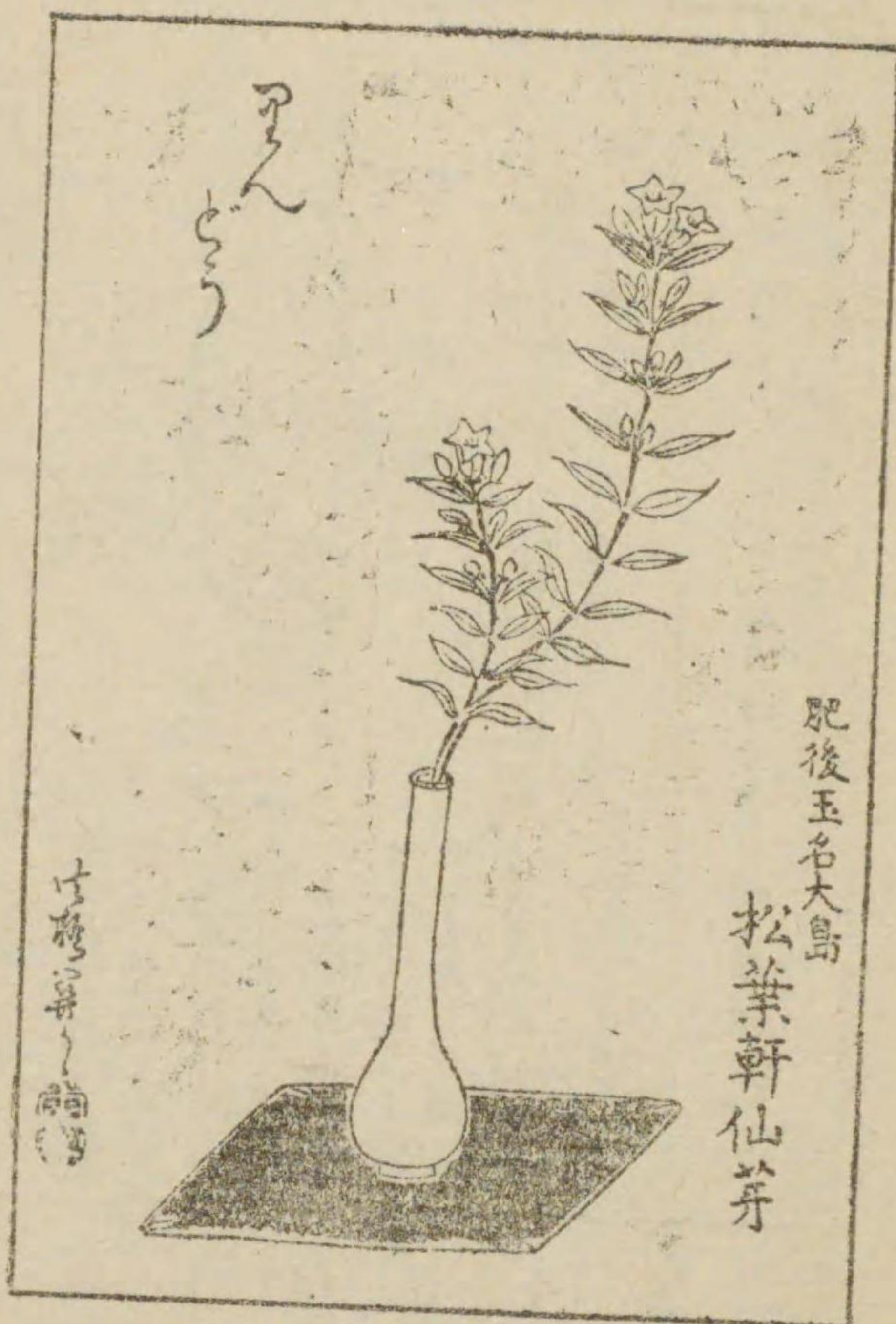
龜齡軒莎來

寛政六年

二四五四 版本 三冊

二十二

古流 諸國百瓶圖



肥後玉名大島

松葉軒仙舟

けいせいのしるし

本書も松月堂の系統である。此の當時の花形は全部通じて無理がなく、何れも洒落な生け方である。枝先の中心に配置されたのと左或は右に枝先が退いたのであるが、皆相當に納まつてゐる。しかも現今世上の松月堂古流の花形とは違つてゐるやうに見える。

抛入花薄精微

得實齋 千葉萬水

寛政七年七月

二四五五 版本 三冊

相阿彌流生花極秘傳 泉坊法惠

寛政七年

二四五五 寫本 一冊

生花之傳 松井正之の寫したるもの

寛政八年二月

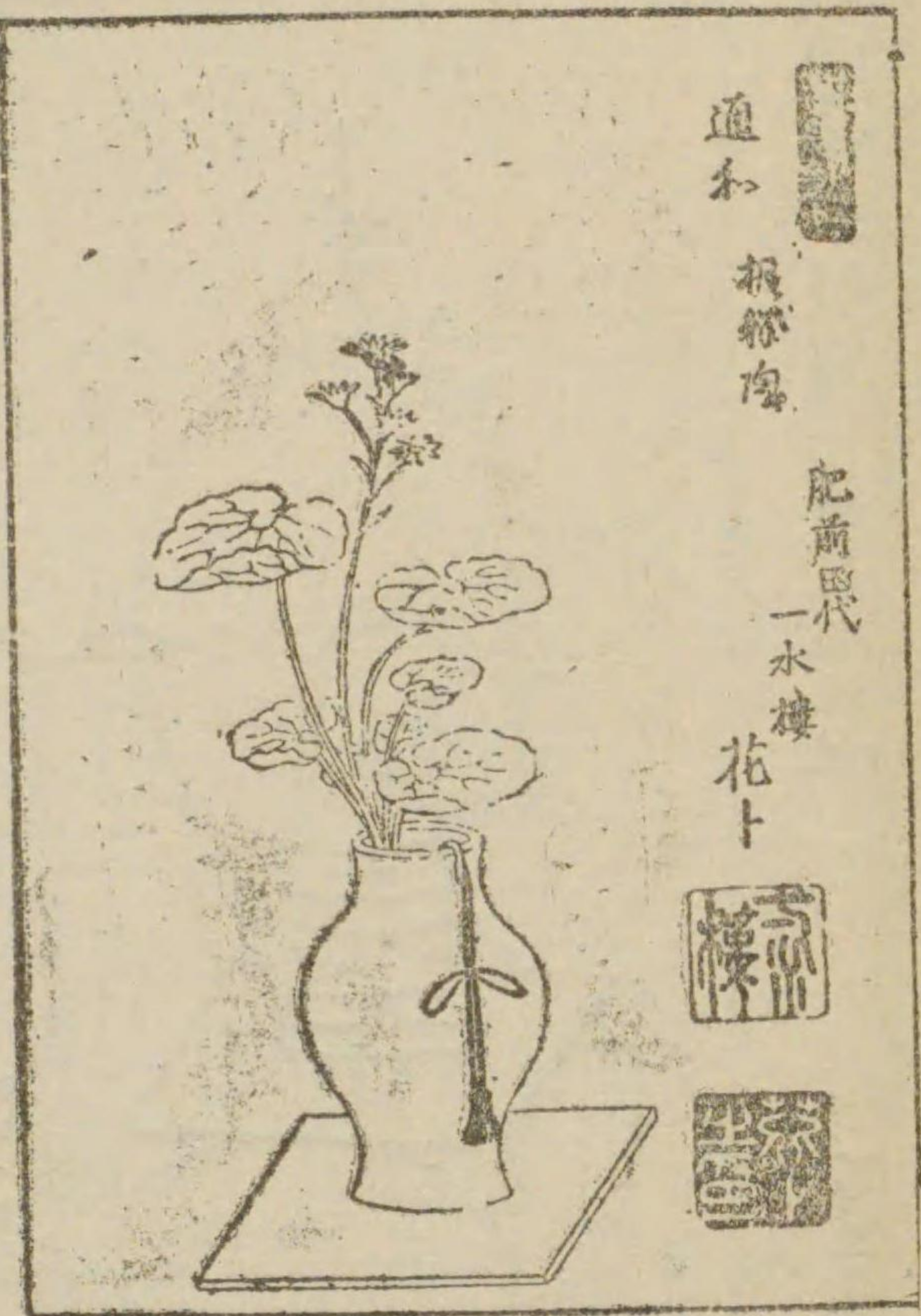
二四五六 寫本 一冊

生花奥儀抄 五大坊卜友

寛政八年六月

二四五六 版本 一冊

抛入花薄精微



通和

振筆傳

肥前長門

一水樓

花卜

様

様

書中に掲載せる花器の悉くは、前方に飾り總が附けてある。著者涉獵の書籍中、未だ他に類を見ない。明治の末、大正の現今では、花會に於て他流の者迄が之を真似てゐるのを見る。明和五年發兌の『抛入花薄』と共に花形は曲線でなく自然に近す。

八代流百花選

橘湖齋白龍

寛政八年の跋あり

二四五六 版本 一冊

挿花帳秘録

九阜堂一鶴

寛政十年二月

二四五八 寫本 二冊

瓶花群載譜

十樂房

寛政十年夏

二四五八 版本 一冊

挿秘傳圖式

風鑑齋

寛政十年菊月末

二四五八 版本 五冊

庸軒流生花秘書

古儘庵

寛政十年十月

二四五八 寫本 一冊

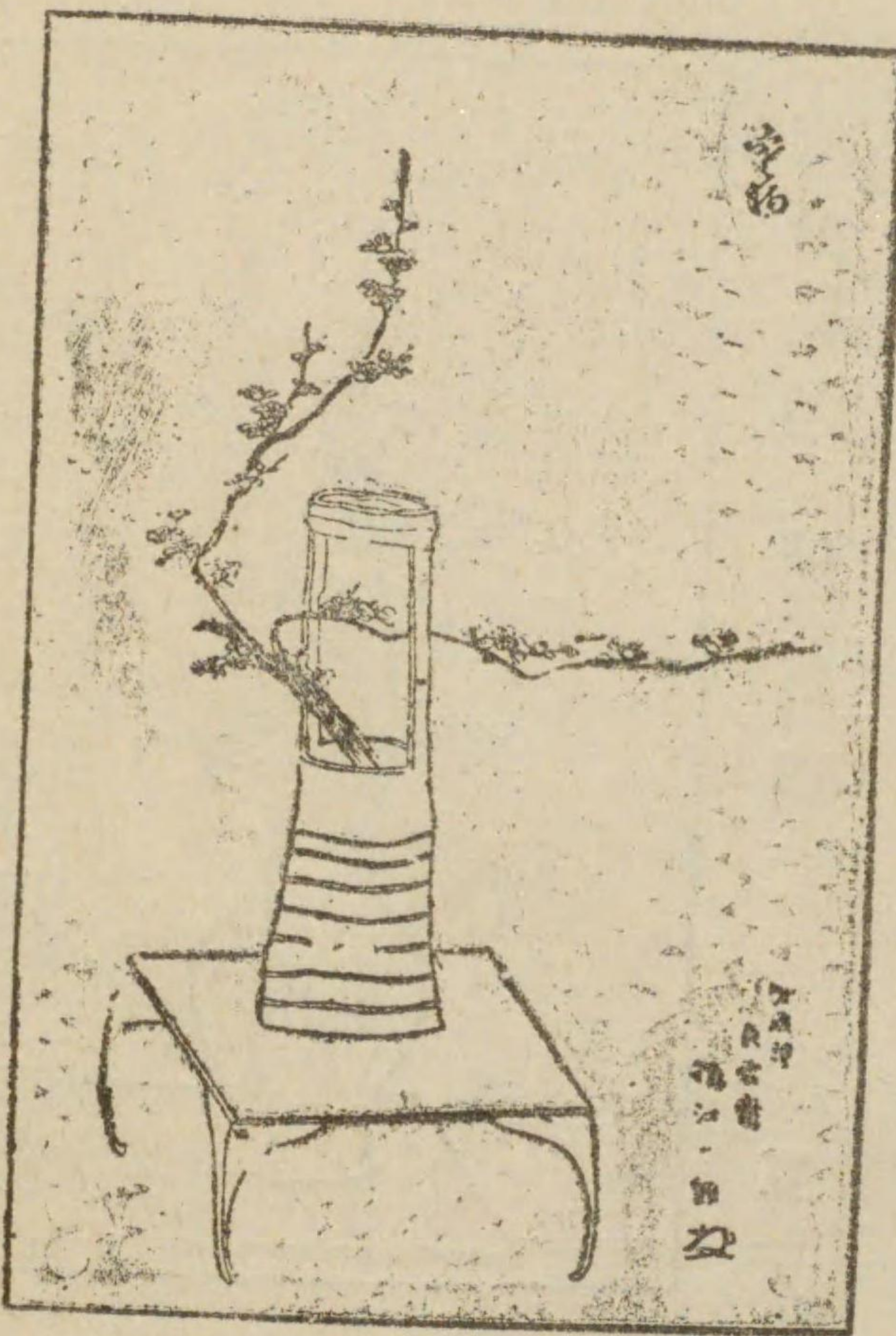
二十三



生花前卷口傳書 春古洞齋  
 生花 東向 五大坊卜友  
 生花傳寫書 方圓舍器水  
 插花衣之香 貞松齋一馬

寛政十年 二四五八 寫本 一冊  
 寛政十一年春 二四五九 版本 三冊  
 寛政十一年 二四五九 寫本 一冊  
 寛政十二年庚申正月 二四六〇 版本 四冊

插花衣之香



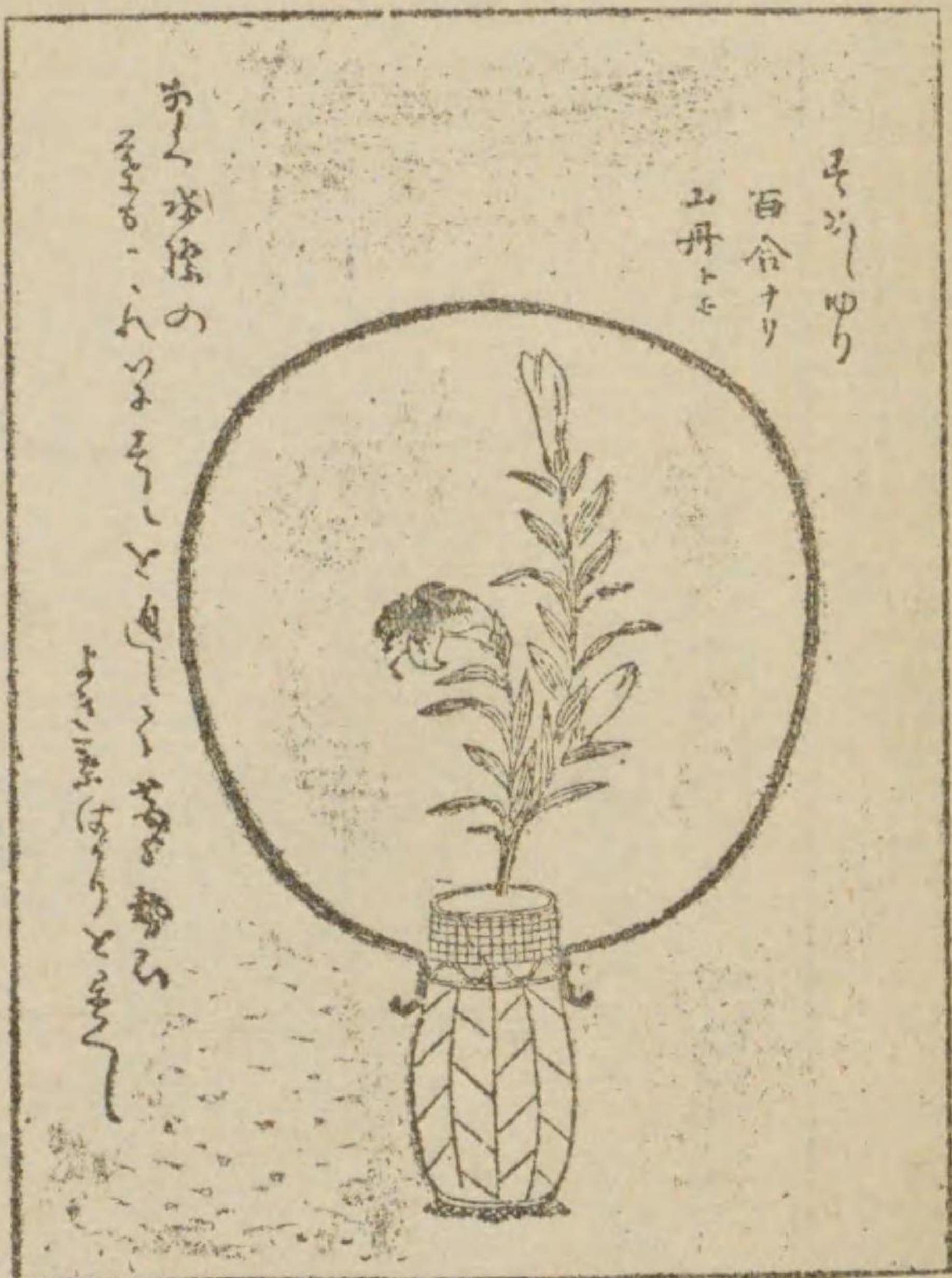
本書は花圖のみであるが、規矩に當徹めようとして枝幹に技巧を加へてある。以後刊行せる版本の花圖は次第に枝を撓めることに巧となり、従つて様々の恰好なのが本流の特色である。傳へ聞くに本書の著者は非常に器用な手腕家で、ウメモドキの如き脆き枝を工夫して自由に撓めたと云ふことである。

青山御流 活花手引種 桂月園泰雅

寛政十二年孟春自序あり

二四六〇 版本 五冊

活花手引種



本著者は後進者を導くに親切で、圖の如きは何れも亂雑な花の姿と、之が整然とした花の形とを同種の器物に納め、各圖に前記整雜二個宛對照した説明が附してある。上圖は整然たる方のものである。全體の花形に技巧が施してあるが、艶麗でない。

附言 本著者は後進者を導くに親切であつて、一種の花圖を作り之を示してあるから、初心者たるもの心して讀まれたい。

石州流生花奥旨

璧玉堂也の原著  
 權震堂門人寫す

寛政年間

寫本 五冊

插花衣之香并口傳書 貞松齋一馬

享和元年八月

二四六一 版本 五冊

生花早指南(後編) 奏壽齋

享和元年秋

二四六一 版本 二冊



附言 『插花早指南』の改題。

生花 實躰 はしめ草 春古洞齋輯  
青香齋校正

生花 百瓶 比都彌知草 春古洞齋輯  
青香齋校正

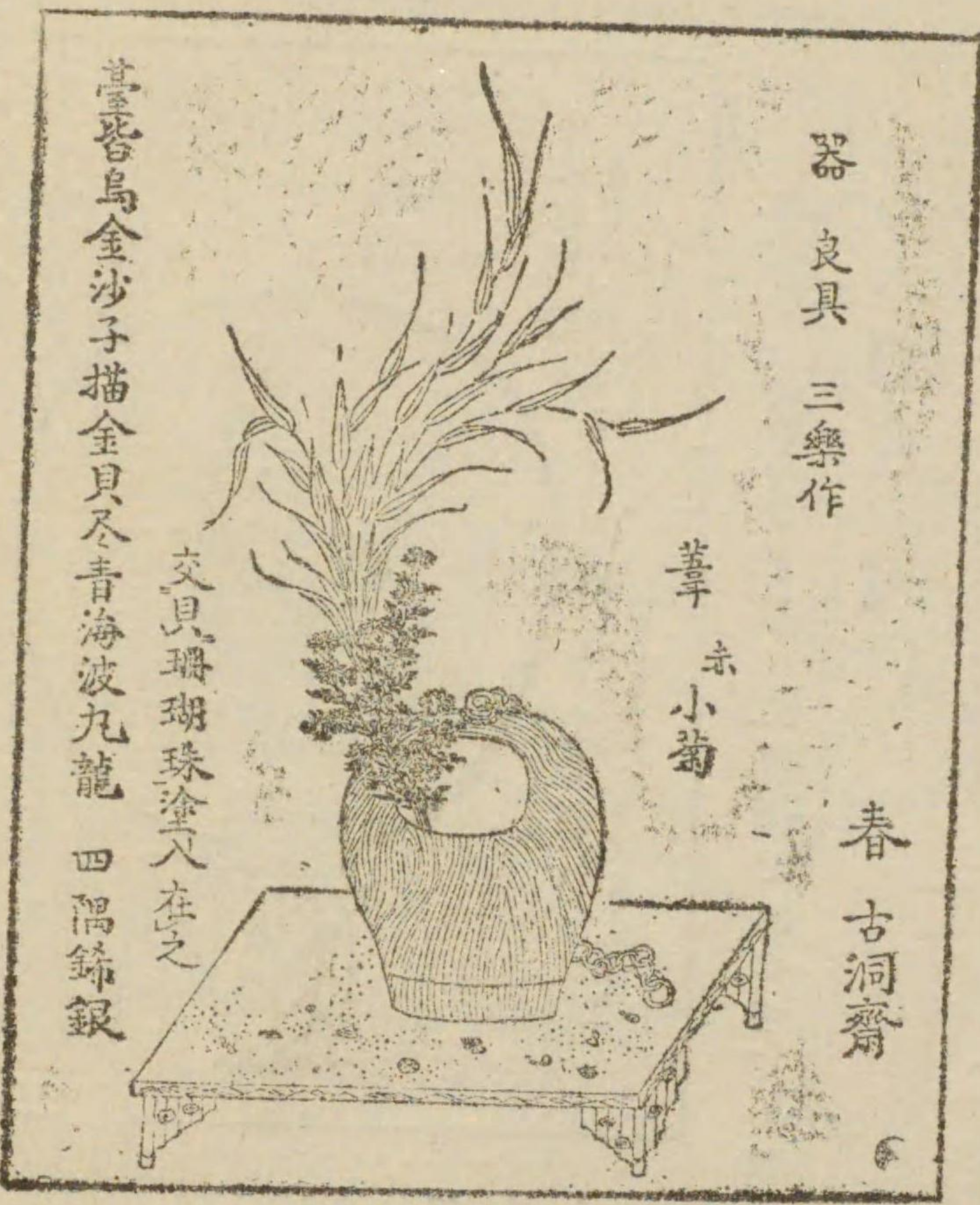
享和三年

二四六三 版本 三冊

享和三年

二四六三 版本 三冊

生花 百瓶 比都彌知草



器具 三樂作  
草 小菊  
交貝珊瑚珠塗入在之  
臺香島金沙子描金貝尽青海波九龍 四隅錫銀

燕子花百瓶圖式附録 五大坊ト友

文化元年 甲初夏

二四六四 版本 一冊

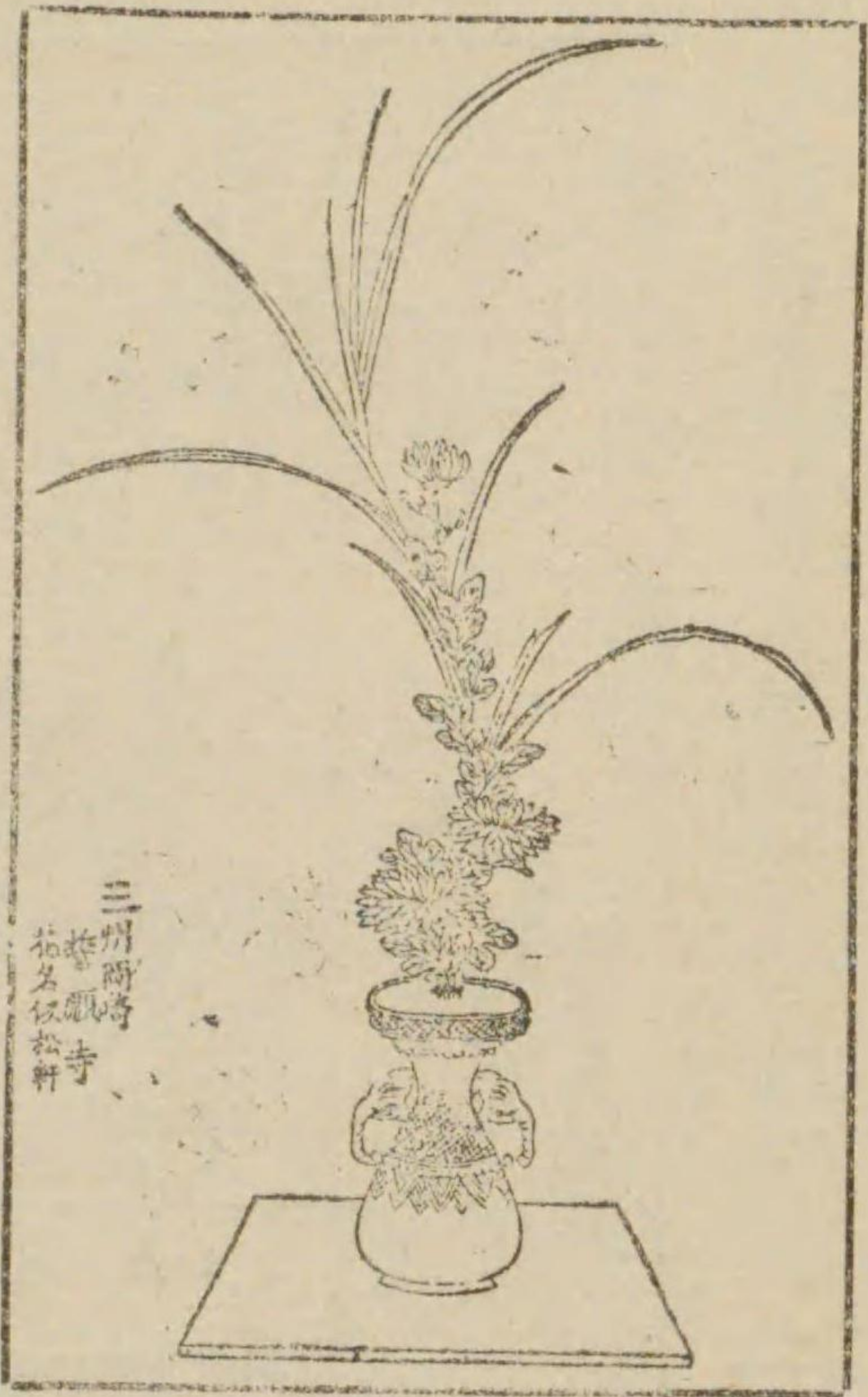
附言 本書は説明のみであるが『燕子花百瓶圖式』は未だ見當らない。

根本生花百華集 專定撰

文化元年

二四六四 版本 一冊

根本生花百華集



附言 池坊の花圖のみ五十瓶のせてあるが、元は二冊ものであらう。

遠州流插花百瓶之圖

文化二年八月

二四六五 版本 二冊

東山 流 四季賞花集 花棲庵

文化二年九月上浣日

二四六五 版本 二冊

插花衣之香附録 貞松齋一馬

文化二年十二月盡日

二四六五 版本 一冊



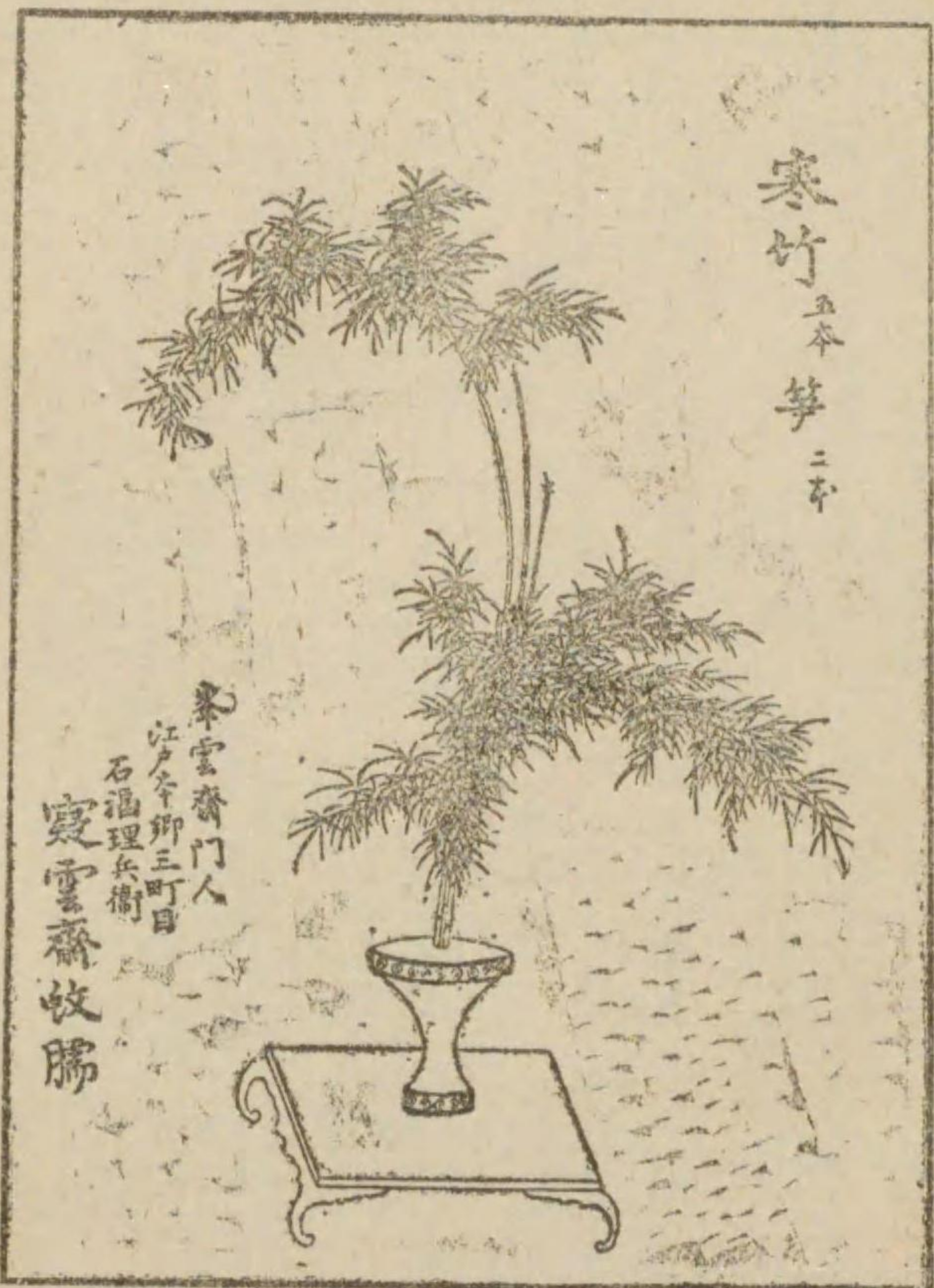
正風 遠州流 插花獨稽古 貞松齋米一馬誌

文化三年春 二四六六 版本 二冊

袁中郎流插花圖會 練雲齋編

文化四年九月 二四六七 版本 一冊

袁中郎流插花圖會



本書は古書中で畫も刻も悪いほうではない花形も亦納つてゐるのが多い。然し後進者が花圖の通りの寸法にするのは考へものであらう。上圖の如きは下方の小さい器物には花が大に過だる。通例花の丈が瓶器の丈の三倍までと書いてあるのに、本圖は五倍強である。勿論繪空事であるから心して見ねばならぬ。

袁中郎流插花圖會 練雲齋編

文化五年秋八月 二四六八 版本 三冊

袁中郎流插花圖會 嶺雲齋編

文化六年夏月 二四六九 版本 一冊

袁中郎流插花圖會 潭雲齋編

文化六年秋 二四六九 版本 一冊

袁中郎流插花圖會 峯雲齋編

文化六年秋 二四六九 版本 二冊

袁中郎流插花圖會 祥雲齋編

文化六年秋 二四六九 版本 一冊

附言 前記『袁中郎插花圖會』の各編は花形の圖のみであつて、圖中婉曲のものあり。

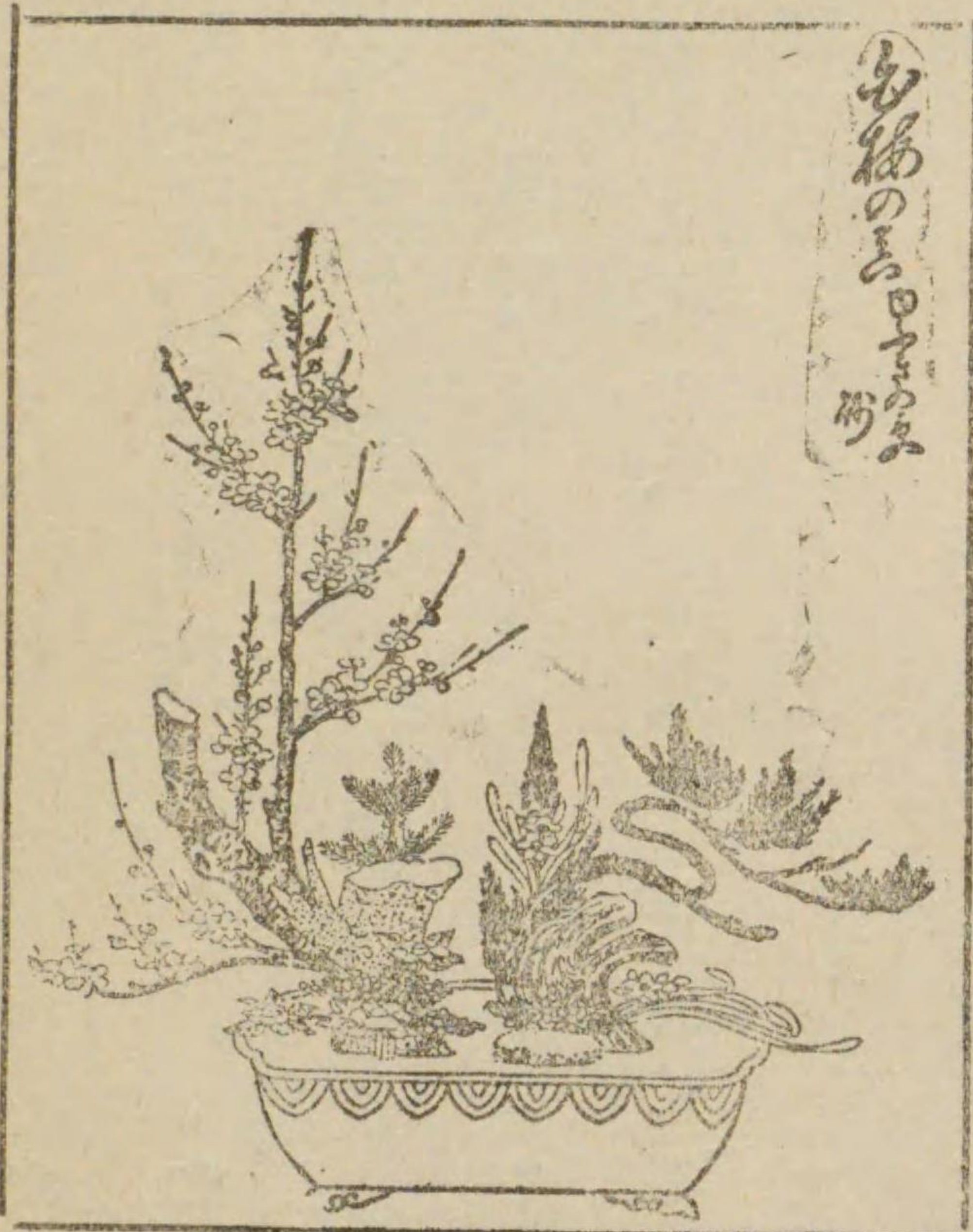
瓶史國字解 練雲齋註

文化六年秋 二四六九 版本 四冊

古今 立花手引草 花月庵誌

文化六年 二四六九 版本 一冊

古今 立花手引草



上圖は砂之物と云つて、器物に砂を入れることになつてゐる。立花の方法も古の方法は前述中の如きものであつたが、年経るに隨ひ變つて來た。現今は相當な幹(何回も使用)に枝を釘附にし、小枝或は花葉を細い針金で括つて一定の恰好を作るが、多くの場合船後光の如き正面本位である。



活花つゝらをり

文化七年臘月の序あり 二四七〇 寫本 二冊

遠州流插花初重之傳 本松齋門人

文化七年 二四七〇 寫本 一冊

去風流插花秘書剪紙 雲樹居

文化八年七月 二四七一 書寫 六折

好事出門壽 如 菴

文化八年九月廿四日 二四七一 版本 一冊

附言 古流、池坊、石州流、千家流、宏道流等の花形を記してある。

插花衣之香二篇 貞松齋一馬

文化九年小春 二四七二 版本 四冊

美目齋紅器

文化九年八月の序あり 二四七二 版本 三冊

附言 書籍の外題が取れてゐたが、源氏流の系統らし。

未生流 插花百花百瓶圖

文化九年 二四七二 版本 一冊

遠州流花生秘傳

文化九年 二四七二 寫本 一冊

附言 貞松齋米一馬の原書、萬年青、燕子花、竹器などを後年寫したもの。

遠萩原流生花禁忌 巖 亭

文化九年 二四七二 寫本 一冊

插花四季園 松柏齋一瓢

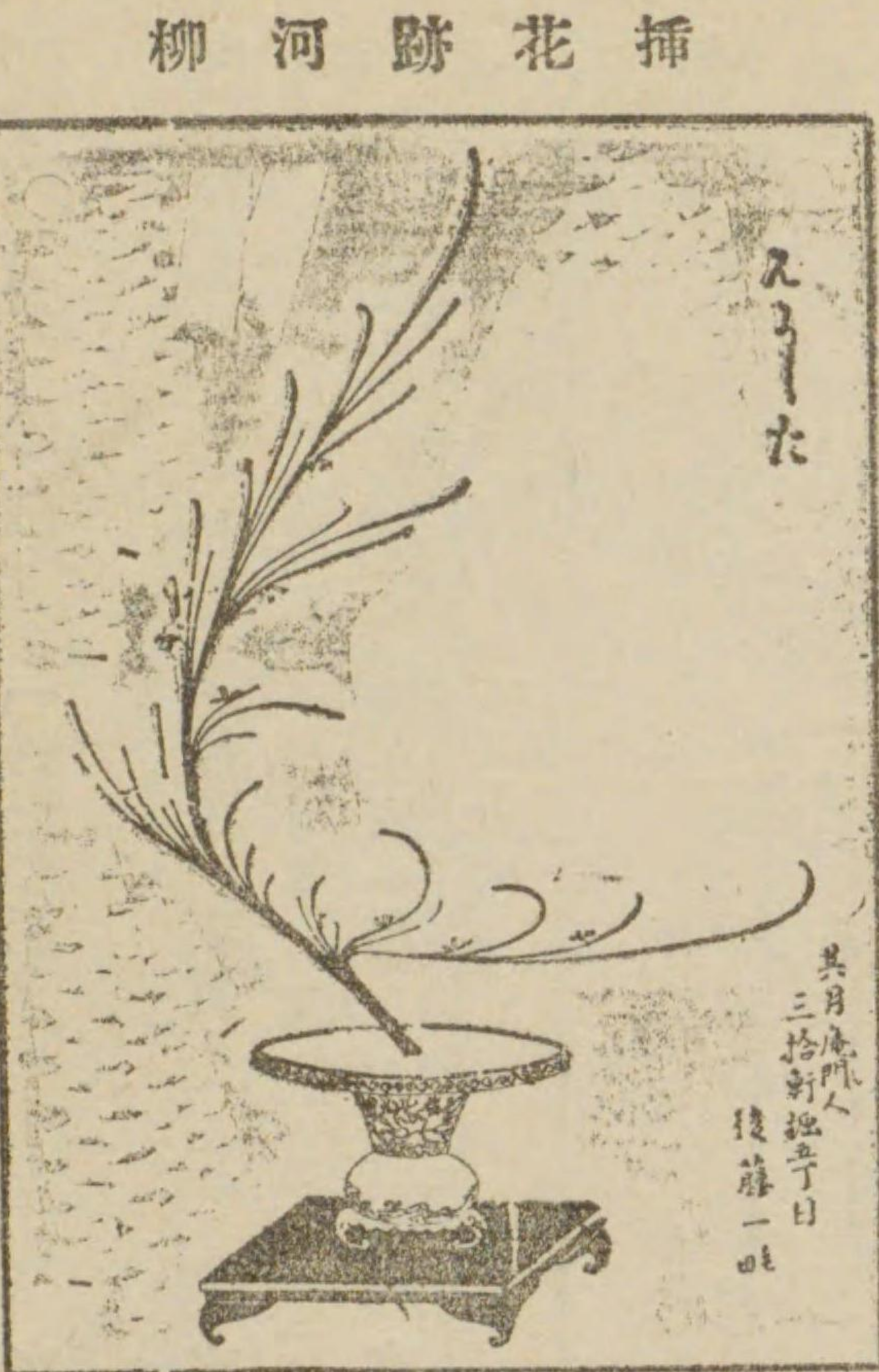
文化十年四月 二四七三 版本 一冊

美笑流 活花四季百瓶圖 秋香軒如水

文化十一年正月 二四七四 寫本 一冊

插花跡河柳 梅柳庵一雙撰

文化十一年初春 二四七四 版本 三冊



當時世間の風潮靜であつたから、花形も艶麗なのが流行し始めたものと思はれる。本圖の如きも草本の「エニシダ」を用ゐて随分派手に挿してある。繪であるが故に斯様な花形が作れるけれど實地では向つて中央より右方に出てゐる極細いのが分れ際で太くないと止まらない。

石州流 花臺傳書 四動軒  
井深傳龍吟抄

文化十一年七月 二四七四 寫本 一冊



美笑流 活花燕子花百瓶圖 秋香軒如水

文化十一年臘月下旬 二四七四 寫本 一冊

頌流 生花記 一陽齋芳祇

文化十二年 二四七五 版本 一冊

頌流 生花記附錄 一龍齋匹盛賀

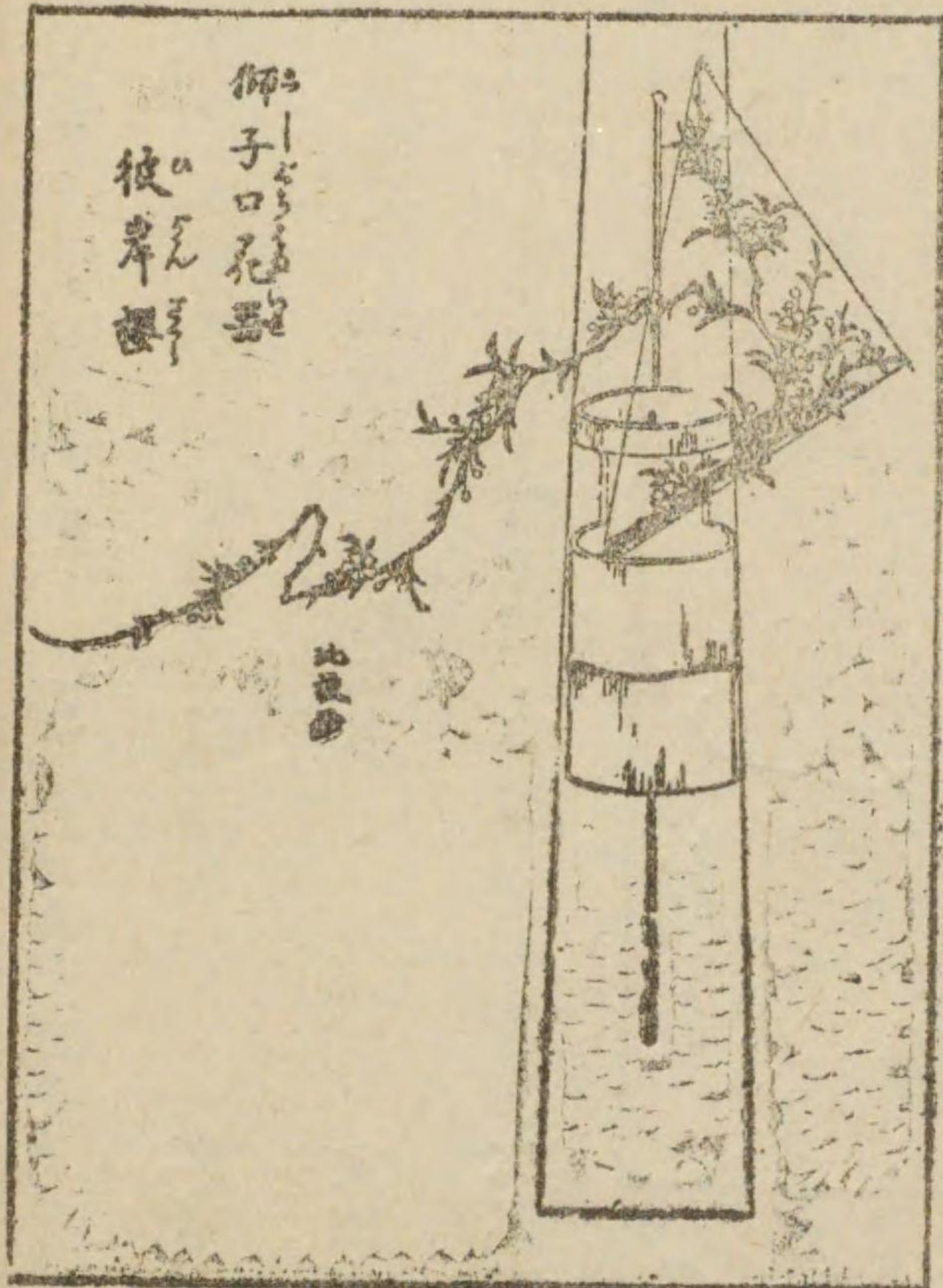
文化十二年三月 二四七五 版本 一冊

本朝 插花百練 未生齋一甫

文化十三年夏六月 二四七六 版本 一冊

口述速記

本朝 插花百練



本著者は初代であつて、晩年に失明したが其の後も弟子達に教へた。本書は盲人となつてから後の口述であつて、この流の理論の多くが易に基因してゐる。花形は多少の技巧を加へた姿である。本圖は客位の花形で、上方を天と云ひ、右方を用と云ひ、根元を留と云つてゐる。

生花ちよのまつ

松秀齋撰  
門人松一齋藏版

文化十五年三月 (文政元年) 二四七八 版本 四冊

四方の薫り 不濁齋廣甫

文化十五年春 (文政元年) 二四七八 版本 一冊

すみかねの巻

文政二年六月 二四七九 書寫 一卷

松月堂 古流 生花百瓶圖 五大坊雙蛾

文政二年秋 二四七九 版本 二冊

附言 『插花百瓶』の改題。

四季 遠州流插花百瓶 如月葎馬丈

文政二年 二四七九 版本 二冊

四季 草木 養活秘録

文政二年 二四七九 版本 一冊

附言 全國圖書館中東京帝國圖書館に在るのみ。良い書籍である。

源氏 瓶花規範抄 二齋堂自頼

文政三年 二四八〇 寫本 四冊

附言 四冊中享和年間のものあり。本書は東京帝國圖書館及び大阪圖書館に在る。

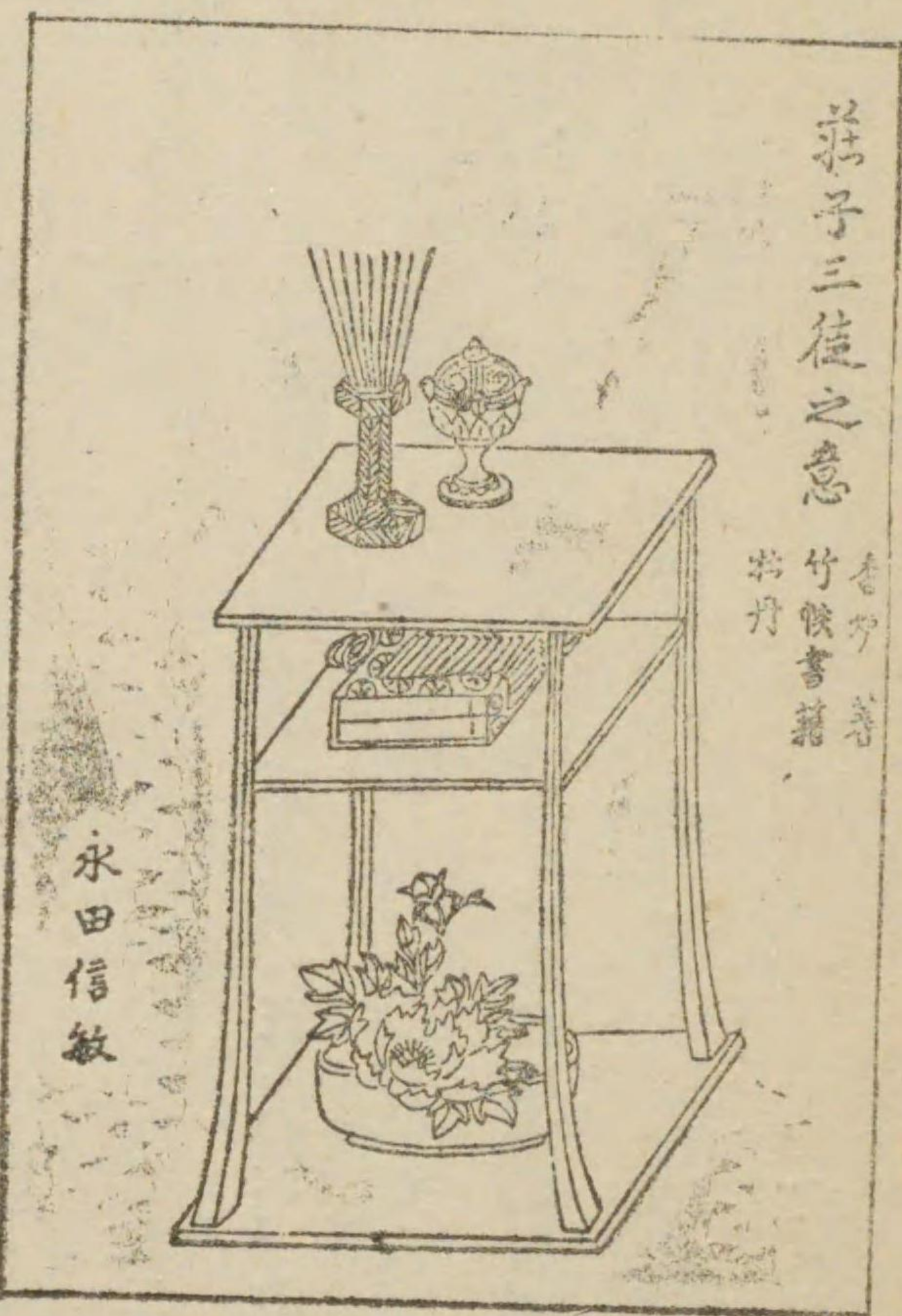
與物 爲春 一名古法插花會式の次第

文政三年 二四八〇 版本 一冊

插花櫻農香 未生齋廣甫

文政四年彌生下流 二四八一 版本 一冊





莊子三徒之意  
竹篋書箱  
牡丹

永田信敏

この時代以前にあつた様々の式法を圖で示したのが本書の内容である。本圖棚下の丸鉢に入れたポタンの形などは、明治の終、大正の初に世上『盛花』と云つて盛んに行はれた。大正元年の頃伊豫砥部の竈元が上圖の如き白地の丸鉢を作り始めたが、其の後各地の竈元でも模倣して賣り出した。

東山流禁忌之辨

得實齋傳來  
一峰庵花薫

文政四年十月

二四八一 寫本 一冊

東山流口傳覺書

得實齋傳來  
一峰庵花薫

文政四年十月

二四八一 寫本 一冊

東山流瓶花体添取合

得實齋傳來  
一峰庵花薫

文政四年十月

二四八一 寫本 一冊

插花極傳書拔

嶺松庵

文政五年正月

二四八二 寫本 一冊

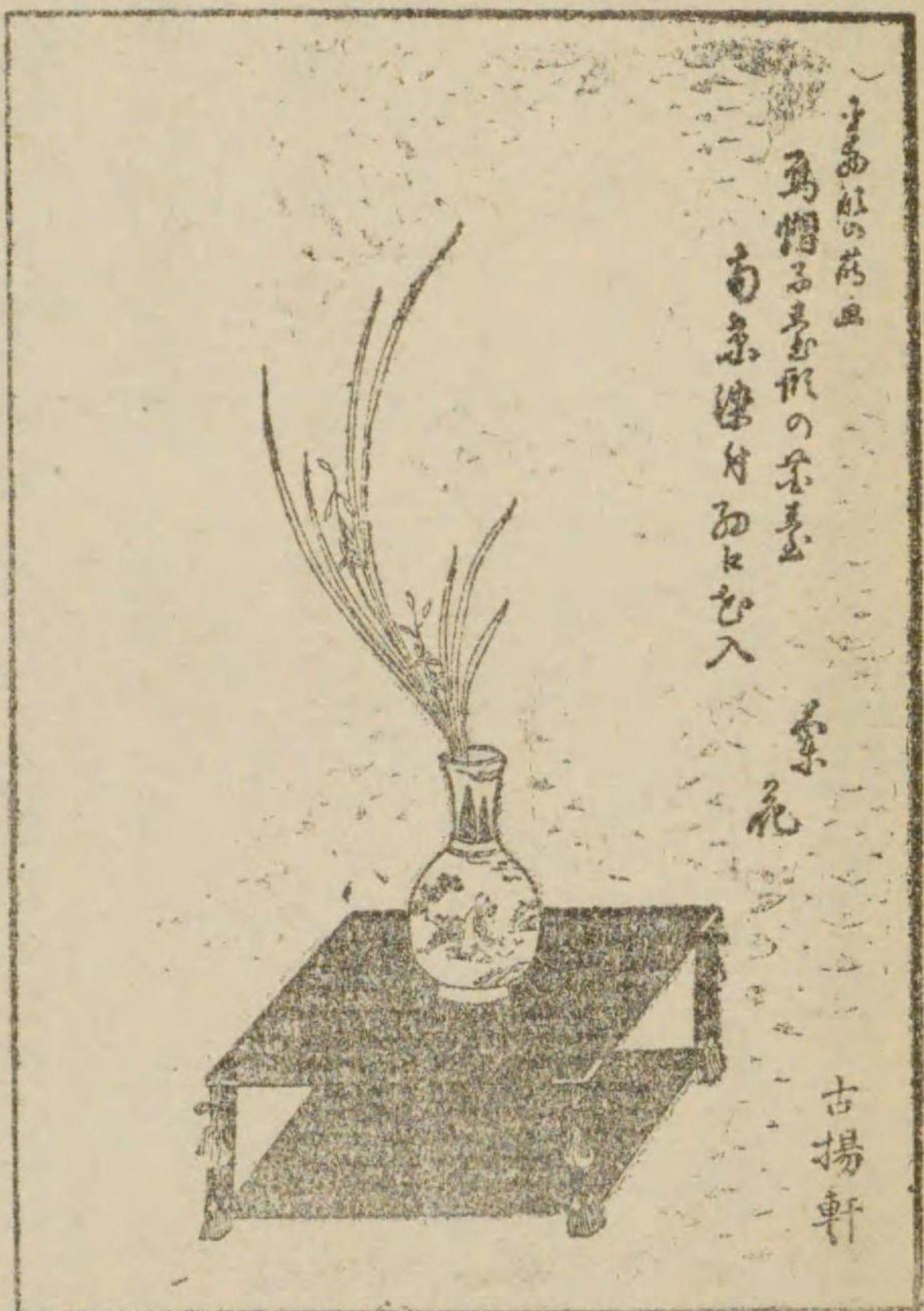
左のぶ具左

春古洞齋

文政五年二月

二四八二 版本 三冊

左 具 ぶ の し



春古洞齋  
南無邊付おとむ入

古揚軒

本書は花圖のみで説明なく、序の一節に『享和二年の秋九月浪花つむらの御堂のうちにして、我をしへ子ども集ひの席をひらきはしめて、百の瓶に花をいけたり』といふ。挿入の花圖七十有餘何れも品がある。當時花會に於て使用の器物は質素でないことが窺ひ知れる。

正風遠州流

住江岸松

岸松齋合校  
貞松齋

文政五年三月

二四八二 寫本 五冊

立花正道指南大全

文政五年八月

二四八二 版本 一冊

極秘傳之卷

文政六年三月上旬

二四八三 寫本 一冊

遠州流插花意匠

正風花矩

里松庵一壽

文政六年初夏

二四八三 版本 一冊

松月堂古流書

五代坊玉蛤の書

文政六年八月誌

二四八三 寫本 十一冊



附言 本書の内容、禁躰秘事圖繪、中央卓下挿圖、十二難組葉集解、分躰分領識、九品眞行艸卷、故流二重器活方、曲体減枝傳、増補兼備傳、五行七説、華王之卷、故流禁花類辨。

草 木 性 譜

舍人 清原重臣誌

文政六年仲秋

二四八三 版本 三冊

附言 花の出生を研究せらるゝ諸士は見て置くべき書である。

正門 百瓶圖

太田忠義の書寫

文政七年正月

二四八四 寫本 一冊

古流生花百瓶之圖

松盛齋理遊

文政七年正月

二四八四 寫本 一冊

附言 編者北陸地方廻遊中金澤市の廣岡氏にて見る。本圖は松盛齋の自畫と記してあつた。

遠州流挿花意匠

里松庵一壽

文政七年彌生仲日

二四八四 版本 二冊

茶席挿花集

芳亭

文政七年三月

二四八四 版本 一冊

花 曆 百 詠

閩中翁榴庵

文政七年暮春

二四八四 寫本 二冊

生花獨稽古

版本 一冊

附言 書中文政七年<sup>甲</sup>除夜の文字あり。龜齡軒の著の改題ならん。京都圖書館にあり。

小堀生花師説聞書 一紅齋

文政七年冬

二四八四 寫本 一冊

挿花柳の緑

青柳庵一州 千松庵一樹

文政八年正月

二四八五 版本 四冊

四季草木養活傳

松林堂藏版

文政九年二月

二四八六 版本 一冊

住の江卷

貞松齋一馬 貞草齋一蝶

文政九年十月

二四八六 寫本 五冊

東肥群芳百瓶

龜齡軒斗遠

文政九年抄冬序あり

二四八六 版本 二冊

未生流赦書

松壽齋

文政九年

二四八六 寫本 一冊

挿花切紙口傳抄

貞松齋一馬 貞草齋一蝶

文政十年八月

二四八七 寫本 六冊

挿花常盤艸

未生齋廣甫

文政十一年春

二四八八 版本 一冊

附言 本書はバラ<sup>ン</sup>一式の花圖を掲載したものである。

三十六花選相老帖

龜齡軒斗遠

文政十一年五月

二四八八 版本 一冊

挿花竹田百瓶

龜齡軒斗遠

文政十一年五月

二四八八 版本 二冊

源氏表裏之卷

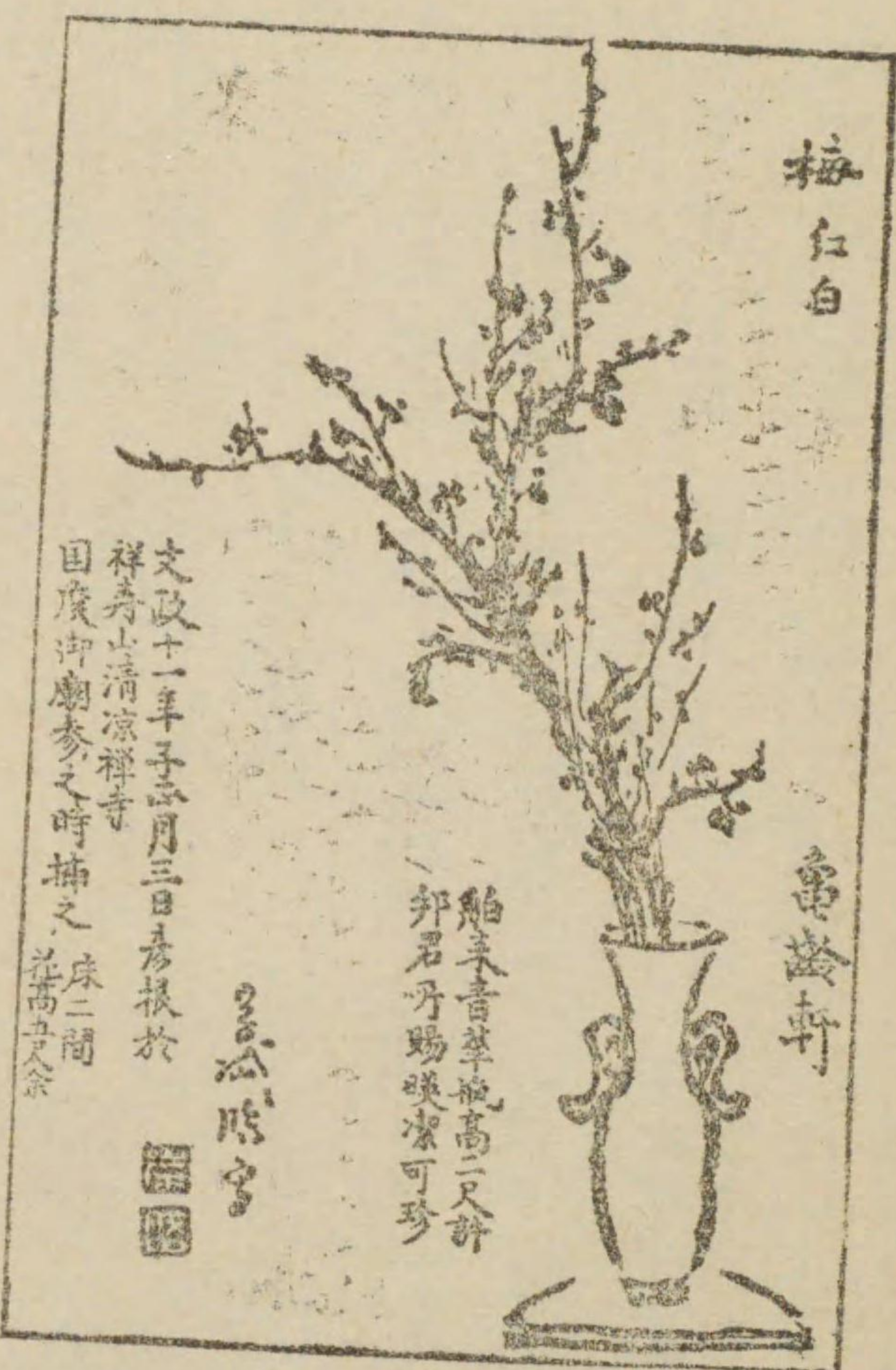
和田移春齋

文政十一年

二四八八 寫本 二冊



帖老相選花六十三



文政十三年三月三日  
祥壽山清涼禪寺  
因廣御廟参之時挿之  
在而之  
船  
舟  
邦  
君  
乃  
賜  
嘆  
可  
珍

梅紅白

魚出軒

本書の一節に、  
「爵蟬のよに、見るにあかず、ともし  
きものかぞへあへぬ中に、水草の花  
ばかりめでたき物はまたなかりけり  
さるまゝに春はかすみにまじりて家  
路をわすれ、秋は露にぬれてくる、  
をかこち、こゝろ／＼にめではやす  
あまり瓶にさし籠にいでて床の邊に  
ならべて色香をきそはせなとする事  
なむはやりける。」とあり。

三十八

插花早合點

交柳庵  
交草庵跋

文政十二年

二四八九 版本 一冊

附言 本書は『插花道しるべ』の改題。

松月堂古流傳書

龜齡軒

文政十三年三月十八日  
(天保元年)

二四九〇 寫本 一冊

活花道陰之卷

百ヶ條目録

湖秀庵

文政十三年春  
(天保元年)

二四九〇 書寫 一巻

附言 本書は相生卷、小篠之卷等を後年寫したものである。

即席生花手引草

渾沌

文政十三年春  
(天保元年)

二四九〇 版本 一冊

附言 安永七年刊行『插花故實化』の改題である。

本書に載せてある花形は何れも自然に近い

姿であるが、器物は悉く變つてゐる。一例

を云ふと、琴の龍口(裏の穴)から花が出て

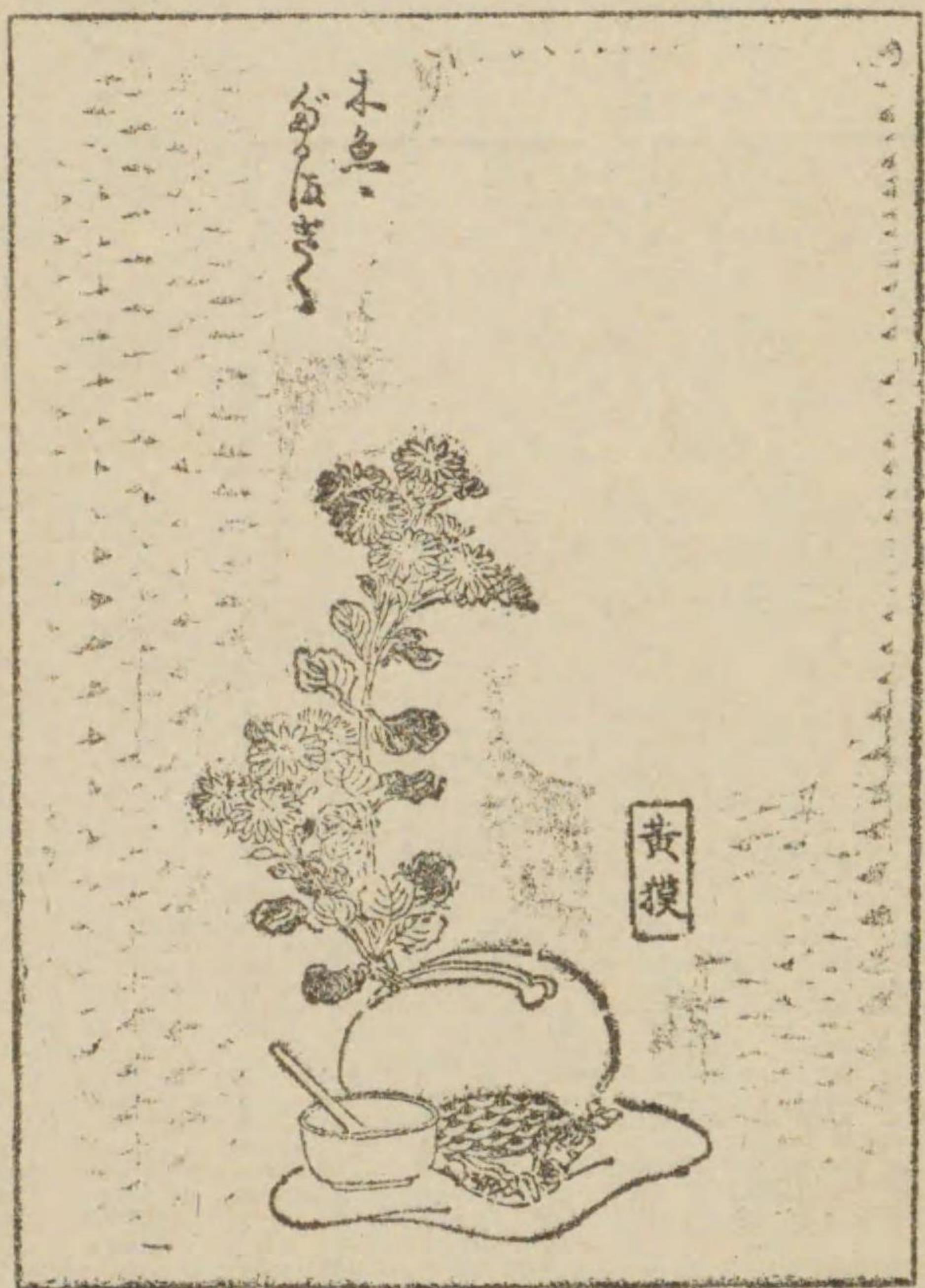
ゐたり、鍋に花を生けたり、傘に花を挿し

たり、重箱に花を活けたり、其の他有りと

あらゆる物に付けてあるのが内容の特徴で

あらう。多くの花書中稀に見る意匠である

草引花生席即



黄櫻

からころも 青々軒藏版

文政十三年初夏  
(天保元年)

二四九〇 版本 一冊

附言 本書はカキツバタ一式の花圖である。

插花蓬の香

天保二年三月序あり

二四九一 版本 一冊

◎天保二年は百十九代

仁孝天皇の御宇、徳川十一代家齊將軍の時にして、晩年より世一般奢侈に耽り、すべて形式に陥り、

三十九



財政窮乏し、幕府漸く衰兆を現す。天保七年以來饑饉、大鹽の亂起。徳川家慶十二代將軍となり、老中水野忠邦、松平定信の施設に従ひ種々の新令を出して改革せんとして失敗。ついで外人の來朝さまり、幕府の基礎愈危し。

嫩之卷 陽國齋誌

天保三年五月下旬 二四九二 寫本 一冊

草木養之卷 陽國齋南枝

天保三年八月 二四九二 寫本 一冊

插花衣之香三編 貞松齋米一馬

天保四年三月 二四九三 版本 四冊

插花衣之香三編



書中の圖は曲線の美を發揮させた事著しく、古來未だ斯様の花形を見ない。本著者の器用に任せて枝に曲を盡したものであらう。浪花の地ではこれを江戸遠州と稱した。一時斯界を風靡したやうにも思はれる。貞松齋齡七十を數へて第三編を著し、此間幾多の弟子に傳へた形跡がある。

正風 松之翠再編 巖松齋一鵬

天保四年八月の自序あり 二四九三 版本 四冊

古流生花門中百五十瓶 關本理遊

天保五年正月 版本 二冊

插花濱名之海 川松齋一鳥

天保五年秋 二四九四 版本 三冊

生花早滿奈飛 曉鐘成

天保六年正月 二四九五 版本 十冊

◎曉鐘成は初代を木村兼葭堂といひ、大阪の戯作者、曉の鐘成は其の狂名、醬油醸造家泉屋太兵衛の子、丹波福知山に遊び、人民のために訴狀を紳し、萬延元年(二五二〇)十二月十九日獄中に死す。年六十八。著書數種あり。二代は初代の門人にして、大阪の藥種商、安藤庶友と稱す。安政六年(二五一九)四月歿す。本書上梓の年より推して、その孰れなるかを斷じ難し。兎まれ、専門家ならぬ文人の著述は珍さすべきであらう。

華三才 齧 未生齋廣甫

天保六年如月の序あり 二四九五 版本 一冊

諸家活花通 新々亭流花撰

天保六年 二四九五 版本 一冊

未生流 花術三才卷 未生齋廣甫

天保七年夏卯月 二四九六 版本 一冊

伏陽館御流 生花初傳之卷 富喜軒仙鯉

天保七年五月 二四九六 寫本 一冊

插花春の錦 蠣崎公和撰

天保八年 二四九七 版本 一冊



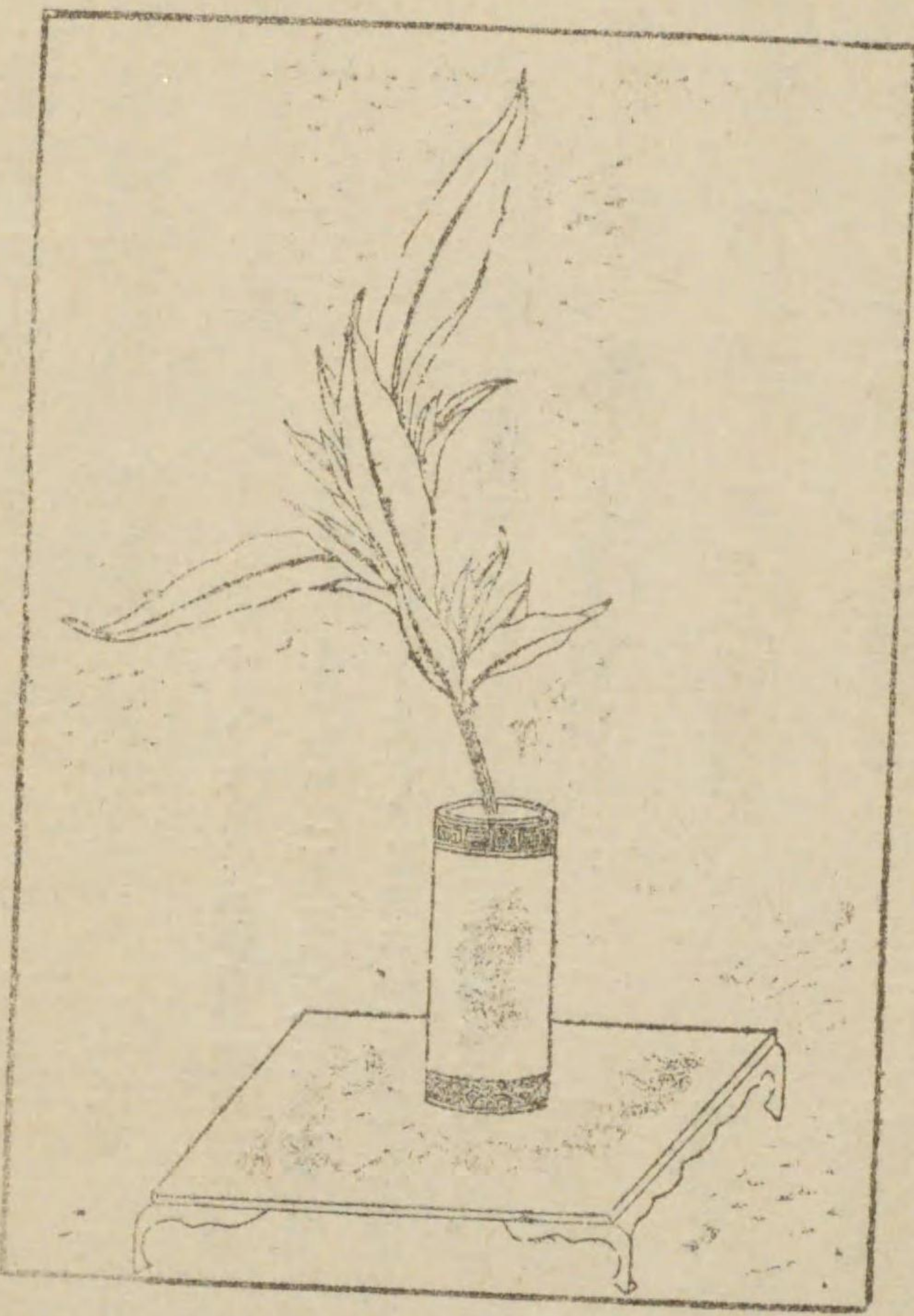
源氏六帖之花形  
及び裏中之卷  
曉雲齋遊龜

古流生花再選百瓶圖  
松盛齋理遊

天保九年  
二四九八 寫本 一冊  
天保十一年六月  
二五〇〇 版本 一冊

四十二

古流生花再選百瓶圖



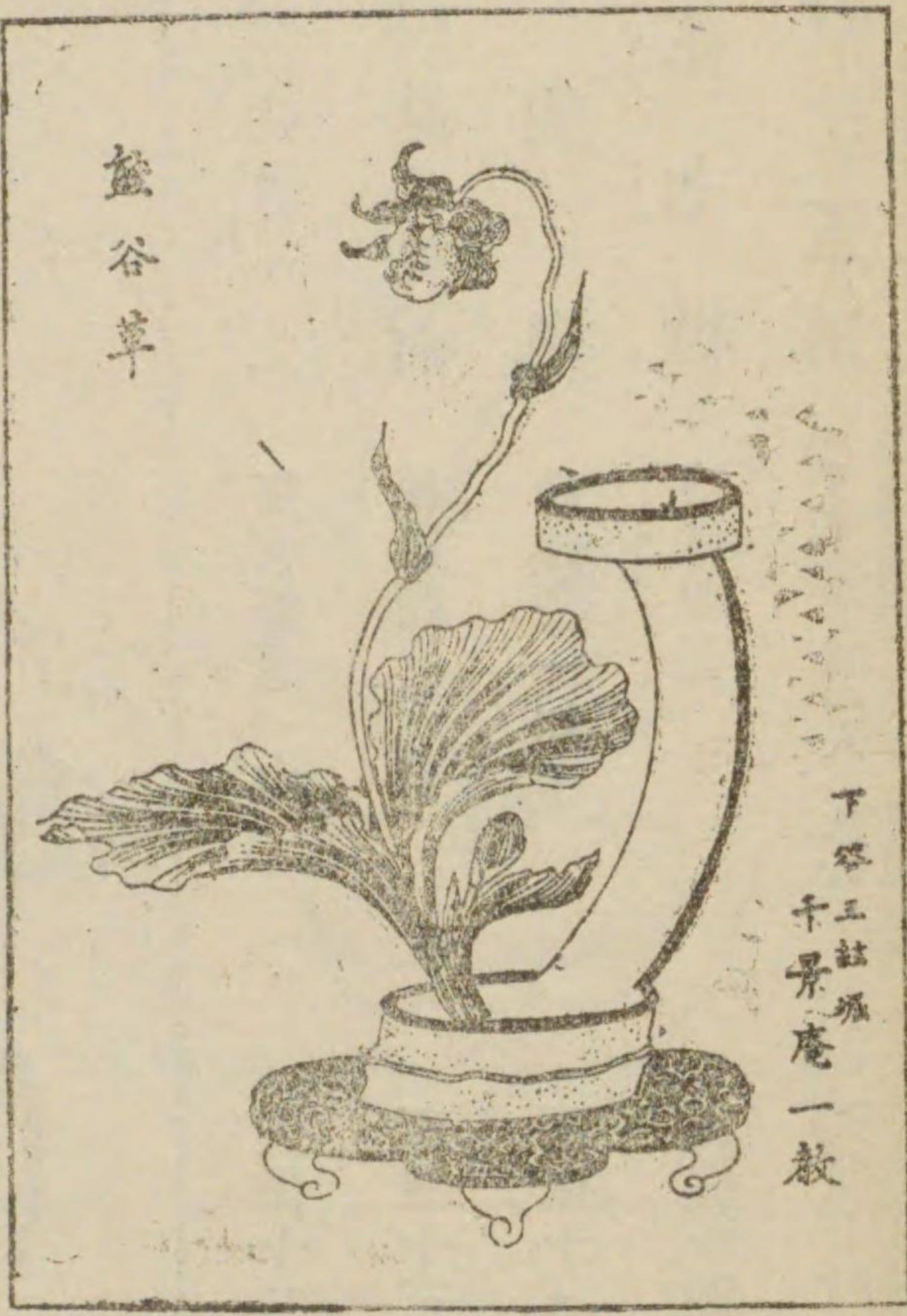
本書は理遊六十九歳の時の著である。理遊は松應齋安藤涼宇の門人で、涼宇は志軒今井宗普の門人である。宗普は元祿の頃西京より江戸に下りて流名を則古流と云つた。

席上譜傳卷  
阪田梅甫

遠州流  
挿花千歳松  
千松庵一樹

天保十一年九月  
二五〇〇 書寫 一卷  
天保十一年  
二五〇〇 版本 一冊

遠州流  
挿花千歳松



當時遠州流は各地に流行したのだらう。他の流派にまで花形に影響した感がある。編者少年の頃花會でよく見た三段ごしと稱する花で、技巧の極致とも云ふべき形は、大正の現今その跡を絶つた如く稀にしか見ない。老人の話に明治廿年の頃は五段ごしと云ひ、二日間も費して一瓶を挿したとか。

三船五方之卷

挿花  
猷備千歳花  
周防法眼源正行  
の序あり

(書名不明)  
千松庵一樹

附言 表題毀損して不明であるが、遠州流の花矩を記したものである。

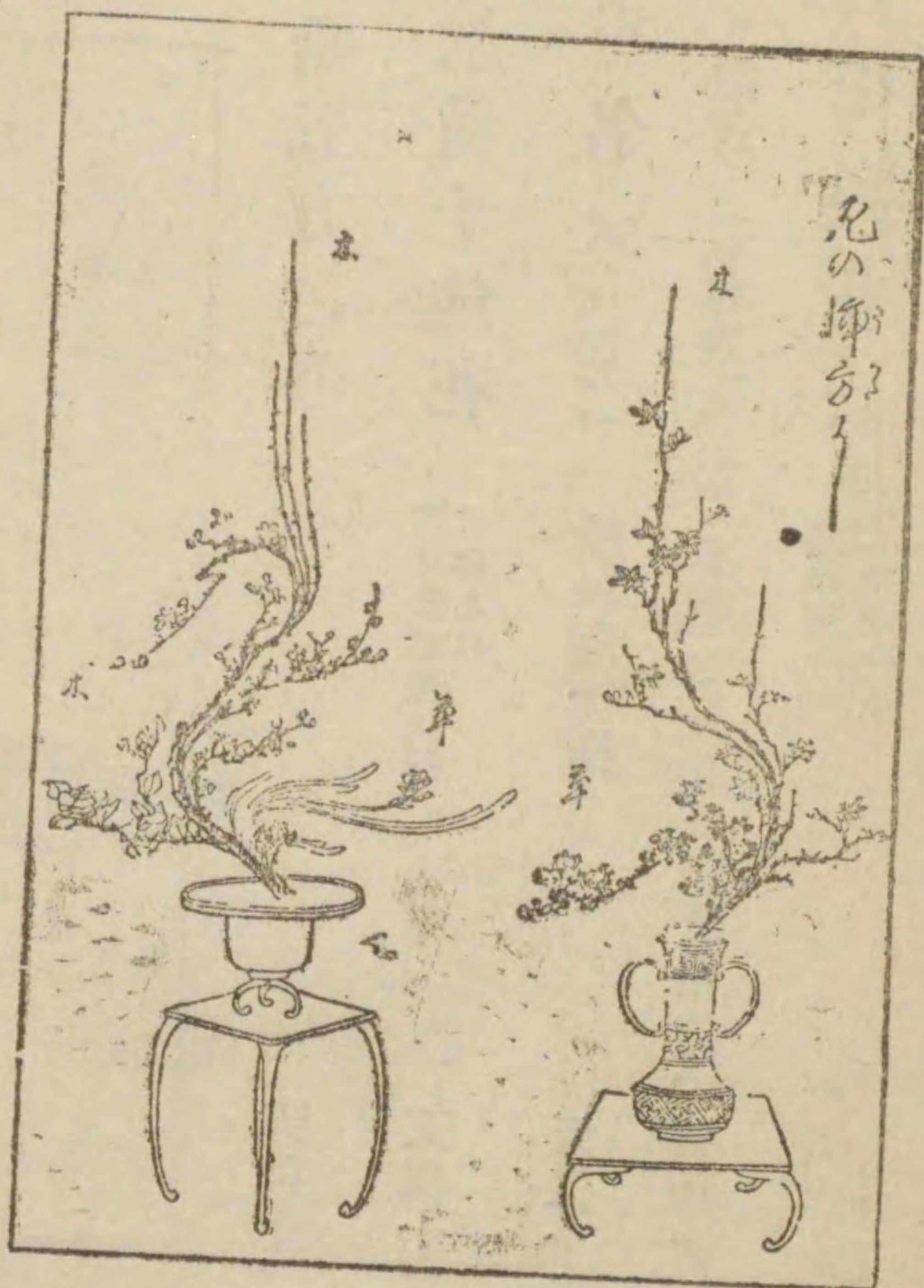
中挿花鑑  
暗山樓  
相澤伴主

天保十二年正月廿五日  
二五〇一 書寫 一卷  
天保十二年三月十一日  
二五〇一 版本 一冊  
天保十二年春  
二五〇一 版本 一冊  
天保十二年九月  
二五〇一 版本 二冊

四十三



(外題毀損不明)



外題毀損して分らないが、一節に『二瓶の花に木を真中へ挿し、兩方より草にて挟み挿す事嫌ふなり。また草を中へ挿し、左右より木と木にてはさむ事悪し。又花物にて葉物を挟みても嫌ふ。是草ばさみ、木挟皆嫌ふ處なり。左に善惡をしるす。』とあり、書中に遠州流の規矩がある。

插花月のさかえ 窓月齋鷹一由

天保十二年冬の序あり 二五〇一 版本 一冊

插花野路の枝折 松壽齋

天保十三年十一月 二五〇二 寫本 二冊

萬歳樂 成龍齋一如

天保十三年冬 二五〇二 寫本 一冊

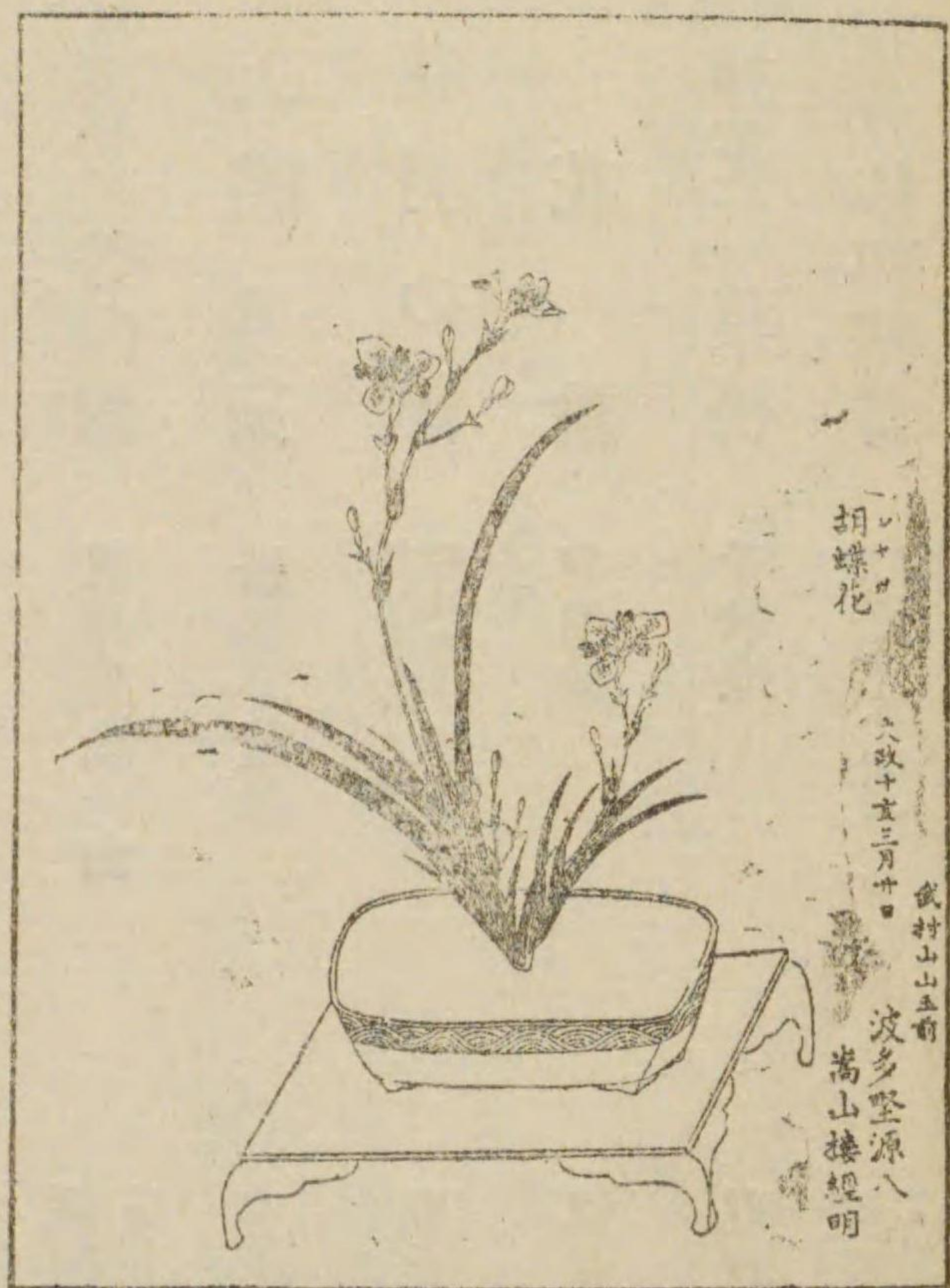
生花七種 寺澤香月

天保十四年二月 二五〇三 書寫 一卷

高野之玉川 甘泉堂佛頂山人の序あり

天保十四年陽月 二五〇三 版本 一冊

台中插花鑑



書中の一節に『吾撰ところの花形はたしみつくりて圖するものにあらず、挿したる所の形を自即時にうつしとりたれば、其の挿したる所の地名年月日限まで記し置きたれば、圖するに一枝一葉たりとも増減することなし、然れども前後へ指す枝は眞に寫し取ること難し、後へ指す枝は少し脇へふれて圖したれば見る人察したまふべし』とあり。

定專挿燕子花十三瓶之圖



上圖は池坊家元の挿したカキツバタ三十瓶中の一つである。當家元はカキツバタの挿法に熟練の結果か、何れの圖も整然として群を抜いてゐる。但し天保の頃寫眞の利用未だしきは遺憾である。



花道問答書 鳳雲齋

天保十四年七月

二五〇三 寫本 二冊

專定挿燕子花三十瓶之圖 專明

天保十四年仲秋

二五〇三 版本 一冊

松月堂古流傳書 瑛鏡館柳旭

天保十四年秋

二五〇三 寫本 四冊

傳書四方之薰 未生齋廣甫

天保十五年冬

二五〇四 版本 一冊

百花物語

天保十五年十月

二五〇四 寫本 一冊

插花衣之香四編 窓月齋鷹一由

天保十五年十二月

二五〇四 版本 四冊

席上譜 首之卷 松養亭蘆津

弘化二年七月

二五〇五 寫本 一冊

插花月の湊 貞月齋鶴一提撰  
秀月齋篠一女撰

弘化二年秋

二五〇五 版本 四冊

瓶花論 芳州庵

弘化二年十一月の序あり二五〇五

二五〇七 寫本 一冊

水揚口傳插花二葉松 千秋庵

弘化四年初秋

二五〇七 版本 一冊

生花分体秘傳書 (著者不明)

弘化五年二月

二五〇八 寫本 一冊

遠州流天地人の巻 梅雲齋

嘉永元年五月

二五〇八 寫本 一冊

遠州流眞行草 并  
圖繪 梅雲齋南山

嘉永元年五月

二五〇八 寫本 六冊

遠州  
御流插花秘傳集 春嶺齋

嘉永元年六月

二五〇八 寫本 一冊

插花明の色 未生齋廣甫

嘉永元年夏

二五〇八 版本 一冊

附言 本書は花圖のみであつて、種類は全部カキツバタである。

花道 陰之卷  
陽之卷 鳳尾齋

嘉永二年五月

二五〇九 寫本 一冊

初傳譜 壽松園

嘉永二年

二五〇九 寫本 一冊

東插花蝶の友 松桐庵一司

嘉永三年冬

二五一〇 版本 三冊

前卷口傳書畫圖解

嘉永三年

二五一〇 寫本 一冊

活花早さとし 壽松園有雅

嘉永四年孟春

二五一一 版本 二冊

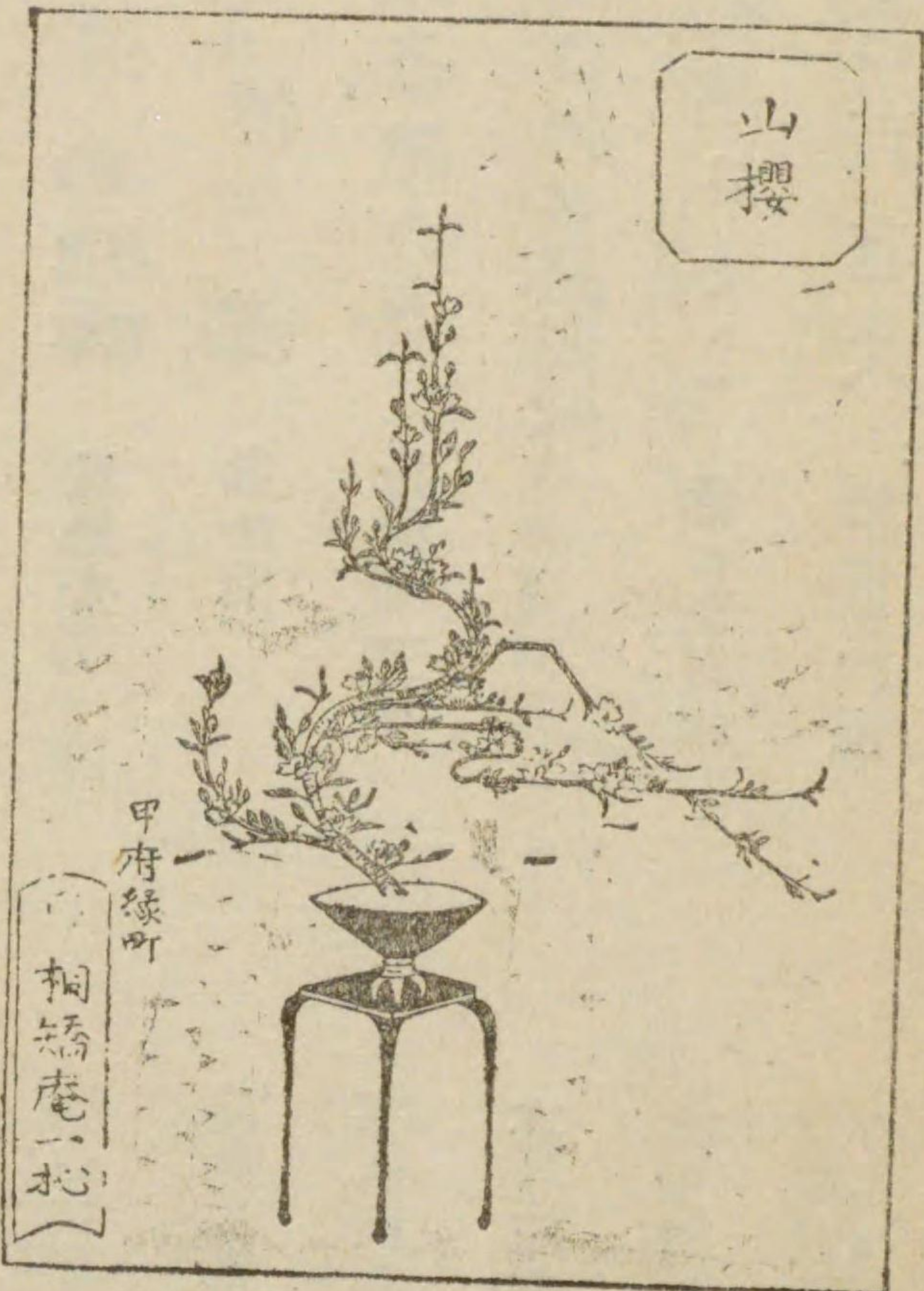
生花百花式 灌園房清溢

嘉永四年もちの日の  
序あり

二五一一 版本 一冊



東風 挿花蝶の友



本圖が三段ごしと云ふ花形である。遠州系統では斯の如き花を挿すに當つて、何れも緻密な技巧を要するから、長時間を費さねばならぬ。圖中の細い眞直な枝を用ゐて右方にへの字形と觀世水形とを入れた意匠は、富士に霞がかゝつてゐると觀る者に思はせる。

剪花翁傳

中山雄平

嘉永四年

二五一 一 版本 四冊

附言 本書は草木の栽培法を記したものであるけれど、其の草木毎に水あげ法が附記してある。これは翁自ら實驗したのを書いたものと思はれる。大正の現今まで之を轉載或は實行してゐるものがある。

獨生羽蘭圖繪

是心軒四世法眼

嘉永五年重陽

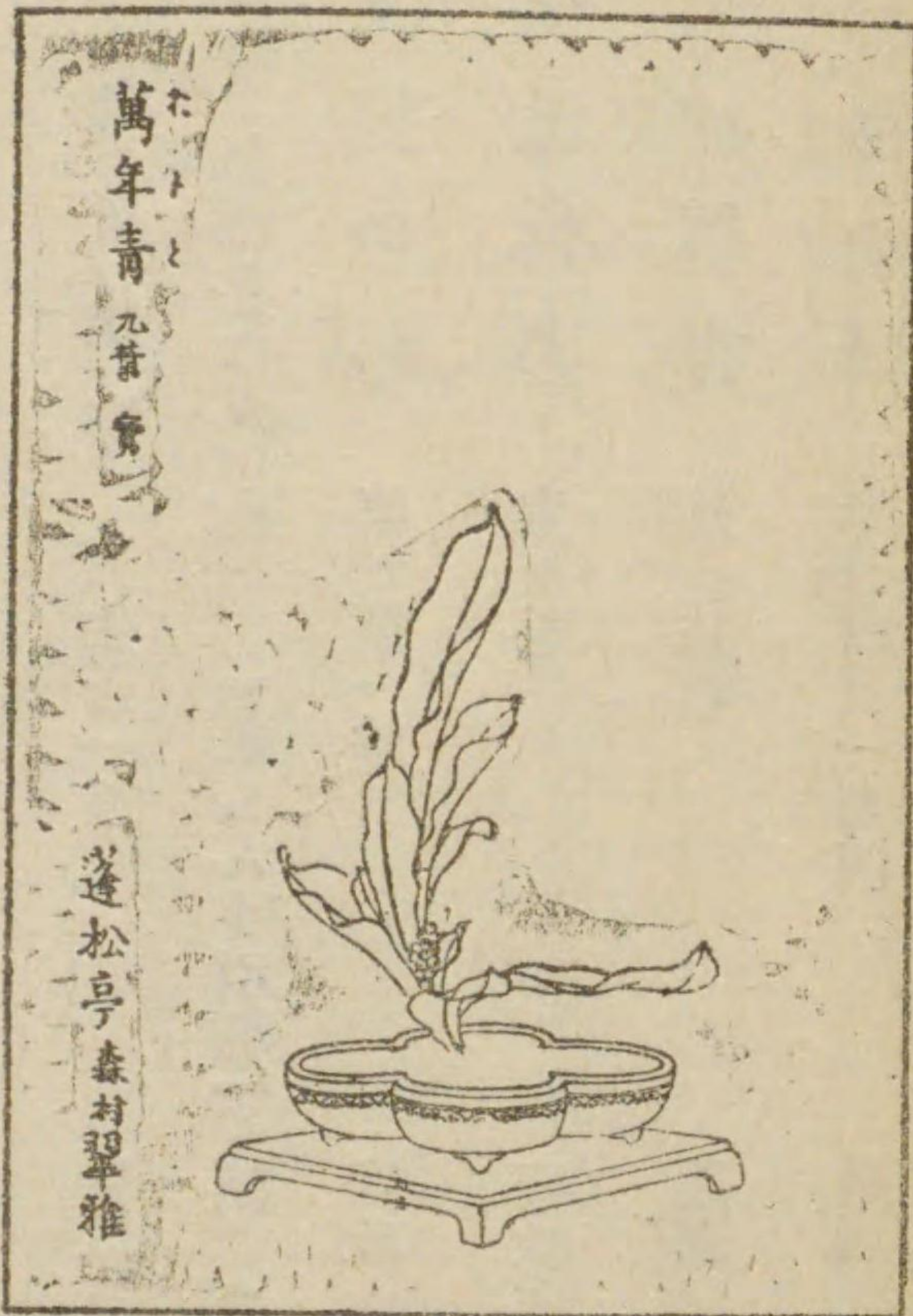
二五二 二 寫本 一冊

御流 活花手引種後編 壽松園有雅

嘉永五年九月

二五二 二 版本 五冊

御流 活花手引種後編



當流でも古は自然に近い花形であつたが遠州系統の流行につれ、曲線の派手に眞似た形跡がないでもない。オモトの如き草物を右方に長く出してある意味が、前手引種と異つた點である。圖中各オモトの出生に就ては、實地を調べなければ斯様に書けないものである。

青山 御流 活華千瓶圖式

壽松園有雅

嘉永五年九月

二五二 二 版本 二冊

挿花 葉らん手引種

天生齋一流

嘉永五年秋の序あり

二五二 二 版本 二冊

遠州流挿花初中切紙の卷 立松庵一庸

嘉永五年秋

二五二 二 寫本 七冊

千秋流生花傳書

千秋庵

嘉永五年冬

二五二 二 寫本 九冊

古流 生花松の志津久 松盛齋理恩

嘉永六年春

二五二 三 版本 一冊



千秋流生花兩儀卷 不老庵二鶴

嘉永六年

二五二三 寫本 一冊

五十

◎嘉永六年は百二十代 孝明天皇の御宇、徳川十三代家定將軍の時にして、ハルリ一行の黒船浦賀に來り、また露西亞の使節長崎に來り、國事次第に多端。憂國の士東西に奔走し、攘夷開港の論愈々盛んとなる。徳川十四代家茂、十五代慶喜の兩將軍執政の間、内には諸事變相次いで起り、外には諸外國との交渉頻繁にして、世論大いに沸騰し、遂に幕府の威望地に墜つ。

插花 百媚 翫月庵一惠

安政二年二月

二五二五 版本 二冊

插花松の茂り 天生齋一派

安政三年夏

二五二六 版本 二冊

四季茂り第二編 天生齋一派

安政五年春

二五二八 版本 一冊

言附 前記嘉永五年發刊の『葉らん手引種』と同じである。

插花庭の松 庭松齋一晴

安政六年十一月

二五二九 版本 四冊

未生流傳書 生々庵

安政年間

寫本 七冊

微笑流傳書 長井長年

萬延元年八月

二五二〇 寫本 四冊

盆石 四時の詠 壯月齋惠一鳥編

萬延元年夏

二五二〇 版本 三冊

盆石 正風花鏡 秀貫齋月一珣

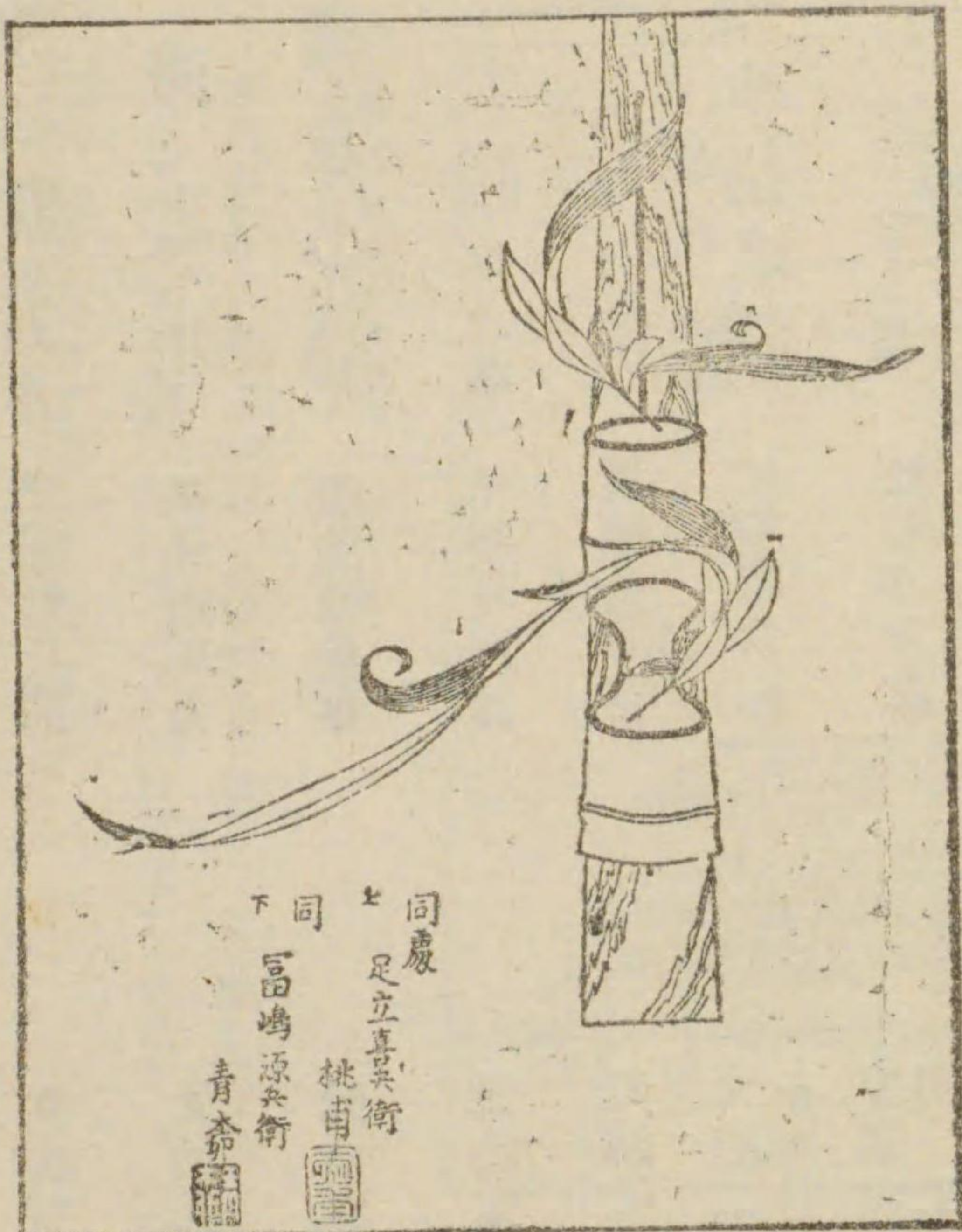
萬延元年の序あり

二五二〇 版本 三冊

一 帆 青 生々庵

萬延元年仲秋

二五二〇 版本 二冊



本流も插花の流行にともなつて生れたのであらう。世間一般が曲線美を賞した爲か、本書全部の**バラ**ン花形中に曲線美を發揮させたのが多い。**バラ**ンは随分自由自在になるものであるが、書中の形には繪空事がないでもない。

花草木養之卷 未生齋廣甫

萬延元年

二五二〇 寫本 一冊

竹器圖式 松養亭

文久元年三月

二五二一 寫本 一冊

五十一



生花百枝折

文久元年

二五二一 版本 二冊

御流梅ヶ香 林蘭甫の序  
藤原道賢

文久二年正月下流

二五二二 版本 一冊

千艸之壽天地人 成龍齋一間

文久三年孟秋

二五二三 版本 三冊

琴浦之花 榮真齋瑞甫

元治元年卯月

二五二四 版本 一冊

微笑齋長年 花術體意の卷

元治元年林鍾

二五二四 寫本 一冊

席上譜尾之卷 松養亭芦津

元治元年九月

二五二四 寫本 二冊

錦の幣 廣誠齋源甫

元治元年秋

二五二四 版本 一冊

插花水揚之譜 松養亭芦津

元治二年三月 (慶應元年)

二五二五 寫本 二冊

性容譜首尾 松養亭芦津

慶應元年九月首  
同 二年二月尾

二五二五 寫本 二冊  
二五二六 寫本 二冊

活花遠山流 里陽齋

慶應二年九月

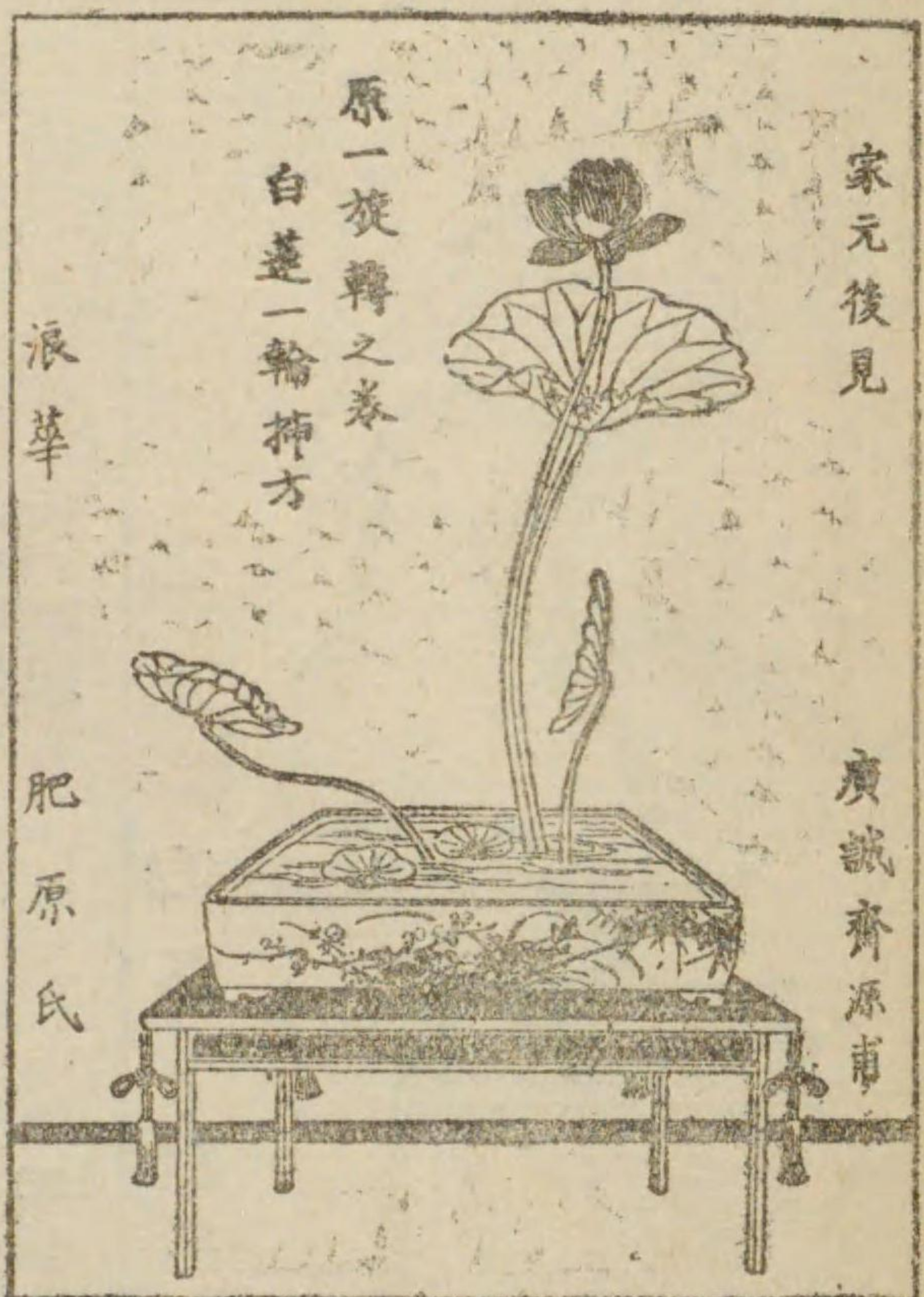
二五二六 寫本 一冊

錦の幣後編 廣誠齋源甫

慶應三年春

二五二七 版本 一冊

錦の幣



未生の流内でも世上一般が婉曲な花形を好む所から、本流の花形にも幾分影響してゐるやうに思はれる。そして明治の終り大正の初、世間の花形に一變化を來し、曲線美が衰へ、少しく立氣味たきになつた。大正の現今當流も共に變つて來て『飾花御代乃花』と云ふ書物まで出來た。

花道挿花百華撰 三代 廣誠齋源甫

明治元年冬

二五二八 版本 一冊

◎明治元年は百二十一代 明治天皇の御宇、王政復古。明治十年頃まで幕臣諸所に亂を起す。明治二十七八年日清戰役。明治三十三年北清事變。明治三十七八年日露戰役。明治四十二年韓國併合。大正三年世界戰亂。

如山流中御傳之卷 松養亭芦津

明治二年五月

二五二九 寫本 一冊

東山新流生花濫觴 鶴壽齋

明治三年二月

二五三〇 寫本 一冊

遠山流席上譜傳卷 遠山舍里齋

明治五年

二五三二 書寫 一卷



瓶華類纂 本松齋一得  
 古流松廼影 千羽理芳撰  
 瓶花挿法 細川潤次郎  
 諸生花早指南 永井浩  
 插花獨案内 菅谷昌萬  
 活花秘傳 高田郁三郎  
 錦の鏡 杉野鶴壽齋 菅生鶴照齋

明治六年 二五三三  
 明治九年十一月 二五三六 版本 一冊  
 明治十一年 二五三八 版本 一冊  
 明治十四年十一月 二五四一 版本 一冊  
 明治十五年十一月 二五四二 版本 二冊  
 明治十六年十月 二五四三 版本 二冊  
 明治十七年五月 二五四四 版本 一冊



美しい曲線美の流行を極めたその餘波を受けて、この新流が生れたのである。本の挿法を知つてゐる老人の話によると可なり大きいものを一瓶に生ける日時は二日ぐらゐ費したとの事であつた。通じて當時の稽古人は男子が多くて女子は少かつた様である。現今では男子より女子が多い。

遠州流插花<sup>初中</sup>傳 六世 春松軒一層  
 錦流亭百瓶 錦流亭喜伶

明治十七年六月 二五四四 寫本 三冊  
 明治十七年六月五日 二五四四 版本 一冊

錦流亭百瓶



書中に立華、砂之物等あるが、大部分は生花である。一節に「我師錦伶翁今回家元の許可を得て初稽古のたよりにもと此百瓶を著されたり、さるに左右の働きは寫し得たれど奥深き枝葉を認むること難しと語られたり。下略」とあり。鷺洲著の『投入實體寫真百瓶』の附言参照。

正風葉蘭遺芳 西原利夫  
 插花獨稽古 嵯峨野増太郎

明治十七年七月廿一日 二五四四 版本 一冊  
 明治十八年四月十三日 二五四五 版本 一冊



附言 前記の文政十三年上梓『即席生花手引草』の改題せるものと其の他のものとである。

古流 生花松のひとしほ 千葉傳三 明治十八年五月十五日 二五四五 版本 一冊

生花 入門 小川六郎 明治十八年九月 二五四五 版本 一冊

錦 廻 薫 鶴照齋松明誌 明治十八年秋 二五四五 版本 一冊

生花 百花式 備後 灌溉方挿 明治十八年秋 二五四五 版本 一冊

諸流 生花獨稽古 岡田源吉 明治十八年十一月廿二日 二五四五 版本 一冊

東山新流譜傳卷 杉野鶴壽齋 明治十八年 二五四五 書寫 一卷

遠州流 活花うひ學 机日庵 明治十九年一月五日 二五四六 版本 一冊

古法 會式 活花心得草 故 柳川通 明治十九年三月 二五四六 版本 一冊

附言 前列文政三年發兌の『與物爲春』と同一である。

立花 指南 富岡圓 明治十九年七月三十日 二五四六 活版 一冊

生花水揚秘法 好邨巽 明治十九年十月 二五四六 活版 一冊

生花 早指南 濱嶋精三郎 明治二十年 二五四七 版本 一冊

花道 遠州流 ひとり稽古 清光齋楓月 明治廿一年仲秋 二五四八 寫本 一冊

遠州秘傳 活花手引草 机日庵 明治廿一年 二五四八 二冊

插花 法指南 大平樂人 明治廿三年四月 二五五〇 活版 一冊

庸軒流 花粧玉手箱 喬壽齋鶴山 明治廿三年十二月 二五五〇 寫本 三冊

附言 前記の『插花百首』とよく似てゐる。

插花 美術之詠 廣誠齋源甫 明治廿三年冬 二五五〇 活版 一冊

插花 水揚百法秘訣 中嶋勘毅 明治廿四年八月 二五五一 一冊

生花 玉のまご 明治廿四年九月十一日 二五五一 版本 一冊

插花 四季詠 森一訓 明治廿五年一月廿九日 二五五二 版本 四冊

正風 遠州流 四季廻園 巖松齋一鵬 明治廿五年一月廿九日 二五五二 版本 四冊

附言 古書の改題ならん。



正風松の翠 巖松齋

明治廿五年二月十三日 二五五二 版本 四冊

附言 文政丁亥(十年)の序あり、改題ならん。

挿花錦のかゝみ 杉野正治

明治廿五年六月廿一日 二五五二 版本 一冊

附言 前記明治十七年出版『錦の鏡』及び、明治十八年出版『錦廻薫』兩冊の花圖を多く集め、新に少數を加へたものである。

諸流秘傳 生花獨稽古 澤田寛一

明治廿五年九月 二五五二 石版 四冊

生花學びの近みち 大館金藏

明治廿六年二月十日 二五五三 活版 二冊

挿花湖月抄 晴江

明治廿六年四月三十日 二五五三 版本 四冊

附言 前記寛政二年上梓『生花出生傳』初編後編の幾分宛を集めて改題したものである。

草木保育剪伐法 中山雄平

明治廿六年八月十五日 二五五三 版本 二冊

附言 前記嘉永四年刊行『剪花翁傳』の改題である。本書は大阪圖書館に在り、『剪花翁傳』は東京帝國圖書館及び同南葵文庫にある。

生花獨まなび 渡邊良雄

明治廿六年八月二十日 二五五三 活版 一冊

諸流秘傳 生花獨習自在 風流庵

明治廿六年九月廿五日 二五五三 活版 六冊

生花秘術獨稽古 熊見良

明治廿六年 二五五三 三冊

舊嵯峨御所 生花秘術

明治廿七年五月十五日 二五五四 活版 三冊

諸流皆傳 生花早指南 鳳鳴軒金城

明治廿七年七月十七日 二五五四 活版 一冊

諸流秘傳 生花早學 山脇古松齋

明治廿七年八月九日 二五五四 活版 一冊

諸流意匠 生花秘傳書 伊澤松翁齋

明治廿七年八月廿七日 二五五四 活版 三冊

諸流秘傳 生花獨案内 里流齋清雅丸

明治廿七年九月廿五日 二五五四 活版 一冊

花供養塚集 宮城三平

明治廿七年 二五五四

遠州流花道初傳の卷 江々齋左卿

明治廿七年 二五五四 寫本 一冊

初心生花早指南 鈴木熊次郎

明治廿七年 二五五四

千家流生花圖式 早筭端芳

明治廿七年 二五五四



春山四季艷 天真齋

茶の湯と生花 大橋又太郎

諸流生花獨習 古松齋  
(菅原惠一)

附言 前記「諸流生花早學」と同一である。

秘傳 拋入挿花獨習自在 中嶋春郊

花の姿見 五代 是心軒三華

遠州挿花の栞 孤月庵

遠州流花傳養法の巻 江々齋左卿

茶の湯と生花 武田醉夏

畏三樓三刺再版 近藤伊三郎

遠州流挿花百瓶之圖 樹月庵一全

明治廿八年花月 二五五五 版本 一冊

明治廿八年六月十八日 二五五五 活版 一冊

明治廿八年七月十四日 二五五五 活版 四冊

明治廿八年七月廿七日 二五五五 活版 一冊

明治廿八年八月十五日 二五五五 版本 一冊

明治廿九年十月十四日 二五五六 活版 三冊

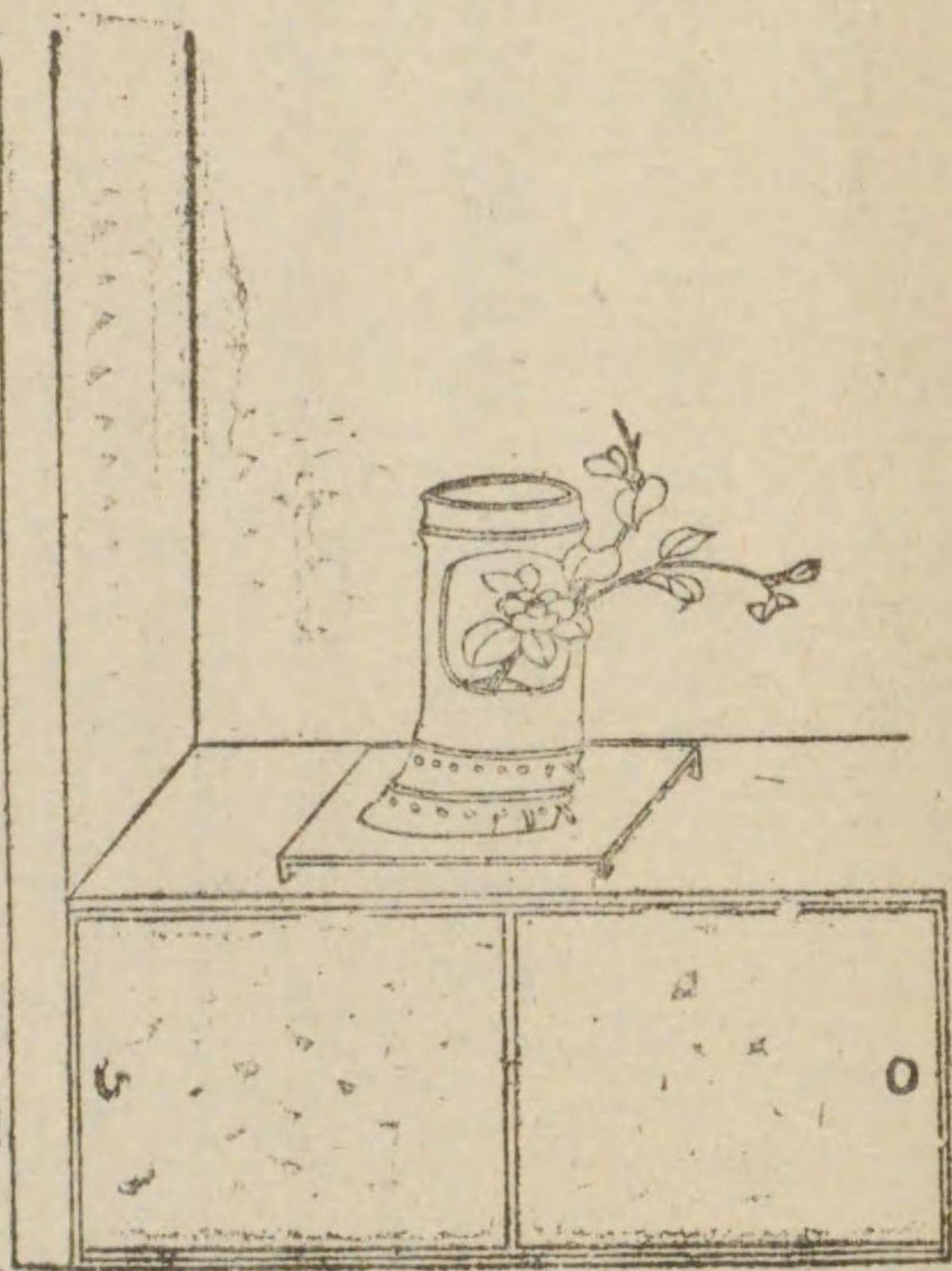
明治廿九年十一月下旬 二五五六 寫本 一冊

明治廿九年 二五五六

明治三十年三月 二五五七 版本 三冊

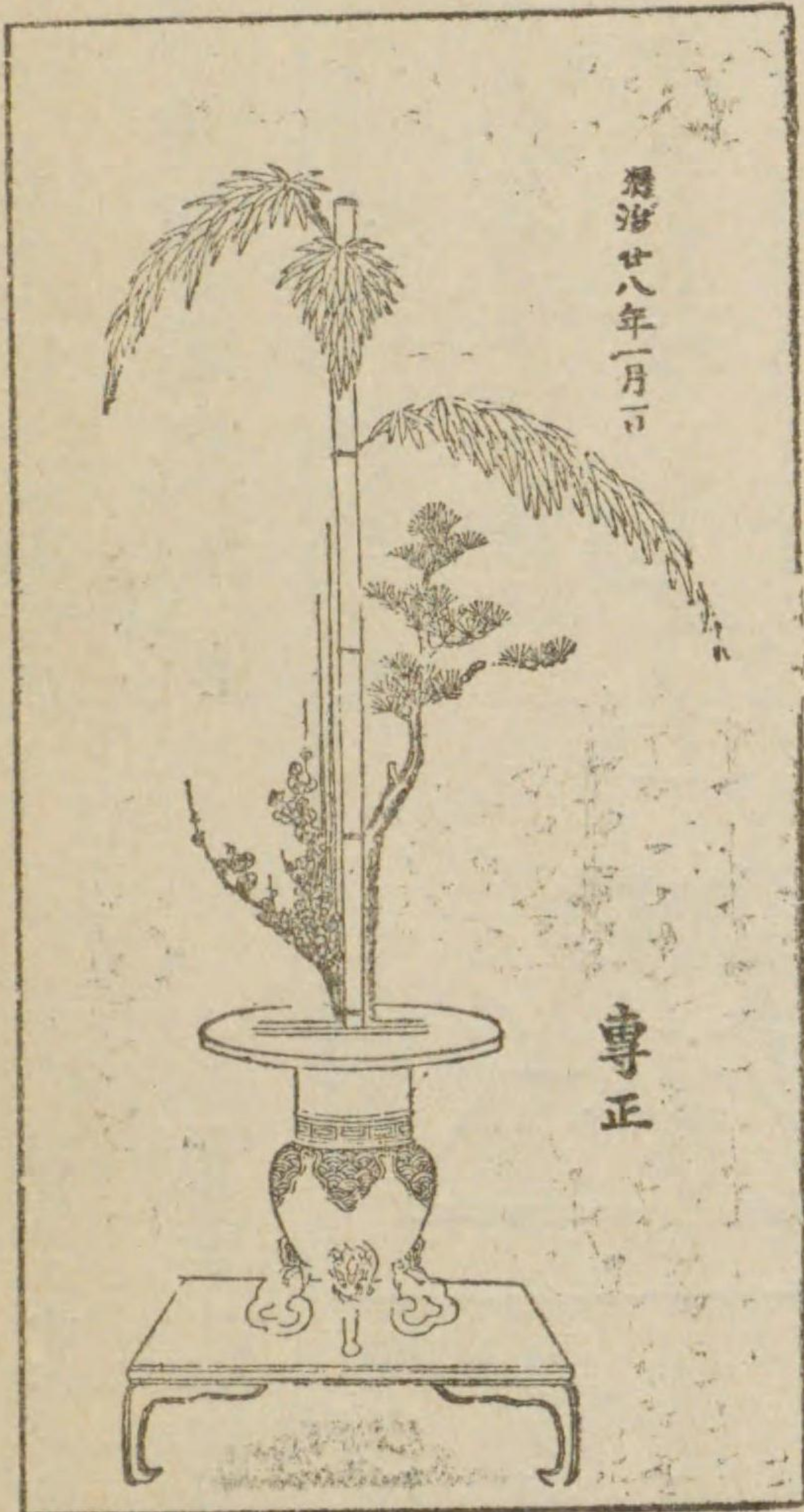
明治三十年四月一日 二五五七 版本 二冊

畏三樓三刺



本書の著者は池坊であつて、立華、生花は他流と異なる點が見ゆる。けれども上圖の如き花器に生ける時は他の流儀と枝の用ゐるやうに變る所はない。花卉挿入口圓形の線を一部分枝で遮り、花葉を中に納め他の線を明瞭に見えるやうにしたのは、本著者の意を用いた所である。

專正立生花集



この花形中真に用いたタケは出生を重んじて生けたものと思はれる。他流では莖を斜にして枝先を真心にし、其の流儀の規矩に當儀めたのが屢々ある。竹の莖を真直にしようとするにしようとして隨意であるけれど、矢張り斜に生けた不自然なのは見よいものでない。



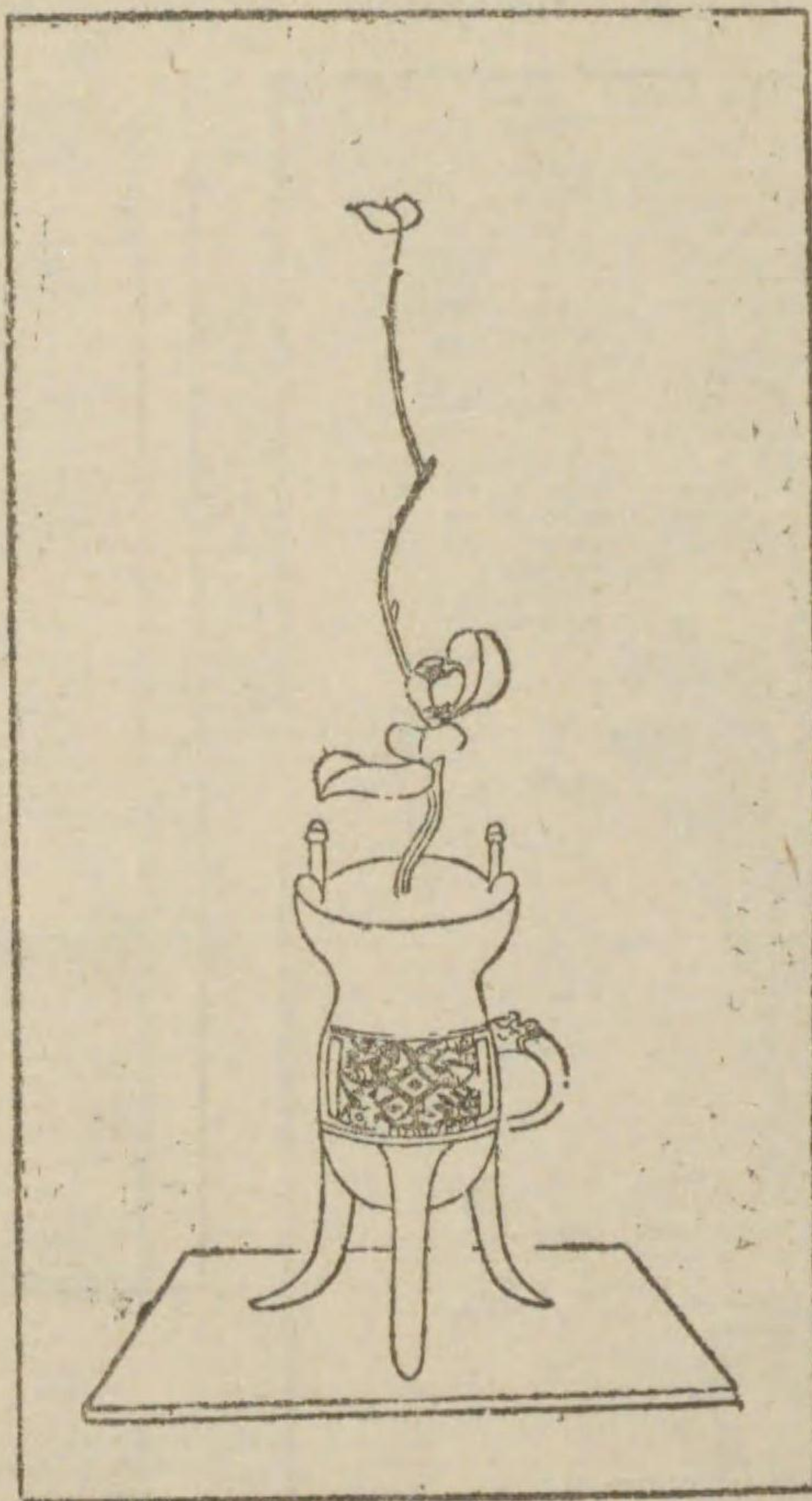
專正立生花集 池坊專正

專明插花集 四十二世 專正

明治三十年六月廿一日 二五五七 版本 一冊

明治三十年六月廿一日 二五五七 版本 一冊

專明插花集



ツバキの一輪生は昔より許しものと云つてゐる。葉を三枚半にして花一輪つけるのを、所謂一年三百六十日に象つたと云ふのである。昔はかう云ふ理窟を聞いて有難がつたものと思ふ。

遠州流花道傳書 佐伯江南齋

明治三十年 二五五七 寫本 七冊

遠州流插花圖會 松享齋一樂

明治卅一年二月十三日 二五五八 版本 二冊

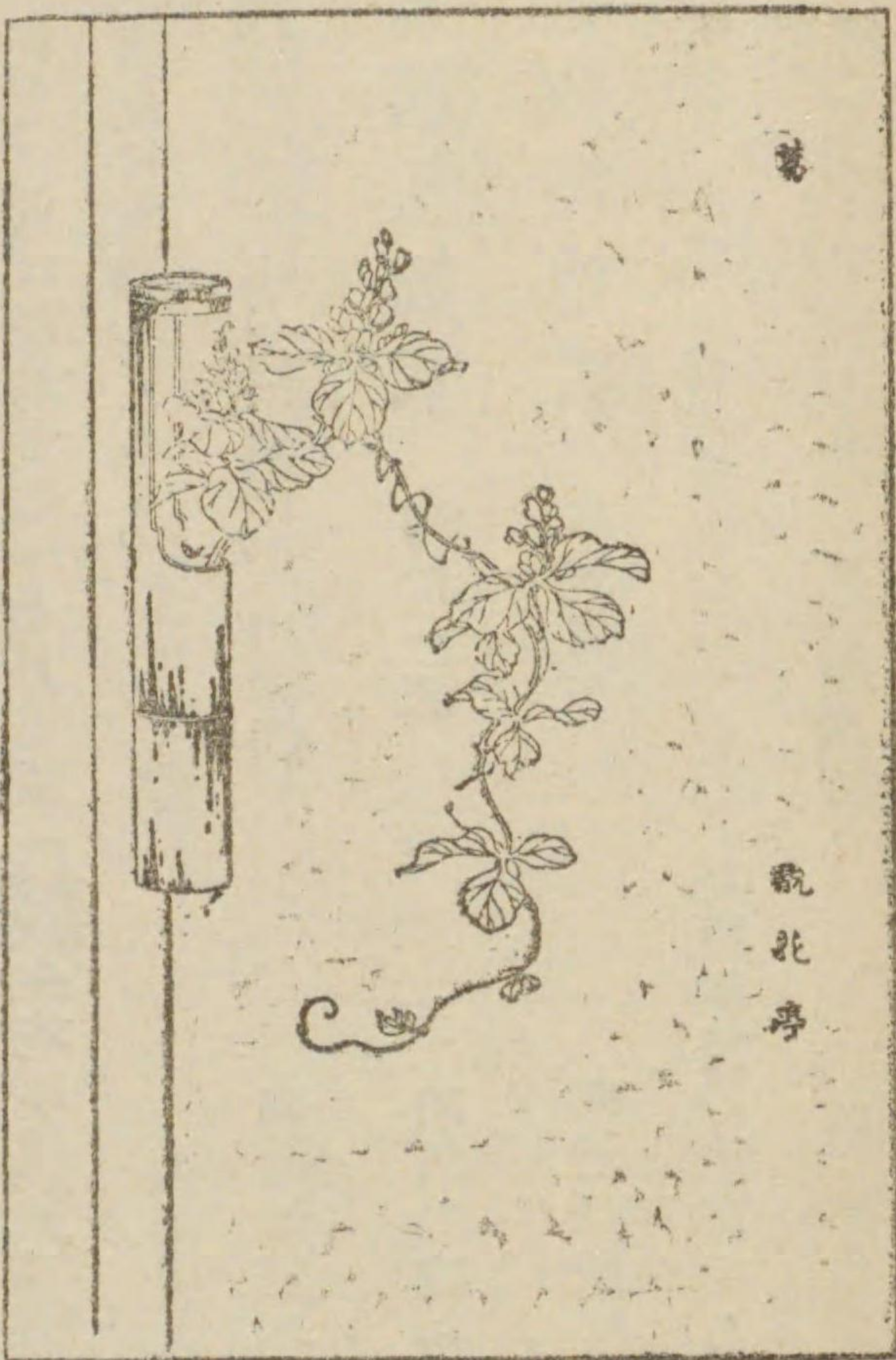
花道有名家一覽 仙田半助

明治卅一年七月廿一日 二五五八 活版 一冊

松月堂古流百瓶 五大坊牧水

明治卅一年十月十八日 二五五八 版本 三冊

松月堂古流百瓶



上圖を見ると秋草中の蔓物がいかにも風情よく入れてあるやうであるのが、後進未熟の者の見誤る所である。實地ではクズなど山野に在つても、斯様の莖の元より一度昇つて程よい所より懸崖になるのは未だ見當らない。古書中に蔓物の圖と實地と違ふのが屢々あるけれど、注意して見ればよい。

松月堂古流生花 改正出生傳 辻本 伸

明治卅二年月廿九日 二五五九 石版 一冊

花道家元池の坊生花集 杉崎歸四之助

明治卅二年二月十八日 二五五九 版本 一冊

淺草遠州插花實形圖 眠花齋一森

明治卅二年三月二十日 二五五九 版本 一冊

插花忘艸 榮松齋一壽

明治卅二年六月十二日 二五五九 版本 一冊

千歳松 千松庵一樹

明治卅三年九月廿五日 二五六〇 版本 三冊



挿花之葉 入澤晃輪

明治卅三年九月三十日 二五六〇 版本 一冊

華術中傳 體用相應之卷 肥原キク

明治卅三年 二五六〇 版本 一冊

挿花水揚秘法 水野寅吉

明治卅三年 二五六〇

生花と盆石 的場銈之助

明治卅四年一月十日 二五六一 活版 一冊

活花極意秘傳集 鳳鳴軒金城

明治卅四年一月廿五日 二五六一 活版 一冊

附言 前記明治廿七年七月出版『諸流生花早指南』の改題。明治四十一年九月『諸流圖式生花秘傳集』と更に改題してある。

田邊和氣子刀自遺稿 山澤俊夫

明治卅四年十二月廿八日 二五六一 活版 一冊

新選活花圖式 河村一洗

明治卅四年十月 二五六一 版本 四冊

生花秘術傳書 佐保安甫

明治卅四年 二五六一 活版 五卷

附言 本卷は舊嵯峨御所(大覺寺)花道團體の傳書である。

松月堂古流 生花指南初歩 一極齋清圓

明治卅五年三月一日 二五六二 活版 一冊

生花の枝折 中川愛水

明治卅五年四月十日 二五六二 活版 一冊

新花鏡 山下銓太郎

明治卅五年四月 二五六二 石版 三冊

御門流稽古手引 麓坊

明治卅五年八月卅一日 二五六二 版本 一冊

諸流秘傳 生花四季の錦 大塚宇三郎

明治卅五年九月三十日 二五六二 活版 一冊

古流 生花千代のためし 石側清右衛門

明治卅五年十二月廿五日 二五六二 版本 二冊

知足庵挿花集 手嶋増太郎

明治卅五年 二五六二 石版 一冊

容真流 三才の巻及び  
初中傳 體用相應の巻 安田成龍齋

明治卅六年一月二十日 二五六三 版本 二冊

挿花大樂抄圖會 榮雲齋慎義

明治卅六年六月 二五六三 版本 五冊

附言 本書は安政三年の原版である。

三野百花集 近藤恰齋編

明治卅六年十一月廿八日 二五六三 版本 二冊

挿花千草集 内藤芳之介

明治卅六年十一月卅日 二五六三 版本 一冊





本圖ナンテンの曲曲した幹は繪空事ではない。自然に曲つたのがあるものである。それを生けて前方から寫生すると、此の如き圖の出来るのは編者の實驗に由つて知る所である。眞直な幹を火で温めて撓めると曲るけれど、葉の弱るのは勿論である、斯程までにせなくてもよからう。

盆栽聚會圖錄 木曾庄七

明治卅六年十二月卅日 二五六三 活版 一冊

挿花 龜井まさ子

明治卅六年 二五六三 活版 一冊

生花古流百瓶 松藤齋理長

明治卅七年二月一日 二五六四 活版 二冊

華の志をり 池坊專正

明治卅七年三月三十日 二五六四 活版 一冊

諸流生花古今のながめ 越村棟造

明治卅七年四月廿六日 二五六四 活版 一冊

華道一斑 高木秀克

明治卅七年五月五日 二五六四 活版 一冊

花香々々美 松盛齋理與校正 松武齋理實編輯

明治卅七年八月廿三日 二五六四 活版 二冊

遠州流挿花百瓶圖 如月庵

明治卅七年九月 二五六四 活版 二冊

千家古流生花圖會 伊藤溪一

明治卅七年 二五六四 活版 一冊

三雅遠州挿花圖式 五大庵一米 五松庵一和

明治卅八年三月二十日 二五六五 石版 二冊

生花池の坊百瓶 近藤恰齋

明治卅八年九月十日 二五六五 活版 二冊

挿花聯芳錦の波那 尾陽 未生齋廣甫

明治卅八年九月二十日 二五六五 活版 一冊

生花池の坊百花集 近藤恰齋

明治卅九年二月十日 二五六六 活版 二冊

女子職業案内 近藤正一

明治卅九年七月六日 二五六六 活版 一冊

附言 花の師匠にならうとするものは本書の皮肉を一度讀むもよからう。

日用百科寶典 小林鶯里

明治卅九年八月十日 二五六六 活版 一冊

古流生花千代の松 松秀齋理貞

明治卅九年八月十五日 二五六六 活版 三冊

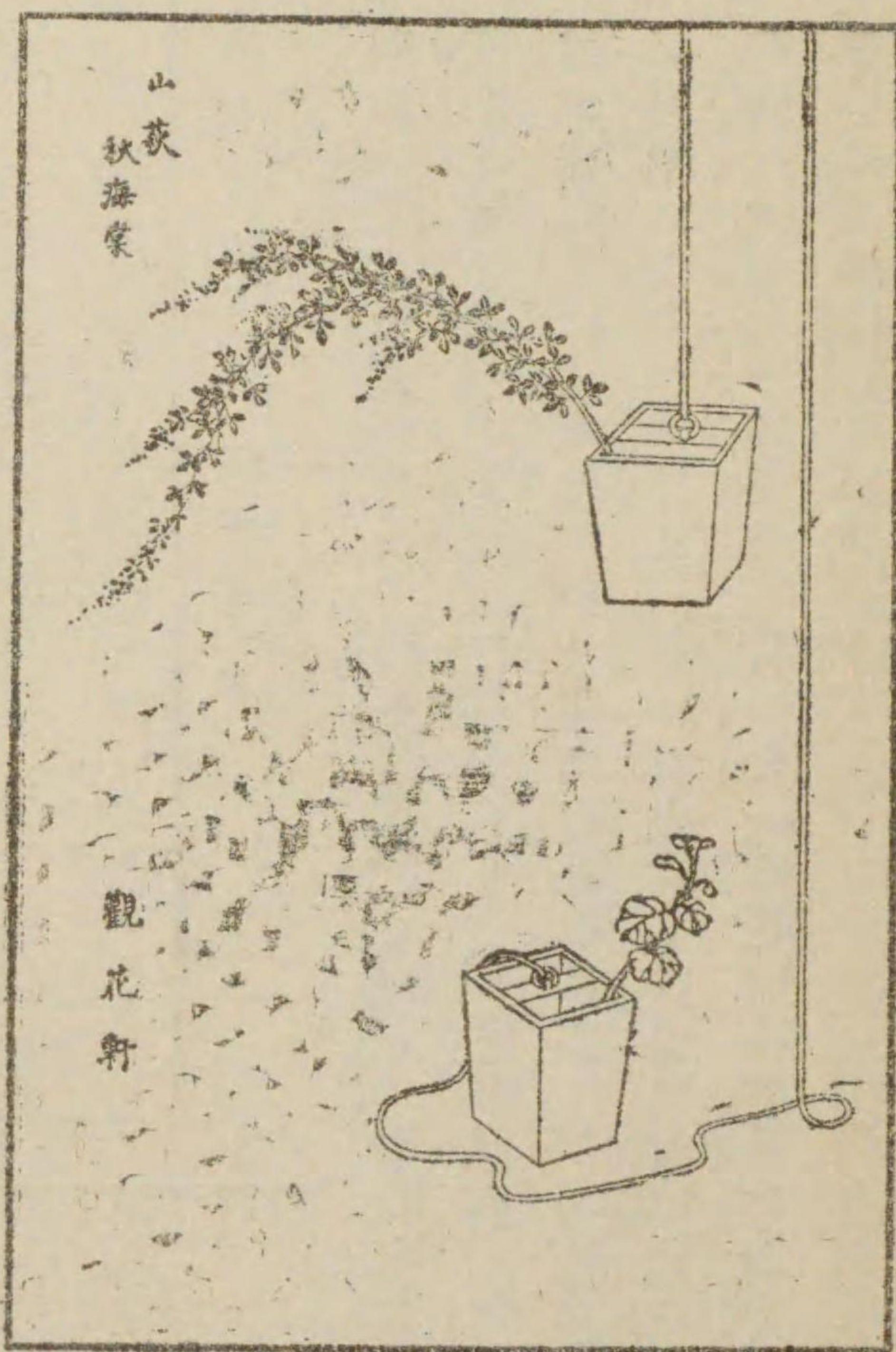
挿花代々の花 未生齋廣甫

明治卅九年九月五日 二五六六 活版 一冊









上圖二瓶の取り合せは穩當である。同種の草物でも自然の丈が高いものは高く、低いものは低くするのが見よい。古書に、二重切の(竹の花器)上方に草物を入れ、下方に木物を入れる場合、上方の草物は山上の草と見て、下方の木物は崖下の木と見ればよい、この意味が述べてある。

有毒植物圖譜

東京 博物學研究會

明治四十一年六月十五日 二五六八 石版 一冊

附言 斯道を辿る者は是非見て置かねばならぬ書である。

諸流圖式

生花秘傳集

湯淺久米

明治四十一年九月十日 二五六八 活版 一冊

千家流

生花の詠

奥野靜水

明治四十一年十月十日 二五六八 活版 一冊

插花新常盤草

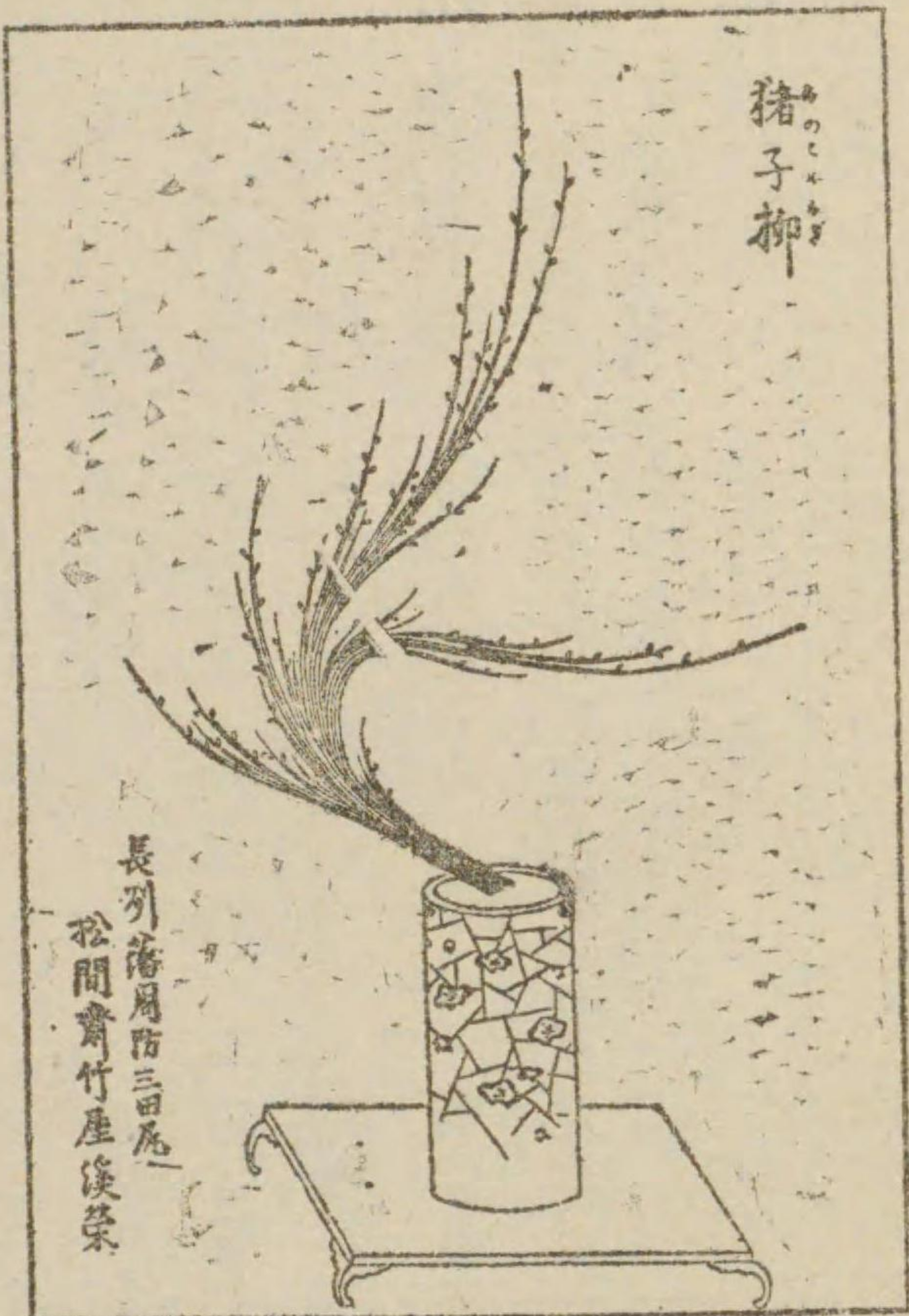
未生齋廣甫

明治四十二年一月 二五六九 活版 一冊

活花千代廼松

一松齋素朝

明治四十二年五月十八日 二五六九 活版 三冊



總ての流行は都市より始まつて田舎へ移り行くのが古來の習はしである。花形に曲線美の芽を出したのは寛政の終り頃の江戸であつた。それより各地に廣まつたが、大正の今日にては、識者は不自然だと云つて之を好まない。この盛衰の期間壹百拾餘年。けれど草木に由つては曲線美を發揮させる方が美觀を増すものがある。編者は一部分の保存を望む。

活花千代廼松

美笑流花形集

安藤 安

明治四十二年六月 二五六九 コロタ イブ版 一冊

池の坊百圖

近藤恰齋

明治四十二年七月 二五六九 活版 二冊

華道初學之栞

龍松齋華芸

明治四十二年八月二十日 二五六九 活版 一冊

附言 前記明治三十七年發行『華のしをり』に類似にしてゐる花圖が多い。



東山流生花入門

金丸秀磨

明治四十二年十一月

二五六九

活版 一冊

插花百花選

荒木幸吉

明治四十二年十二月三日

二五六九

活版 一冊

眞成流傳書

眞成齋

明治四十二年

二五六九

活版 五冊

附言 奥傳樹之卷、三才三德之卷、五行一根之卷、鏡劍玉三秘之卷、三幅講義之卷。

遠州流插花前百首

芦田春壽

明治四十三年二月六日

二五七〇

活版 一冊

池の生花の手びき

小倉照月

明治四十三年七月十五日

二五七〇

活版 二冊

花の葉

平原貞治

明治四十三年三月廿九日

二五七〇

活版 一冊

靖流瓶花要旨

八尾秀彌

明治四十三年十二月卅日

二五七〇

活版 四冊

華包

芦田春壽

明治四十四年二月六日

二五七一

活版 一冊

遠州流傳書

佐伯久作

明治四十四年二月廿日

二五七一

活版 十冊

附言 花道目錄、初傳之卷、陰陽之卷、四季之卷、表裏之卷、養法之卷、寸法之卷、問答之卷、

歌集之卷、奥傳之卷、

花卉應用裝飾法

前田曙山

明治四十四年四月四日

二五七一

活版 一冊

古插花の志をり

島田理鶴述  
木村溪月編

明治四十四年四月廿八日

二五七一

活版 一冊

古流松の志をり

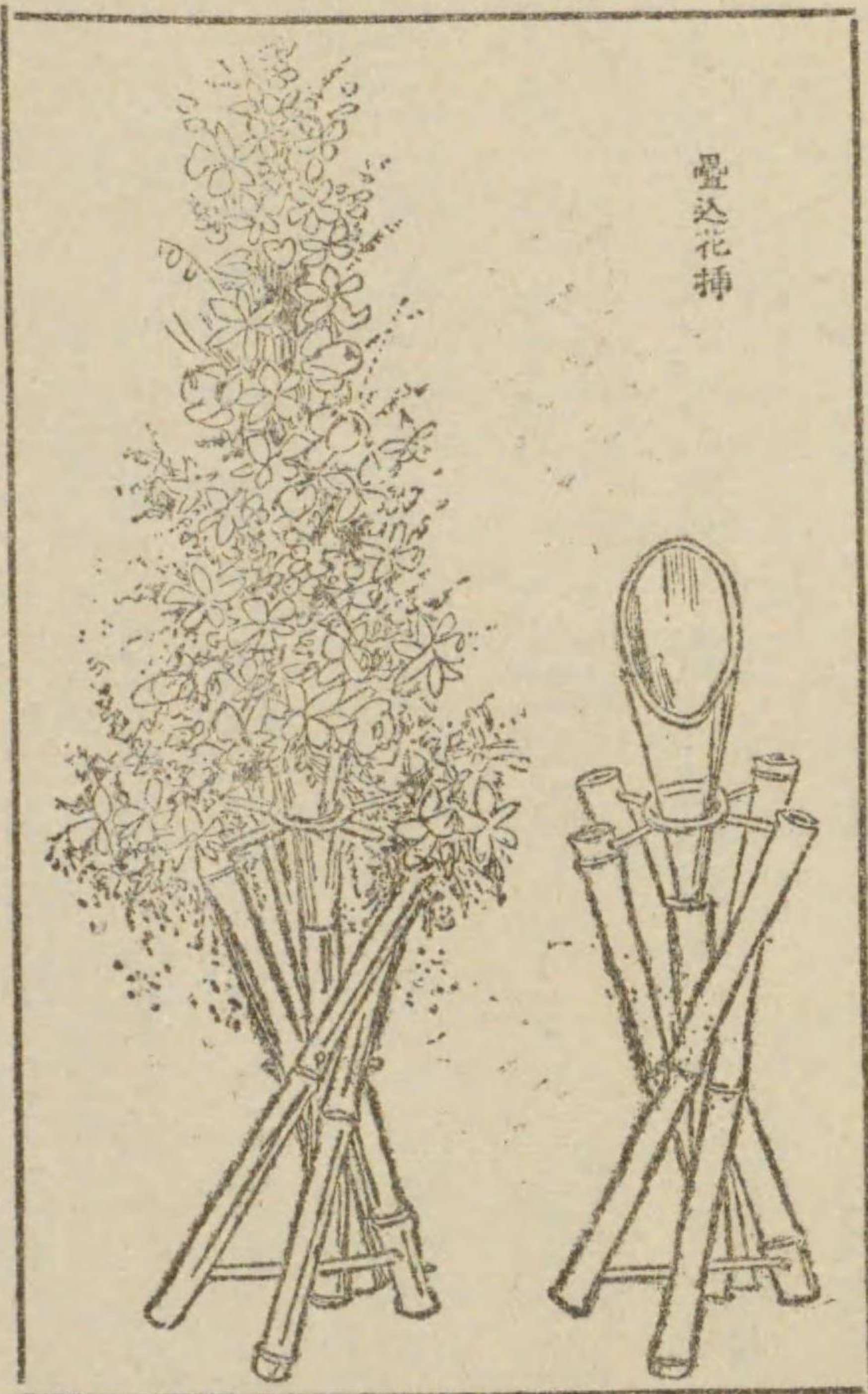
松雲齋理玉

明治四十四年五月廿八日

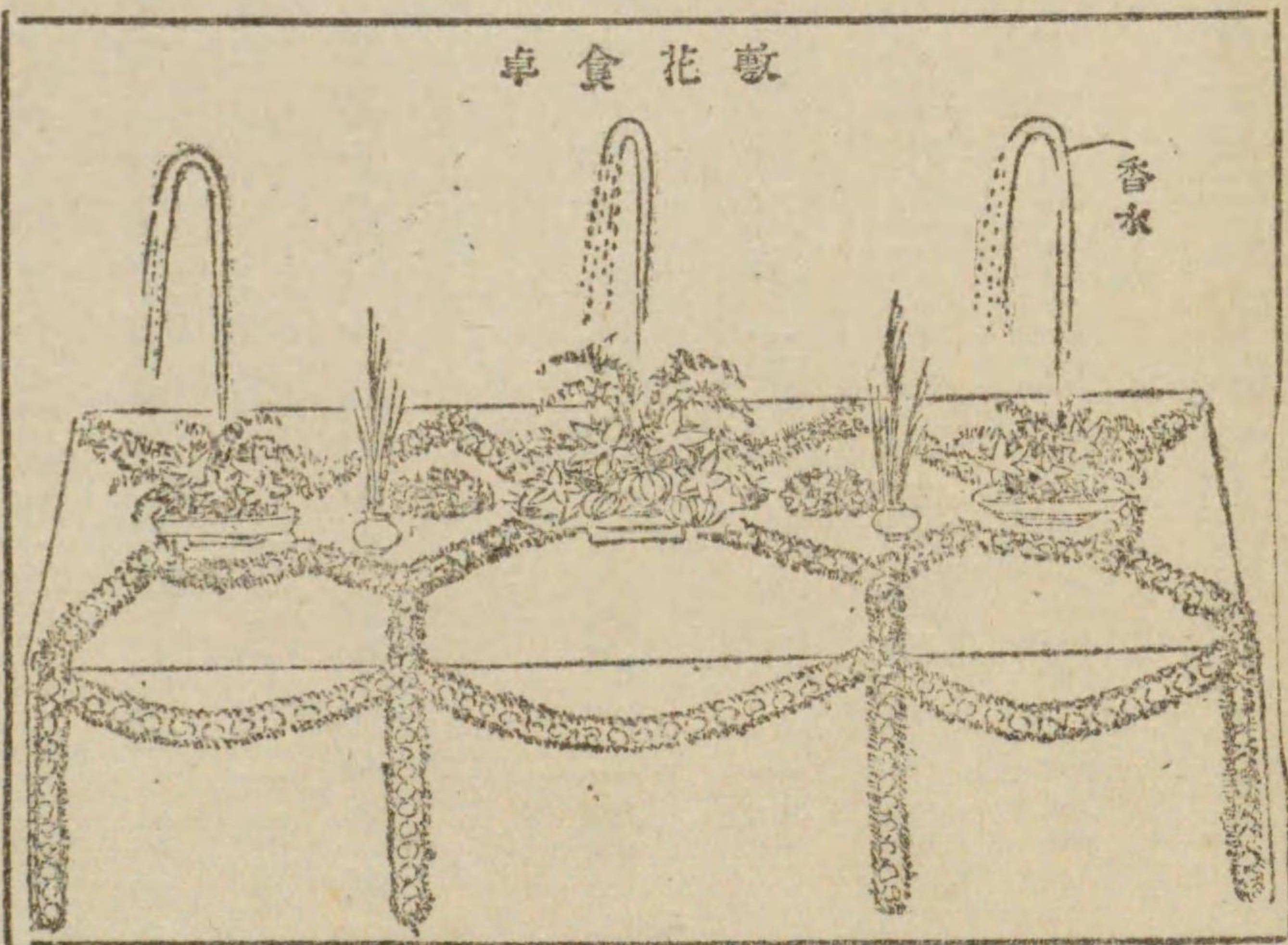
二五七一

活版 二冊

(上) 法飾裝用應卉花



(下) 法飾裝用應卉花



編者が各地巡回の際、白地丸形の鉢を用ゐ、上圖の如き形をさせて商店の陳列棚(店先)に入れて在つたのを所々で見た。自らの経験によると、初心の娘達は上圖の如き花簪式を喜び、年を重ねた者は濃厚でなく淡泊なのを好む傾向がある。日本の進化が西洋の文明に倣つて日毎に變



り、建築は和洋折衷或は純洋風となる。此等の室内に於ける卓上の裝飾に、日本在來の一方正面の生花では、見る人の均衡がとれない。であるから、三方四方より花の美しいのが見ゆるやう盛り上げるが、本圖の如き洋式盛花である。洋室の裝飾用は變らないが、近來他に用ゐてゐた濃厚な盛り上げ式の盛花は、都市で見飽いたのか、全盛期を過ぎた感がある。大正四年以降投入盛花などに關する冊子の多く出版されたため、百年後の讀者は當時生花は跡を絶つたかのやうに思ふであらう。然し實際はさうでなく、生花挿花等の系統は依然としてゐる。一時盛んな時でも春秋の花會に全部投入盛花と云ふのは少くて、半數か或は一部が多かつた。近來は濃厚な色彩の盛花が減少した傾きがある。

華道家元華かゝみ花心粧の卷 池坊專啓

明治四十四年七月廿五日二五七一 版本 一冊

諸流應用挿花捷徑 木本確次郎

明治四十四年七月廿五日二五七一 活版 一冊

華術挿花蔓言之卷 廣誠齋源甫

明治四十四年八月廿五日二五七一 活版 一冊

池坊昇玉流生花集 花道研究会

明治四十四年十一月一日二五七一 石版 一冊

池坊昇玉流生花栗 花道研究会

明治四十四年十一月一日二五七一 石版 一冊

花道池の坊指南

春陽軒義屬  
琴松園文雅

明治四十四年十二月二日二五七一 活版 一冊

日用便益家の寶 家庭教育會

明治四十四年 二五七一 活版 一冊

台中流瓶花大意

晴山樓  
山田如水

明治四十四年 二五七一 謄寫 一冊

華道大觀

松尾鼓城

明治四十五年一月十五日二五七二 活版 一冊

諸流通用生花飾方圖解 松本文太郎

明治四十五年二月廿八日二五七二 活版 一冊

活花水揚法 小林鷺洲

明治四十五年四月廿二日二五七二 活版 一冊

附言 大阪時事新報連載記事を冊子にしたもの。

眞派 眞原瓶花史

道生軒一徳  
五松堂鷺洲

明治四十五年七月一日 二五七二 活版 四冊

眞成生花集

木村眞光齋  
小林眞旭齋

明治四十五年初夏 二五七二 版本 一冊

未環の絲 渡邊公甫

大正元年九月 二五七二 版本 一冊



諸流秘傳 生花初まなび 清流齋皎月

大正元年十月六日 二五七二 版本 五冊

百瓶花序 續群書類從 第十九

大正元年十二月再録 二五七二 活版

池坊專應口傳 續群書類從 第十九

大正元年十二月再録 二五七二 活版

生池の坊百種 村上松達

大正二年三月十日 二五七三 版本 二冊

附言 明治十七年發行『錦流亭百瓶』の改題

石州流生花指南 中西徳藏

大正二年八月五日 二五七三 活版 一冊

插花千々の花 未生齋廣甫

大正二年九月一日 二五七三 版本 二冊

諸流圖式 生花秘傳獨稽古 月養齋 小花亭

大正二年十月十日 二五七三 活版 一冊

遠山流傳書 里曉齋昌鳳

大正二年三月廿三日 二五七四 木版 三卷

附言 初級之卷、中級之卷、終級之卷。終級之卷は席上譜傳卷を上梓したものである。

◎大正三年歐洲の大戦亂勃發、日本參加。大正七年十一月中旬休戦。戦後世界に於ける諸物價騰貴。

專敬流生花のゑをり 專敬流 花道奨勵會

大正三年四月 二五七四 活版 一冊

最新實驗 插花水揚法 小林鷺洲

大正三年七月二十日 二五七四 活版 一冊

附言 本著者が多年實驗して確めた簡単な方法で、而も結果に於て著しい効驗のあるのが本書獨得の誇である。

諸流 生花初心早學 横田松翠

大正三年七月三十日 二五七四 版本 一冊

生水あげの葉 松島種美

大正三年十一月三十日 二五七四 活版 一冊

池坊生花傳書説明書 龜井滋芳

大正三年十二月十八日 二五七四 活版 一冊

插花の趣味 遠山椿吉

大正三年十二月廿五日 二五七四 活版 一冊

池坊家花道秘書 森 文華

大正四年二月廿八日 二五七五 活版 一冊

獨習自在 生花秘傳集 華道實習會

大正四年十一月十日 二五七五 活版 一冊

生花のしるべ 川村孤松庵

大正四年十二月七日 二五七五 活版 一冊

投入ご盛花 松尾誠城 小林鷺洲

大正四年十二月十五日 二五七五 活版 一冊

古流生花講義及圖譜 中澤理水

大正五年三月七日 二五七六 活版 二冊



東海流活花傳習書 長嶋藤治郎

瓶花論 田能村竹田

插花のゑるべ 御幸遠州流家元

飾花御代の花 荒木幸吉

古流生花師範口訣抄 千羽理君 山本理吟 池田理英

花の枝折 木原啓作

花影 荒木磯吉

投入花の葉 種子蘇堂

實地盛花瓶華秘法 乾一 範一 小林勉

大典家元代華集 池坊專啓

古流生花傳書 千羽理君 山本理吟 池田理英

附言 古流生花心得抄、古流初傳口訣抄。

大正五年四月一日 二五七六 版本 一冊

大正五年五月廿五日 二五七六 活版 一冊

大正五年五月廿八日 二五七六 活版 一冊

大正五年六月十五日 二五七六 版本 一冊

大正五年六月廿五日 二五七六 石版 一冊

大正五年七月十五日 二五七六 石版 四冊

大正五年七月廿六日 二五七六 コロタ イブ版 一冊

大正五年八月一日 二五七六 活版 一冊

大正五年八月七日 二五七六 活版 一冊

大正五年九月十五日 二五七六 活版 一冊

大正五年九月廿五日 二五七六 石版 二冊

投入花盛花圖譜 鈴木霞外

宏道流馬耳蘭圖會 内田常二郎

池の坊生花秘傳 鳥羽樂雅

花環作り方と其心得 千葉胤一

四季盛花千種の錦 北村 壘

茶道と花道 中澤理水

古流生花中傳口訣抄 千羽理君 山本理吟 池田理英

都式三十六花選 松村孫太郎

盛花の秘訣 梶山松三郎

花道御門流百瓶集 蒼本默然

古流生花奥傳口訣抄 千羽理君 山本理吟 池田理英

投入盛花 小林鷺洲

大正五年十月十一日 二五七六 寫真版 一冊

大正五年十月十五日 二五七六 版本 一冊

大正五年十一月五日 二五七六 活版 二冊

大正五年十一月七日 二五七六 活版 一冊

大正五年十一月十日 二五七六 版本 一冊

大正五年十一月十日 二五七六 活版 一冊

大正五年十一月廿五日 二五七六 石版 一冊

大正五年十二月四日 二五七六 版本 一冊

大正五年十二月十日 二五七六 活版 一冊

大正五年十二月十五日 二五七六 版本 二冊

大正五年十二月廿五日 二五七六 石版 一冊

大正六年一月十五日 二五七七 コロタ イブ版 一冊



附言 古書を繙くに、何れも花形を後世に残すため、花圖を作るに苦心した跡がよく見える。『台中挿花鑑』『錦流亭百瓶』等の一節を讀まれたならば、成程と了解せられるであらう。その頃に於ては花形中の役枝が前後に出てゐるのを、圖で後進者に知らせるのは甚だ困難であつた。本著者は此の困難である枝の前後別を、明瞭に識別の出来るやうにしたのが、實體寫真機應用である。本寫真帖を見れば、枝の前後は勿論、凡そ何寸ぐらゐ離れてゐると云ふ緻密な點まで判明するところが出る。蓋し是れ本帖の特徴である。

生花投入と盛花

尾崎垣子

大正六年二月十五日

二五七七 活版 一冊

生花の手びき

花道研究会

大正六年二月

二五七七 活版 一冊

生花諸流指南

所縁齋一嘯

大正六年二月

二五七七

古流生花傳書

千羽理若  
山本理吟  
池田理英

大正六年三月十五日

二五七七 石版 三冊

附言 古流皆傳口訣抄、

古流師範代相傳抄、

古流會頭相傳抄。

生花志をり

青雲齋勇甫

大正六年三月廿二日

二五七七 活版 二冊

未生流傳書

未生齋廣甫  
佐藤新兵衛

大正六年四月十五日

二五七七 活版 二冊

附言 初傳花術三才之卷、體用相應之卷。

遠州流挿花紅葉の雫 小田百太郎

大正六年四月十五日

二五七七 版本 一冊

南宗瓶華譜 早川松雨

大正六年四月十五日

二五七七 コロタ  
イフ版 一冊

獨習投入花 中澤理水

大正六年五月十日

二五七七 活版 一冊

投入盛花寫真圖説 近藤正一

大正六年六月五日

二五七七 寫真版 一冊

投入盛花寫真百景 近藤正一

大正六年六月

二五七七 寫真版 一冊

投入草木の出生 小林鷲洲

大正六年八月五日

二五七七 活版 一冊

附言 本書外題冠頭に『投入盛花』としてあるけれど、内容は草木の生ひ立ちを専門的に記したのである。草木の生ひ立即ち斯道でいふ出生なるものは草木自然の形態であつて、何流何派といふが如きものでない。のみならず各流派を通じて必要なは論を俟たない。然し多數の草木を調べるには相當の年月を費さねばならぬ。成長に従つて變る状態を、時折注意して居らぬと、眞にせまつた姿を表はすことはむづかしい。中には三年もかゝるものがある。又日數の短い割合に状態の變化の著しいものもある。以上の條件を實地に研究して其の種類を集めたものが本書の特色である。本書は大正十一年三月書肆の望みによつて外題を『出生投入花と盛花』と變更し、其の際追加として斯道で重用視する葉の組み方や、蔓の巻き方及び採集に赴かれる人々の心得て置かねばならぬことをも記して置いた。



投入と盛花の秘訣 井上嶺子

大正六年八月廿五日 二五七七 活版 一冊

生花の巻 齋藤鹿山

大正六年九月十日 二五七七 活版 一冊

盛花と水揚 橋本墨花

大正六年九月十六日 二五七七 活版 一冊

祖山流地の巻 安井真正齋

大正六年十一月八日 二五七七 活版 一卷

生花大鑑 玄文社

大正六年十一月八日 二五七七 活版 一冊

遠山清流傳書 吉川秋堂

大正六年十一月十日 二五七七 寫本 二冊

附言 華鑑天の巻、華鑑地の巻。

諸流花道と茶道 中澤理水

大正六年十一月十日 二五七七 活版 一冊

四季盛花の活け方 光永文子

大正七年一月一日 二五七八 活版 一冊

竹屋流傳書 上田立正庵

大正七年一月十日 二五七八 寫本 五冊

附言 心得の巻、床飾の巻、秘訣の巻、儀式の巻、規矩の巻。

古折入花春秋圖譜 島田半次郎  
池上福二郎  
木村勉

大正七年一月廿日 二五七八 版本 一冊

花矩之巻 花道  
初傳 富岡慶太郎

大正七年三月二日 二五七八 石版 一冊

坊觀流盛花 木原啓作

大正七年三月十五日 二五七八 謄寫 一冊

盛花投入大鑑 安達潮花

大正七年三月廿一日 二五七八 活版 一冊

遠宗流眞の巻 村上梧翠

大正七年五月二日 二五七八 謄寫 一冊

四季の盛花 小原光雲

大正七年五月五日 二五七八 謄寫 一冊

文人式瓶華 華遊軒一笑

大正七年五月七日 二五七八 版本 一冊

盛花源氏五十四帖圖會 宮田要治

大正七年五月十一日 二五七八 版本 一冊

圖式盛花投入花之栞 圖式  
解説 石黒喜平治

大正七年五月十六日 二五七八 活版 一冊

遠宗流行之巻 村上梧翠

大正七年六月二十日 二五七八 謄寫 一冊

投入花 投入花  
盛花 ひとりけいこ 長谷川喜努

大正七年七月十三日 二五七八 活版 一冊

古流生花家元系譜 玉川榮吉等

大正七年八月十五日 二五七八 石版 一冊

投入盛花十二ヶ月 近藤正一

大正七年八月十八日 二五七八 活版 一冊

盛花瓶花集 小原光雲

大正七年九月一日 二五七八 寫真版 一冊



遠宗流草の巻

村上梧翠

大正七年九月十一日

二五七八

活版 一冊

八十四

御大典紀念

肥原勝二

大正七年十月十日

二五七八

活版 三冊

千代の榮

美笑齋一樂

大正七年十月十五日

二五七八

活版 一冊

四季の眺

千葉晚香

大正七年十一月十日

二五七八

活版 一冊

花環花束花籠の作り方

附言 大正五年發行の『花環の作り方と其心得』と同一やうに見ゆる。

二五七八

活版 一冊

宏道流插花圖會

内田常二郎

大正七年十一月十五日

二五七八

活版 一冊

盛花投入の新研究法と其挿方

安達潮花

大正七年

二五七八

活版 一冊

盛花の枝折

木原啓作

大正八年四月三日

二五七九

活版 一冊

生花自習自在

所縁齋一嘯

大正八年五月十日

二五七九

活版 一冊

生花投入能く保つ水揚秘法皆傳

松島種美

大正八年六月十日

二五七九

活版 一冊

池坊生花講義

東京婦女會編

大正八年九月十五日

二五七九

活版 五冊

鏡

吉村華芸

大正八年十一月

二五七九

活版 一冊

花

附言 前記大正七年出版の『坊觀流盛花』と匹敵してゐる。

大正三年發行の『生水あげの菜』と似てゐるやうである。

二五七九

活版 一冊

遠山正流傳書

福田又兵衛

大正八年十一月十七日

二五七九

石版 五卷

附言 初傳之卷、中傳之卷、奥傳之卷、皆傳之卷、默契之卷。

大正八年十二月廿五日

二五七九

活版 一冊

盛花投入標準花型圖鑑

安達良雄

大正九年二月十九日

二五八〇

石版 各一冊

二葉流傳書

堀口榮三郎

大正九年三月十八日

二五八〇

活版 一冊

附言 初傳二葉の卷、中傳性情の卷、

大正九年六月十日

二五八〇

活版 一冊

深雪御流花起之卷

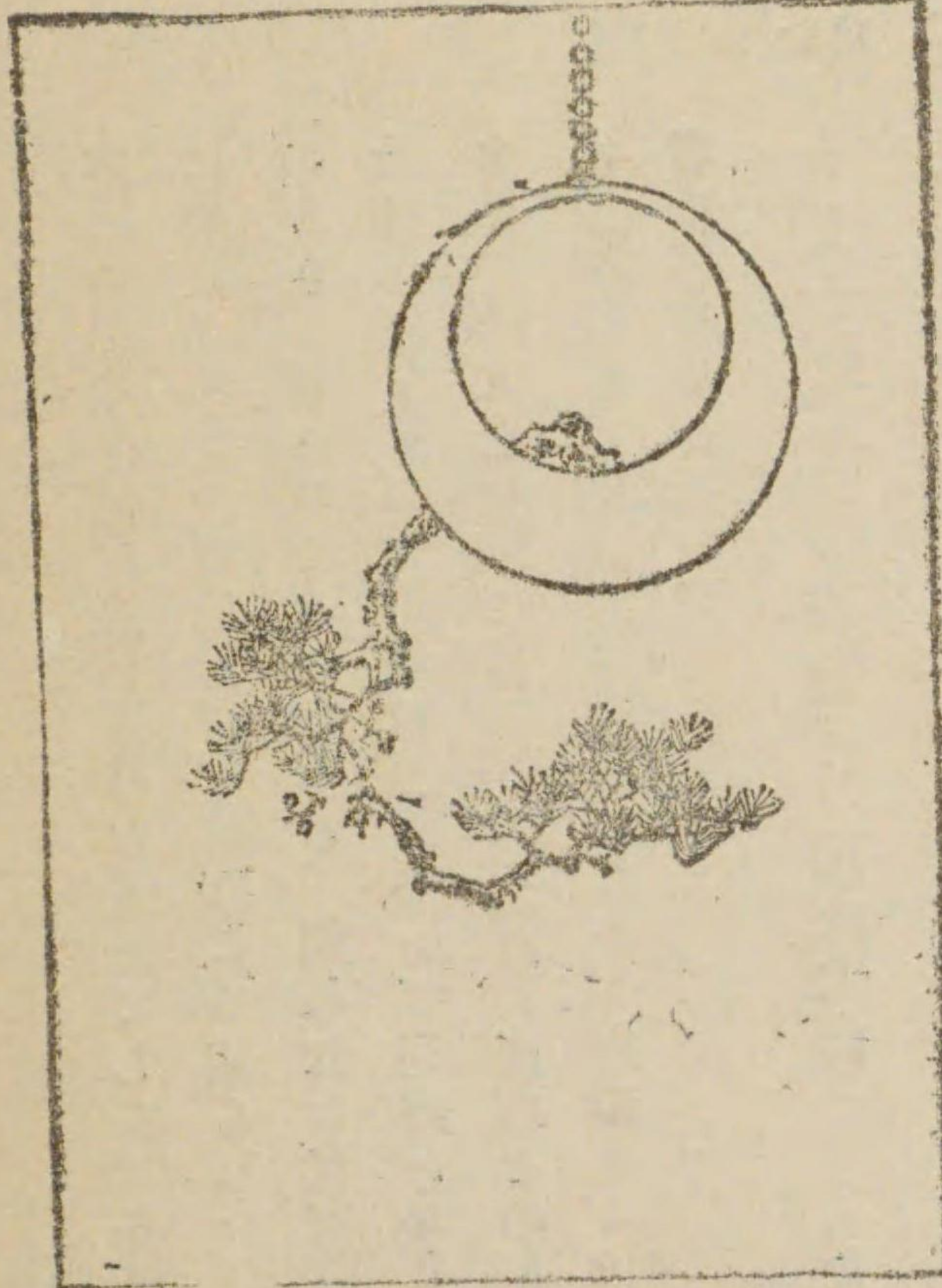
榎木芦月

小林鷺洲

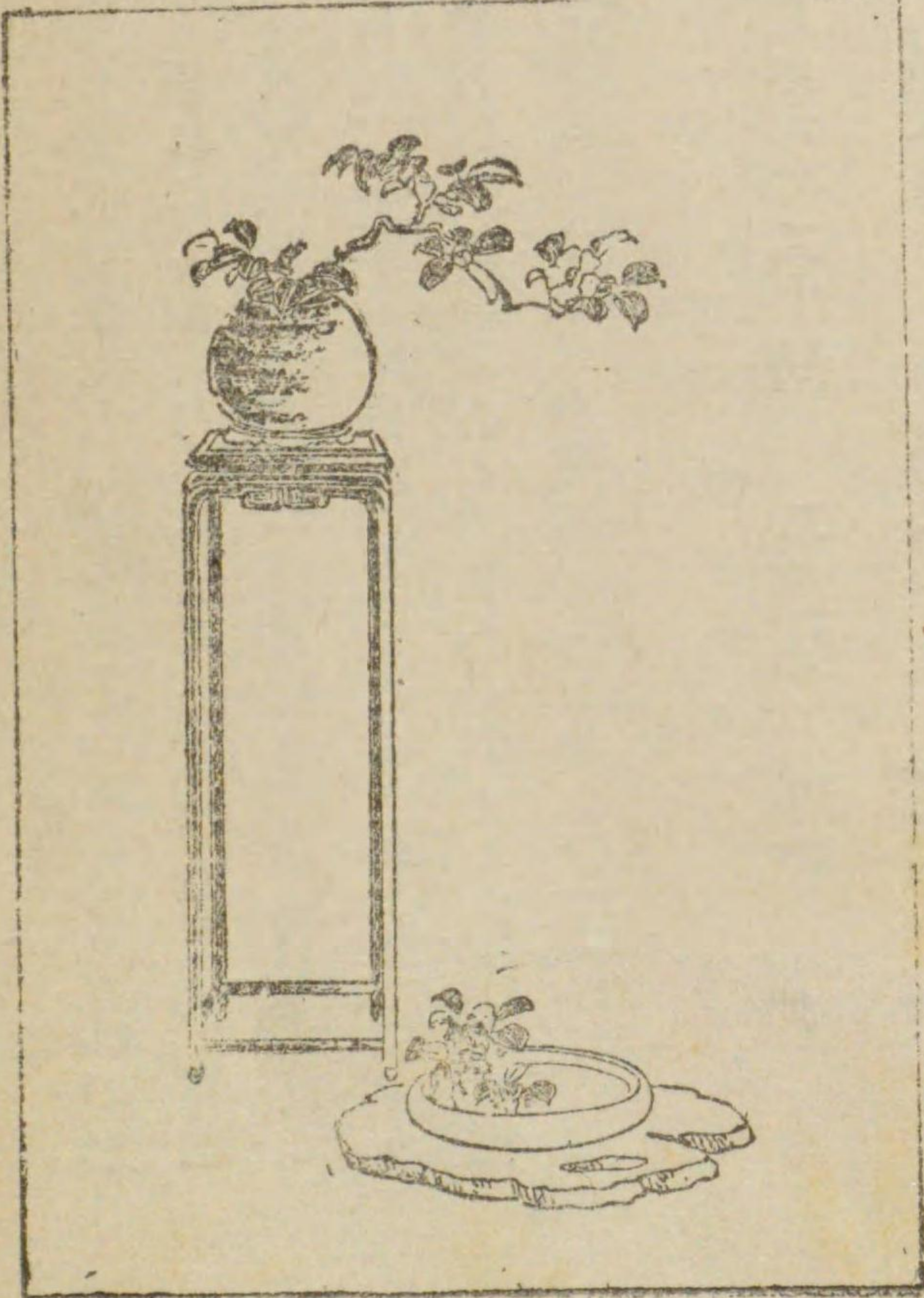
正花挿法の極意

正花挿法の極意

(上)意極の法挿花正



(下)意極の法挿花正





本書の插花法は自然の原理を基礎として、各流派の規矩に拘泥しないのである。然らば何れの形に象りて挿すかと云ふに、何れにも據らない。但し何れにも據らない象らないと云ふ所に、真理の存在を認めさせるのである。斯の如き真理の含まれた正しい插花法を得られるのが即ち極意と云はねばならぬ。此の挿法に基いて花卉を取扱ふ時は、千態萬様自由自在である。初心の頃より自己の挿入した花に對して、批評の出来るのが本書内容の獨得である。初心の頃よりはるが故に、挿入する度毎に著しく進歩する。然し本書の主意は自發的であらから、頭腦明哲な者ほど進歩が速い譯である。

はいけ 十人女現代稽古振り 小林鷺洲

大正九年六月二十日 二五八〇 活版 一冊

茶花稽古集 戸田音一

大正九年八月 二五八〇 コロタ イブ版 一冊

插花之栞り 須藤正二

大正九年九月廿二日 二五八〇 石版 一冊

正花 光線之出生 小林鷺洲

大正九年十月二十日 二五八〇 活版 一冊

正風盛花投入花 寫真集 小島泰次郎

大正九年十一月五日 二五八〇 寫真版 一冊

紫宸殿立華御會記 上野啓純

大正九年十一月二十日 二五八〇 活版 一枚

花遠宗流心得之卷 村上梧翠

大正十年二月廿五日 二五八一 謄寫 一冊

日本新花道に就て 小林鷺洲

大正十年四月十八日 二五八一 活版 一冊

四季草木水揚法 大日本華道ひろめ會編

大正十年四月十八日 二五八一 活版 一冊

生花類別花型集 鈴木商店編

大正十年六月廿一日 二五八一 版本 一冊

花道全書 足立連逸

大正十年九月廿日 二五八一 活版 三冊

附言 享保二年上梓の『花道全書』と書名を同じくすれど、内容は異つてゐて挿繪中古書に似たのがある。

雅題金玉 堀口榮三郎

大正十年十一月廿五日 二五八一 活版 二冊

薰風帖 安達潮花

大正十年十二月廿日 二五八一 コロタ イブ版 一冊

花の素 勅使河原久治

大正十一年二月十八日 二五八二 活版 一冊

常盤草百瓶圖解 荒木白鳳

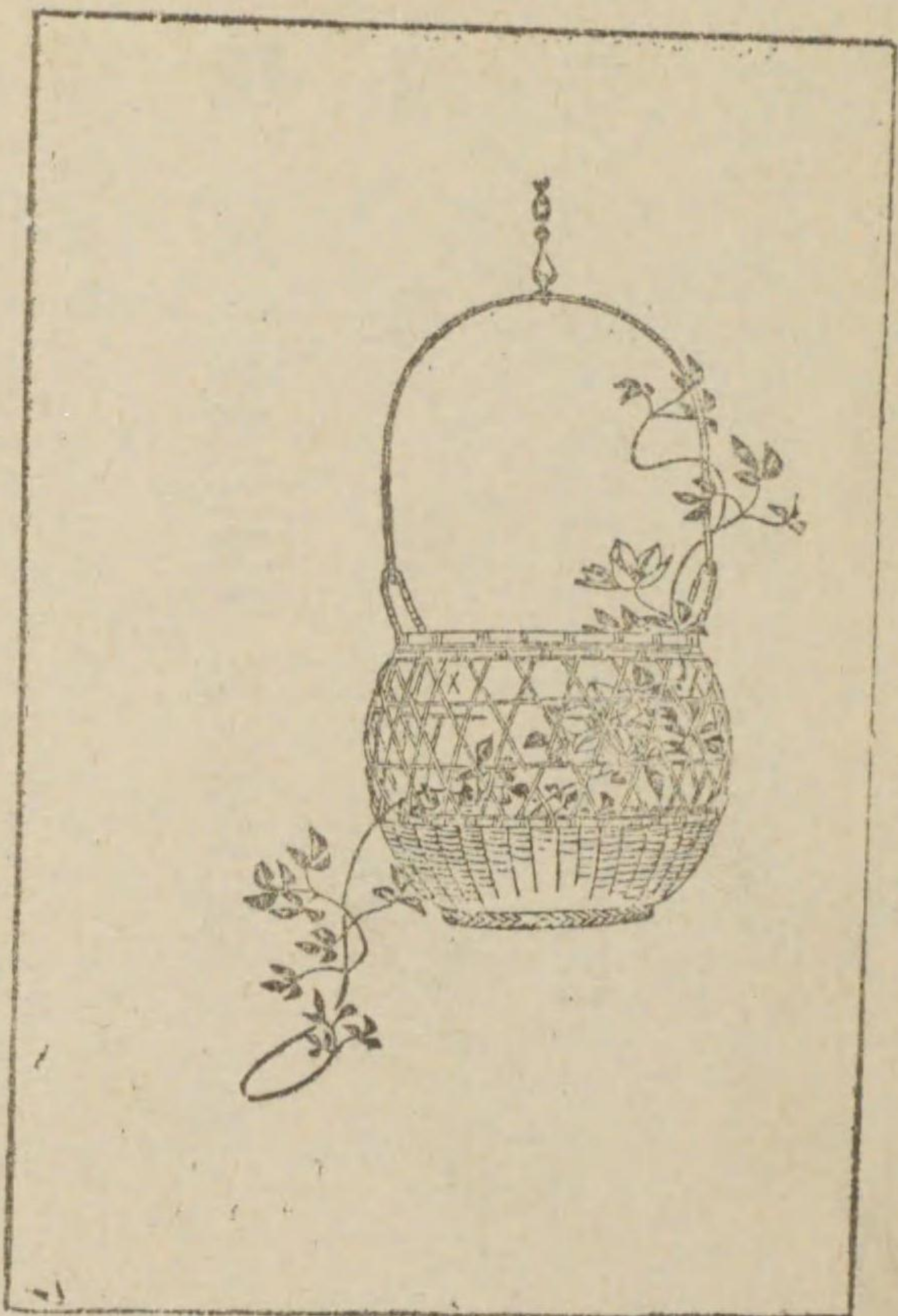
大正十一年二月廿八日 二五八二 版本 一冊

田生 投入花と盛花 小林鷺洲

大正十一年三月五日 二五八二 活版 一冊



本位 出生 投入花と盛花(上)



本位 出生 投入花と盛花(下)



保田式 投入盛花實現挿法 保田不識庵

大正十一年八月廿四日 二五八二 活版 一冊

發行年月日不明の書籍

(書名五十音順)

閣 礫 問 答 一峯庵花薫

寫本 五冊

池坊家傳百ヶ條聞書 渡邊門人 庄子國友

寫本 一冊

池坊御流 生花略傳 池坊役入松居

寫本 一冊

池立華百瓶圖 猪飼三左衛門

版本 二冊

一陽流傳書 一陽館挿丸

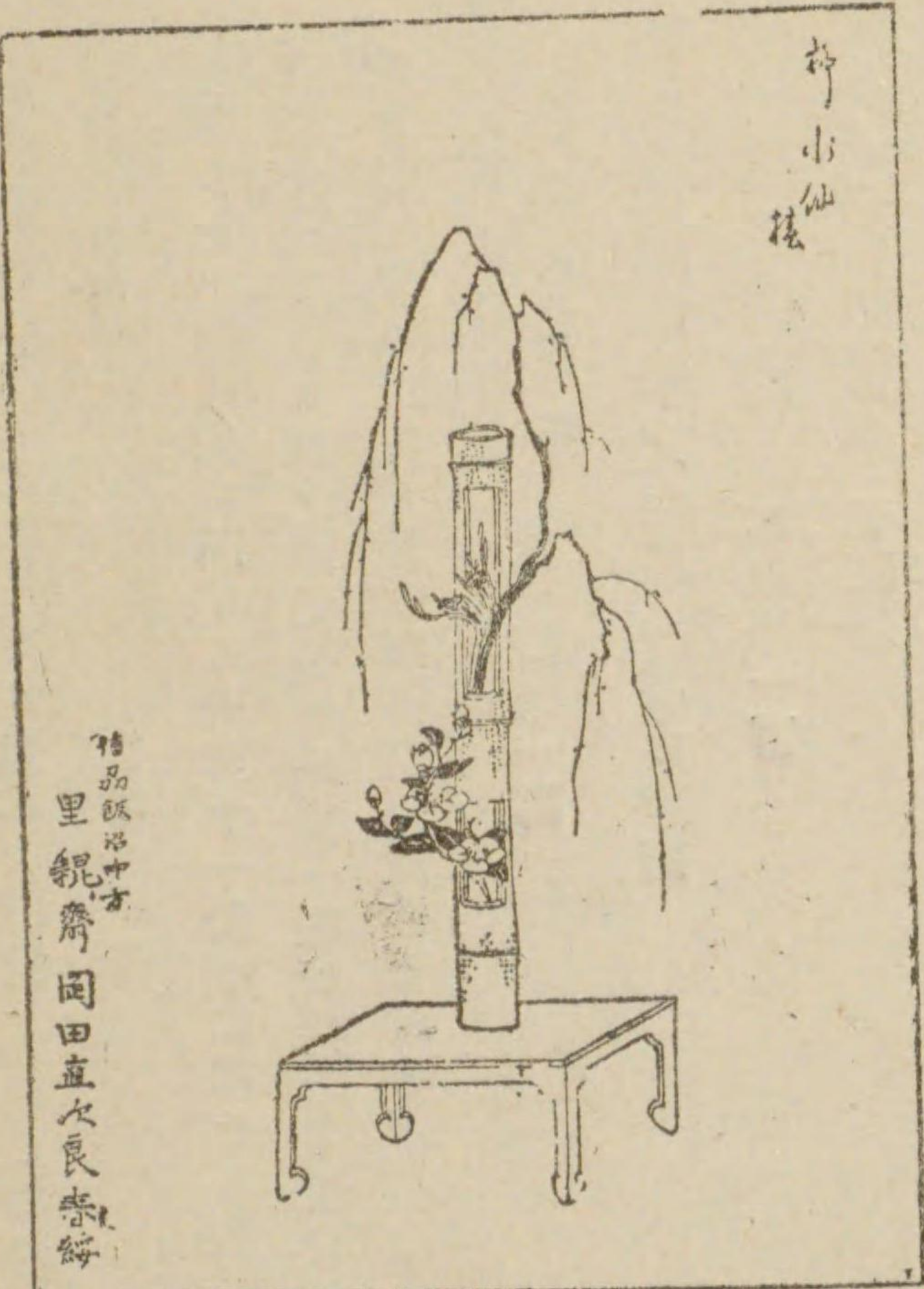
寫本 四冊

附言 花術三才之卷、花術體用相應之卷、花術原一旋轉之卷、花活小卷傳。

版本 一冊

遠山流里曙春之卷 里曙齋

遠山流里曙



元祖は丹波の人で姓を遠山と云ひ、弟が浪花の地に來てこれを流布したのである又弟子が信州で傳へたが、同地で本書の發兌を見るまでになつたから、一時は盛んであつたらうと思はれる。明治二十年頃の花形は曲線美の方へ少し傾いてゐたが、大正の現今大阪では花形が立氣味に變つた。上圖は信州で上梓したものである。

淺草遠州流深秘挿花十花王傳書

寫本 一冊

遠州流活花古代逸許百ヶ條

寫本 一冊



遠州流插花免許極秘  
切紙口傳百ヶ條

寫本 二冊

遠州流插花免許の内  
初傳百ヶ條

寫本 二冊

遠州流插花免許の内  
中傳百ヶ條

寫本 三冊

遠州流插花初傳

寫本 一冊

遠州流插花中傳

寫本 一冊

附言 以上遠州流に關する書籍十一冊中に記せる名は「此書は二世本松齋未世盛前元祖本松齋先生時代免許百ヶ條之傳元祖松柏齋一瓢所持の品故有而傳來也。松井齋」。著者云ふ本書は相當の表装を施してあつて、静岡圖書館の藏書である。

正風遠州流插花獨稽古

貞松齋米一馬

版本 一冊

遠州流花道四季之卷 江守庵靜固

寫本 一冊

遠州流生花傳書 不選庵一甫

寫本 一冊

萬年青秘圖初卷 五粧齋

寫本 一冊

行之卷 祥雲齋止水

寫本 一冊

轡組方口傳聞書 古洞齋 (二四六三年に本著者の刊行本あり)

寫本 一冊

花術轡之卷 微笑庵

寫本 一冊

花道哲學教會之趣旨 池坊内 武藤松庵

版本 一冊

行 之 卷

盆花

本の大石ノ後ヨリ出マ  
州ハ大石ノ前ヨリ生ル

秋の末より春の初め  
是を盆花と云



葛盆寸法  
大四五寸  
中三入寸  
小二入寸

石之目方  
大石 四五寸  
中石 三寸  
小石 二寸

一節に「盆山に花を生るを盆花と云ふ。則石を花留に用ゆ。冬春の間は水を隠すなり。小砂美石を多く入て水をしたく溜置なり。是を砂生とも盆庭とも云ふ。砂の物の始なり。」とあり。盆花の圖は本書以外に見當らない。

花道秘書  
活花傳書  
原一旋轉之卷  
源氏五十四帖卷  
骨法指南

青山舎 服部霞月

北條竹鳳子序あり

未生齋廣甫 (何れの未生齋廣甫なるや不明)

曉雲齋遊龜 (二四九八年に本著者の寫本あり)

生々庵 (二五二〇年に本著者の刊行本あり)

寫本 一冊

寫本 一冊

版本 一冊

寫本 一冊

版本 一冊



小堀九世御家元花道 花樂齋

首中卷

五明流生花道乾之卷 五明齋貞悅

古今流活花の栞 城南會編

古流生花初傳 臥雲齋

衣香後編 貞松齋米一馬 (二四六〇年に衣香の初編あり)

插花筑紫百瓶 龜齡軒斗遠 (二四八六年に本著者の刊行本あり)

插花の法式 一樂齋里松

草木養之卷 未生齋一甫 (二四七六年に本著者の刊行本あり)

嗟峨流生花箇條 芝原大要

松月堂古流生花分體 隨器亭如水

秘傳之卷

正風插花墨江卷 岸松齋一貞

諸花投入指南秘書 服部英翁 (二四〇五年に本著者の寫本あり)

初禁甫譜 壽松園 (二五一一年に本著者の刊行本あり)

寫本 一冊

寫本 一冊

版本 一冊

寫本 一冊

版本 四冊

版本 二冊

寫本 一冊

寫本 一冊

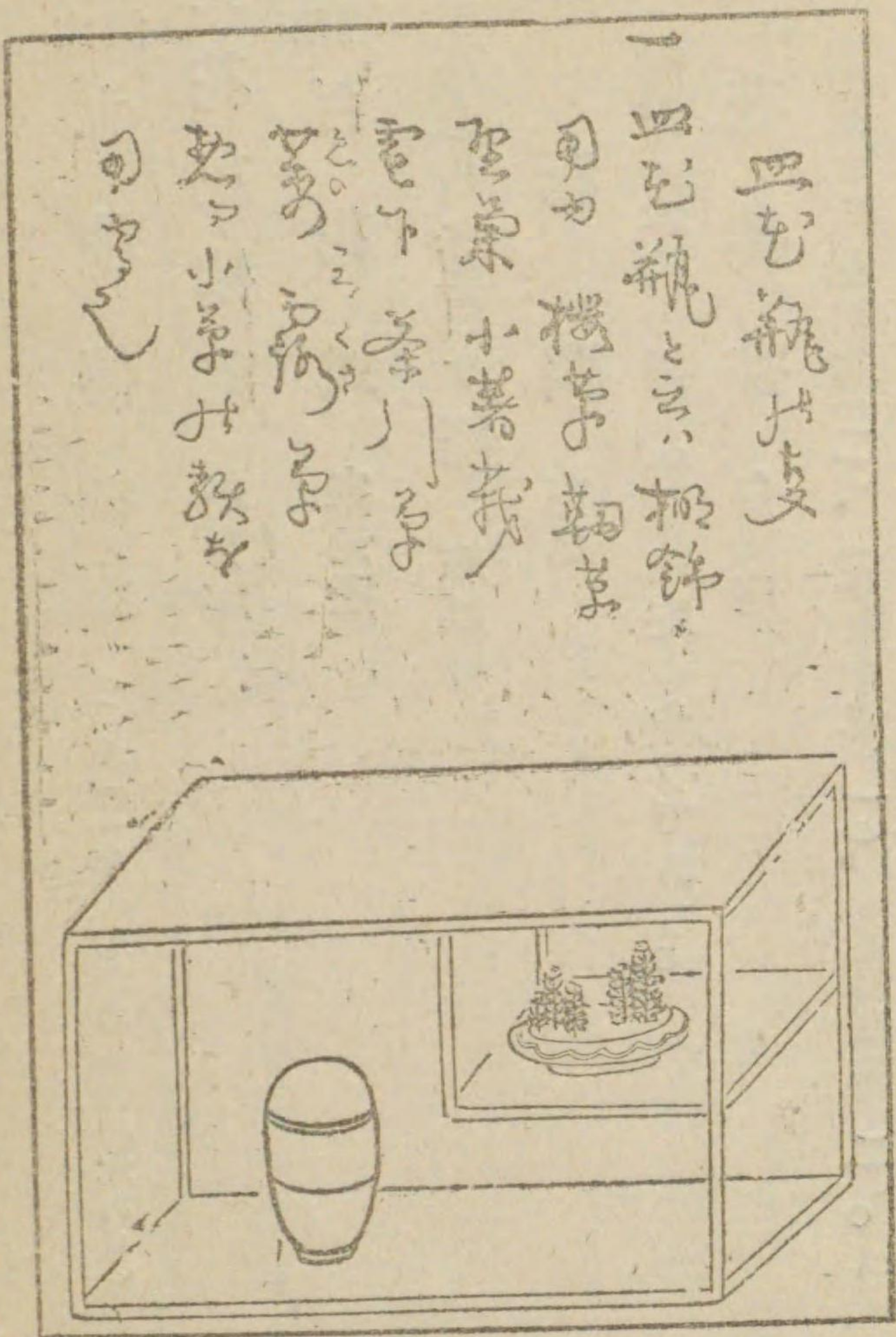
寫本 一冊

寫本 一冊

寫本 三冊

寫本 一冊

寫本 一冊



初傳、中傳の卷 眞成齋 (二五六九年に本著者の刊行本あり)  
生花因由 是心軒一露 (二四三四年に本著者の刊行本あり)  
生花奧傳書 青柳齋  
生花極秘書 儉閑齋似水 (二三九七年に本著者の刊行本あり)

附言 本書に記す花圖は大正の現今世上投入或は盛花と稱へてゐる花形と彷彿たるものがある。

圖中棚にある『皿花瓶』は儉閑齋似水生存中所々にて行はれたものと思はれる。本書は似水の自書自書であつて、彩色がしてあるから、複寫の都合上、友人が模寫したのである。本書より四十三年以前立華訓蒙圖彙が世に出てゐるから、斯様の花形も既に存在してゐたかもしれない。



萬年青百瓶活方圖式 松養亭 (二五〇五年に本著者の寫本あり)

御流 九枝傳 壽松園 (二五一年に本著者の刊行本あり)

生花正傳記 松月庵

新生花百花式 家元選

生花道前卷百ヶ條 春鳳軒

生花圖 南旭

附言 本書の圖は恰も印版のやうである。

生花傳書 白鹿庵

附言 生花初卷(二)、花道中卷(一)、花道後卷(二)。

生花拋入ヶ條 服部英翁 (二四〇五年に本著者の寫本あり)

生花百規圖 前池坊專定

生花百瓶圖 是心軒一露 (二四三四年に本著者の刊行本あり)

秘傳 生花野山の錦 木村周馬

生華水莖百瓶 龜齡軒斗遠 (二四八六年に本著者の刊行本あり)

寫本 一冊

寫本 一冊

寫本 三冊

版本 一冊

寫本 一冊

寫本 一冊

寫本 五冊

寫本 一冊

寫本 一冊

版本 二冊

版本 一冊

版本 二冊

青陽流傳書 春陽館逸峯

附言 陰陽規矩之卷、花術、原一旋轉之卷。

生花わらひ草 亮々館主人

石州流 挿花陰陽根之卷 一瓢庵

石州流傳書 春秋軒 (明和九年に本著者の寫本あり)

石州流傳書 春古洞齋 (二四六三年に本著者の刊行本あり)

附言 前卷口傳書畫圖解、生花内傳秘録口傳書、生花拾遺卷口傳書、中卷畫圖解、中卷口傳百廿ヶ條、草木傳、生花後卷畫圖解、生花後卷口傳書、無名。

當流萬年青秘傳之圖解 青柳齋加筆

中卷九十二ヶ條口傳書 富永青柳齋加筆

東山流秋の夜話 登々齋花岳

東山花傳抄 曉雲齋遊龜 (二四九八年に本著者の寫本あり)

東山流番花山策起原 得實齋 (二四五五年に得實齋の刊行本あり)

唐八景盤

青竹齋司子  
青木窓樂

寫本 一冊

寫本 二冊

寫本 一冊

寫本 一冊



後 百 花 式 家元選

秘奥御傳書 松養亭声津 (二五〇五年に本著者の寫本あり)

美笑流活花四季之眺 美笑齋一樂

瓶史草木備考 木村純道

松山古流生花百ヶ條 花鳳軒友翁

未生流皆傳書 未生齋一甫 (二四七六年に本著者の刊行本あり)

未生流規矩之卷 未生齋一甫 (二四七六年に本著者の刊行本あり)

義政公御式目 藤井里凌齋筆 (二五七四年に藤井昌鳳の刊行本あり)

附言 原書は相阿彌の自筆であつたと。この書は東京南葵文庫にある。

立花池坊流 京都安立坊、東都竹坊、東都梅坊、  
四師隨身口授卷 東羽智龍坊

著者及び發行年月不明の書籍 (書名五十音順)

有毒植物圖說 版本 二冊 定式卷、五ヶ條卷。

池坊傳書 木版 六卷 一志流插花表卷

附言 七種傳、草木集、生花卷、廻生卷 遠山流花圖

版本 一冊  
寫本 一冊

版本 一冊

寫本 三冊

寫本 一冊

書寫 一卷

寫本 一冊

寫本 一冊

寫本 三冊  
寫本 一冊

遠州流插花秘訣

附言 初傳陰陽(二)中傳之卷(一)

遠州流插花秘傳書

附言 松竹梅、紙剪。

規矩之卷

活花指南抄

花臺垂鉢寸法

花道圖辨書

花傳大集成

君臺觀左右陰記

附言 群書類從本卷三百六十一内にあり

古今立花大全

孤山軒生花譜

五節句飾之卷

五明流傳書

寫本 三冊

寫本 四冊

寫本 一冊

寫本 一冊

寫本 一冊

寫本 一冊

寫本 一冊

版本 一冊

版本 一冊

寫本 一冊

繪圖 一卷

寫本 四冊

古流活花出生卷

古流生花宗匠錄

古流生花圖會

相阿彌流生花傳書

插花軌範

插花心花抄

插花本草

松月堂古流傳書

正風亭立華之傳

新遠州流生花極秘傳之卷

紫之卷

新遠州流席上譜

深秘要集

生花政實傳書

附言 禮式法

生花道水揚秘法

版本 一冊

寫本 二冊

寫本 一冊

版本 一冊

版本 一冊

寫本 一冊

寫本 三冊

寫本 一冊

寫本 三冊

寫本 二冊

寫本 一冊

寫本 一冊

寫本 一冊

寫本 一冊



生花獨習自在	版本 一冊	東山流花器全圖	寫本 一冊
生華秘傳書	寫本 一冊	東山流古代の花形	寫本 一冊
活花秘傳書	寫本 一冊	東山流花薄精輯	版本 二冊
生花獨稽古 (松月堂古流)	寫本 一冊	轉傳花詠集	寫本 一冊
評判當世垣のぞき	版本 一冊	附立花秘書	寫本 一冊
附言 著者と發行年代不明であるが内容は頗る無邪氣に當時斯道の弊風を書いてゐる。著者云ふ黄金の前に頭を下げるのは昔も今も變たことはない。		白色御傳書	寫本 一冊
石州流三百ヶ條	寫本 一冊	法合頭書	寫本 一冊
附言 無住和尚の系統らしと添書してある。		秘傳花	寫本 一冊
石州流生花陰陽之卷聞書	寫本 一冊	瓶花要導集	寫本 一冊
石州流生花圖式	寫本 一冊	名月之卷	寫本 一冊
千家花生寸法	寫本 一冊	明治新選立生千華式	活版
大極譜	寫本 一冊	妙術博物筌	版本 七冊
東山新流挿花三才卷	版本 一冊	妙空紫雲之卷	書寫 一卷
		夕顔御傳書	寫本 一卷
		立華綱目大成	寫本 一冊
		立華圖會	銅版 一折

斯道の機關雜誌

花	東京 上田博臣	花	大阪 松尾英四郎
清	大阪 宮本弘	明	大阪 菅原正隆
花	東京 平元良作	國	大阪 中原福三郎
茶	神戸 土居喜惣太	國	大阪 森 俠 祐
美屋比の友	名古屋 伊藤明次	花	大阪 足立雅一

追加

古田流生花獨稽古	古來庵松堂	明和六年春	二四二九	版本 一冊
初學養種	千松庵一樹	文政元年十一月序	二四七八	寫本 一冊
附言 本書は版本の寫しなるか、末尾に書肆の名あり。				
新花道枝の止め方	小林鷺洲			謄寫 一冊



唐書

餅花譜

吳張謙德

附言 廣百川學海第七〇冊中、欣賞編第七冊中、說郛第二三三冊中、等にあり。

瓶史

明袁宏道

附言 廣百川學海第七〇冊中、欣賞編第七冊中、說郛第二三三冊中、寶顏堂秘笈第二四冊中、及び羣芳譜等にあり。

瓶史目表

附言 說郛第二三三冊中にあり。

遵生八牋

附言 本書中にも瓶花に關する記事あり。

花道沿革梗概

花道に於て最も古いと思はれる『餅花譜』の著者張謙德は三國時代の吳の人であらう。本書が渡來したのは何年の頃か分ないが、本書が我國の花道に貢獻したことは争はれない事實であらうと思はれる。著者は斯道の研究の歩を進めるに従つて、その内容の各項が自然の眞理に適つてゐることを見出した。又我國の古い著書にも開が一節を引用してゐるのがある。假りに三國時代吳の亡びたときとすれば紀元九四〇年である。斯道の起原も亦古しと謂ふべきである。

本邦では南都の元興寺の護命僧正が花を好んで自ら作り佛にも供へ自分にも立て、樂んだ。當時の花畑であつたと云ふ土地が奈良市に花園町と稱して跡を留めてゐる。が、其の頃は花道が未だ現今のやうに一般に流行したとは思はれない。護命僧正が入寂せられたのが紀元一四九四年である。

降つて京都梅尾山の明惠上人が護命僧正の花の挿し方を追慕されて之を行はれた。僧正の定められた花の規矩(枝の配置)たる地水火風を上人は地水火風空に改められたと云ふ。上人の入滅は紀元一八九二年である。

大和西大寺の叡尊は明惠上人の花の法則を慕はれて自らも立てられ、他にも傳へられ、號を松月堂と云つた。飢民の救恤に盡され後に興正菩薩の諡を 天皇より賜つた。遷化されたのは紀元一九五〇年である。



日本最古の花書は『仙傳抄』で、書の末尾に「此仙傳抄一作三條殿御秘本云々」と記し、その次に「文安二年三月廿五日富阿彌相傳」と記してある。文安二年は紀元二一〇五年である。

數寄者を六人集めて花の論をさせたと云ふ足利八代將軍義政が、京都東山の銀閣に移つたときは紀元二一四三年である。風月を友とされたのも十年に満たず紀元二一五〇年に世を去られた。

本書劈頭の「池の坊古傳法卷」は紀元二二二一年に生れた。現今に於ても其の名を傳へてゐる『瓶史』の著者袁宏道が在世であつたと云ふ明の萬曆十四年は紀元二二四六年である。

其の他の著書は本文に網羅してある。

# はいけ 古今書籍一覽終

古書の外題は發音に由つて配列し、初心者之便宜を圖り、冠題の除いたのも重複を厭はず加へてある例へば、『淺草遠州插花實形圖』はアの部にもソの部にも載せてある。

## 古書索引

### 〔ア〕

淺草 遠州 插花實形圖……………	六三	池坊家傳百ヶ條開書……………	六八	池の坊生花集……………	六三
淺草 遠州 流深秘插花十		池新編立華百瓶圖彙……………	九	池の坊百種……………	七一
花王書……………	八九	昇玉派 花 集……………	七四	池の坊百瓶……………	七
關 礫 問 答……………	八八	昇派 生 花 菜……………	七四	池の 生花の手びき……………	七三
〔イ、井〕		池坊生花講義……………	八四	はいけ 十人女現代稽古振り八六	
家 元 系 譜……………	八三	池坊生花傳書說明書……………	七七	伊 勢 物 語……………	二二
家 元 代 華 集……………	七六	池坊專應口傳……………	七六	一 陽 流 傳 書……………	八九
家 の 寶……………	七五	池 坊 傳 書……………	七六	一 志 流 插 花 表 卷……………	九六
生 入 華 莖 芽……………	二	池 立 華 百 瓶 圖……………	八九	一 帆 青……………	五一
池坊家花道秘書……………	七	池坊 生花略傳……………	八六	允 中 流 瓶 花 大 意……………	七五
		池の坊古傳書……………	二	允 中 插 花 鑑……………	四三
		池の坊古傳法卷……………	一		



陰陽根の巻……………九五  
陰陽立花秘傳……………一〇

〔ウ〕

浮草記大意……………二〇  
梅ケ香……………五三

〔エ、エ〕

越中插花史料……………六八  
遠山正流傳書……………六五  
遠山清流傳書……………六二  
遠山流花圖……………六六  
遠山流里曙……………六九  
遠山流席上譜傳卷……………五三  
遠山傳書……………七六  
遠州浮草記大意……………二〇

紙口傳百ヶ條……………九〇

遠州流插花免許ノ内初

傳百ヶ條……………九〇

遠州流插花免許ノ内中

傳百ヶ條……………九〇

遠州流天地人の巻……………四七

遠州流傳書十種……………七二

遠州流花生秘傳……………三〇

遠宗流眞の巻……………八三

遠宗流行の巻……………八三

遠宗流草の巻……………八四

遠宗流心得之巻……………八五

袁中郎流插花圖會……………二六

遠萩原流眞理傳聞書……………一七

遠萩原流生花禁忌……………三二

遠州流插花秘傳集……………四七

遠州流活花手引草……………五七

遠州流活花字飛學……………五八

遠州流活花古代免許百ヶ條……………八九

遠州流花傳養法の巻……………六〇

遠州流花道四季之巻……………九〇

遠州流花道初傳之巻……………五九

遠州流花道傳書……………六二

遠州流眞行草并圖繪……………四七

遠州流插花意匠……………三六

遠州流正風花矩……………三五

遠州流插花紅葉の雫……………八一

遠州流插花初中切紙の巻四九

〔フオ〕

奥傳蕪陽の巻……………六八

奥傳口訣抄……………七九

奥傳禰の巻……………七二

小篠二葉傳……………一九

面白き植物……………六八

萬年青秘傳之圖解……………五五

萬年青白瓶活方圖式……………四四

折入花春秋圖譜……………八二

御飾書……………三三

〔カ〕

槐記……………九

改正出生傳……………三三

皆傳口訣抄……………八〇

遠州流插花初傳……………五五

遠州流插花初傳……………九〇

遠州流插花初重之傳……………三〇

遠州流插花前百首……………七三

遠州流插花千歳松……………四二

遠州流插花圖會……………六二

遠州流插花の栞……………六〇

遠州流插花秘訣……………九七

遠州流插花秘傳書……………九七

遠州流插花百瓶……………三三

遠州流插花百瓶圖……………六七

遠州流插花百瓶之圖……………二七

遠州流插花百瓶之圖……………六〇

遠州流插花免許極秘切

華王之巻……………三三

華鑑……………八二

花卉應用裝飾法……………七三

燕子花三十瓶之圖……………四六

燕子花百瓶圖……………三三

燕子花百瓶圖式附錄……………二六

花鏡……………八四

花矩之巻……………八三

花起之巻……………八五

寛農水……………一四

飾花御代の花……………七六

畏三樓三刺……………六〇

花術轡之巻……………九〇

華術原一旋轉之巻……………八九

華術三才之巻……………八九



花三才 嘸……………四  
 華術插花蔓言之卷……………七  
 華草木養之卷……………五一  
 華術 體用相應之卷……………六四  
 家 政 寶 典……………六六  
 雅 題 金 玉……………六七  
 花臺垂鉢寸法……………九七  
 花臺傳書并深傳龍吟抄……………三  
 活花宇飛學……………五  
 活花遠山流……………五三  
 活 花 記……………二  
 活花心得草……………五  
 活花極意秘傳集……………六四  
 活花指南抄……………九七  
 活華千瓶圖式……………四九

活花千代廻松……………七  
 活花圖大成……………一九  
 活花つららをり……………三〇  
 活花手引草……………五  
 活花手引種……………二四  
 活花手引種後編……………四  
 活 花 傳 書……………九一  
 活花 田邊和氣子刀自遣稿六四  
 活花道陰之卷百ヶ條目錄元  
 活花早さとし……………四  
 活花百瓶圖……………三  
 活 花 秘 傳……………五  
 活花秘傳書……………九  
 活花水揚法……………五  
 花天美希艸……………六  
 花 傳 抄……………一

花 傳 書……………七  
 花 傳 書……………一〇  
 花傳大集成……………九七  
 花道 池の坊生花集……………三  
 家元 華かゝみ花心粧の卷七四  
 家元 華道 池坊指南……………七五  
 華 道 一 斑……………六  
 花 道 陰之卷……………四七  
 花 道 陽之卷……………四七  
 花 道 遠宗流心得之卷……………八五  
 花 道 遠州流ひとり稽古……………五七  
 花道御門流百瓶集……………七九  
 華道初學の榮……………七一  
 花道 花矩之卷……………八三  
 花 道 全 書……………八  
 花 道 全 書……………八七

華 道 大 觀……………七五  
 花道圖辨書……………九七  
 花道哲學教會之趣旨……………九〇  
 花道と茶道……………八二  
 花 道 秘 書……………九〇  
 花道 插花百華撰……………五三  
 花道問答書……………四六  
 花道有名家一覽……………六三  
 からころも……………元  
 華鈴集 拋入華の圖……………一三  
 摘採書 花 曆 百 詠……………三六  
 〔キ〕  
 舊嵯峨御所生花秘術……………五九  
 九 枝 傳……………四九  
 菊 徑……………二二  
 規 矩 之 卷……………七

儀 式 之 卷……………八二  
 九品真行走卷……………三  
 鏡劍玉三秘之卷……………七三  
 曲体減枝傳……………三  
 行 之 卷……………九〇  
 去風流插花秘書剪紙……………三〇  
 禁 忌 之 卷……………一八  
 錦流亭百瓶……………五五  
 〔ク〕  
 變組方口傳聞書……………九〇  
 光線の出生……………八六  
 會頭相傳抄……………八〇  
 君臺觀左右陰記……………九七  
 薰 風 帖……………八七  
 〔ケ〕  
 稽 古 百 首……………一六

原一旋轉之卷……………九一  
 源氏活花記……………三二  
 源氏五十四帖卷……………九一  
 源氏插花碑銘抄……………八  
 源氏表裏之卷……………三七  
 源氏 瓶花規範抄……………三三  
 源氏六帖之花形……………四三  
 献備千歳花……………四  
 〔コ〕  
 好事出門壽……………三〇  
 宏道流插花圖會……………八四  
 宏道流馬耳蘭圖會……………七九  
 甲陽生花百瓶圖……………一五  
 高野之玉川……………四四  
 五行一根之卷……………七四  
 五



五行七説……………三六  
 極秘切紙口傳百ヶ條……………九〇  
 極秘傳之卷……………三五  
 心得之卷……………八二  
 今増浦立花大全……………九七  
 古今のながめ……………六六  
 今立花 大全……………五  
 今立花 圖編……………一〇  
 古今流活花之菜……………九二  
 今立花 手引草……………三九  
 古今 或 問……………七  
 孤山軒生花譜……………九七  
 五節句飾之卷……………九七  
 古代免許百ヶ條……………八九  
 御大禮記念千代之榮……………八四

骨法指南……………九一  
 琴浦之花……………五三  
 古法活花心得草……………五  
 古法插花會式の次第……………三  
 小堀<sup>九世</sup>花道首中卷……………九二  
 小堀<sup>御家元</sup>生花師説聞書……………三  
 五明流生花道乾之卷……………九二  
 五明流傳書……………九七  
 御門流稽古手引……………五五  
 古折入花春秋圖譜……………八二  
 故流禁花類辨……………三六  
 古流活花出生卷……………九七  
 古流 家元系譜……………八三  
 古流 奧傳口訣抄……………七九

古流 皆傳口訣抄……………八〇  
 古流 會頭相傳抄……………八〇  
 古流 生花講義……………七  
 古流 生花心得抄……………六  
 古流 生花再選百瓶圖……………四二  
 古流 生花四季百瓶圖……………一七  
 古流 生花百瓶圖……………三六  
 古流 師範口訣抄……………六  
 古流 師範代相傳抄……………八〇  
 古流 諸國百瓶圖……………三  
 古流 生花初傳……………九二  
 古流 初傳口訣抄……………六  
 古流 生花宗匠錄……………九七  
 古流 中傳口訣抄……………七九

六

古流 千代のためし……………六五  
 古流 生花千代の松……………六七  
 古流 生花圖會……………九七  
 古流 生花圖譜……………六七  
 古流 生花傳書……………六八  
 古流 生花傳書……………八〇  
 古流 生花百瓶之圖……………三  
 古流 松 廼 影……………五四  
 古流 松のまを利……………七三  
 古流 生花松のまほえ……………四九  
 古流 松のひとし保……………五  
 古門中百五十瓶……………四一  
 古流 插花のまをり……………七三  
 古流 插花のしるべ……………六八

衣之香後編……………九二  
 衣之香四編……………四六  
 衣之香三編……………四〇  
 衣之香二編……………三〇  
 根本生花白華集……………三七  
 〔サ〕  
 最新 插花水揚法……………七七  
 實験 嵯峨流生花箇條……………九二  
 攢花雜錄……………三  
 三雅 插花圖式……………六七  
 遠州 三才三徳之卷……………七二  
 三才 才 嘶……………四一  
 三十六花選相老帖……………三七  
 三野百花生集……………六五  
 三船五方之卷……………四三

三幅講義之卷……………七二  
 〔シ〕  
 聚會圖錄……………六六  
 四季具分泌傳書……………九  
 四季 遠州流插花百瓶……………三三  
 四季 草木水揚法……………八七  
 四季 茂り……………五〇  
 四季 賞花集……………二七  
 四季 養活傳……………三七  
 四季 養活秘録……………三三  
 四季 草木 養活秘録……………三三  
 四季 草木 艷……………六〇  
 四季 季 艷……………六〇  
 四季 季 園……………五七  
 四季 季 友……………二二  
 四季 季 の 詠……………五〇  
 四季 季 の 脉……………八四  
 四季 百瓶圖……………三三

七



四季盛花千種の錦……………七九  
 四季盛花の活け方……………八二  
 四季の盛花……………八三  
 紫宸殿立華御會記……………八六  
 實地 盛花瓶花秘法……………七六  
 實地 寫真百瓶……………七九  
 指南大全……………三五  
 しのぶ具左……………三三  
 師範口訣抄……………六六  
 師範代口訣抄……………八〇  
 終級之卷……………七六  
 十二難組葉集解……………三六  
 十人女現代稽古振里……………八六  
 出生 投入花と盛花……………八七  
 本山 四季艶……………六〇  
 挿花

諸國百瓶圖……………三二  
 初學養種……………九二  
 初級之卷……………七六  
 初禁甫譜……………九二  
 松月堂古流書……………九七  
 松月堂改正出生傳……………三三  
 古流生花……………三三  
 古流生花指南初歩……………六四  
 古流生花百瓶圖……………三三  
 松月堂生花分體秘傳之卷……………九二  
 松月堂古流傳書……………一九  
 松月堂古流傳書……………二〇  
 松月堂古流傳書……………三五  
 松月堂古流傳書……………三六  
 松月堂古流傳書……………四六  
 松月堂古流百瓶……………六二

松月堂古流百瓶後編……………六六  
 初生花早指南……………五九  
 初傳花術三才之卷……………八〇  
 初傳華譜要訣……………六八  
 初傳……………四七  
 正花 光線之出生……………八六  
 正花 挿法の極意……………八五  
 正風 四季廻園……………五七  
 正風 遠州流……………三三  
 正風 遠州流 岸松……………三三  
 遠州流 挿花獨稽古……………二六  
 遠州流 葉蘭遺芳……………五五  
 正風 花 矩……………五五  
 正風 花 鏡……………五一  
 正風 挿花墨江卷……………九二  
 正風 松の翠……………五八  
 挿花

正風 松の翠再編……………四一  
 正風 亭立華之傳……………九七  
 正風 盛花投入花 寫真集……………八六  
 正門百瓶圖……………三六  
 諸花投入指南秘書……………九二  
 諸家 活花通……………四一  
 諸匠 生花秘傳書……………五九  
 諸流 挿花捷徑……………七四  
 諸流 生花早指南……………五九  
 諸流 花道と茶道……………八三  
 諸流 古今のながめ……………六六  
 諸流 生花指南……………六六  
 諸流 生花初心早學……………七七  
 諸流 生花早指南……………五四  
 諸流 生花獨稽古……………五六

諸流 生花飾方圖解……………七五  
 諸流 生花秘傳集……………七〇  
 諸流 圖式 生花秘傳獨稽古……………七六  
 諸流 改訂増補 生花初まなび……………七六  
 諸流 秘傳 生花初まなび……………七六  
 諸流 秘傳 生花四季の錦……………三三  
 諸流 秘傳 生花獨習……………六〇  
 諸流 秘傳 生花獨習自在……………五九  
 諸流 秘傳 生花早學……………五九  
 諸流 秘傳 生花獨案内……………五九  
 諸流 秘傳 生花獨稽古……………五九  
 諸流 頌流 生花記……………三三  
 諸流 頌流 生花記附録……………三三  
 新遠州花極秘傳之卷……………九七  
 新遠州流席上譜……………九七  
 新花 花鏡……………五五  
 新花道枝の止め方……………九七

眞成 生花集……………七五  
 眞成 流傳書……………七〇  
 新選 活花圖式……………六四  
 新常 盤艸……………七〇  
 眞派 眞原瓶花史……………七五  
 眞派 眞原瓶花史……………七五  
 深秘 要集……………九七  
 新編 立華百瓶圖彙……………九  
 〔ス〕  
 すみがねの巻……………三三  
 住の江卷……………三七  
 〔セ〕  
 生池の坊百花集……………六七  
 生池の坊百種……………六七  
 生池の坊百瓶……………六七  
 生花 因由……………九二  
 生花 初まなび……………七六







生華水莖百瓶……………九四  
 生花見儘集……………二六  
 生花略傳……………六六  
 生花類別花型集……………六七  
 生花わらひ草……………九五  
 青山萬年青百瓶活方圖式 九四  
 御流 活花九體傳……………九四  
 御流 活華千瓶圖式……………九四  
 御流 活花手引種……………二四  
 御流 活花手引種後編……………四八  
 青山 九枝傳……………九四  
 御流 插花有明之卷……………一〇  
 青山 三月月之卷……………一〇  
 性 情之卷……………八五  
 性 容譜首尾……………五二

青陽流傳書……………五  
 靖流瓶花要旨……………七二  
 石州流三百ヶ條……………六六  
 石州流生花奧旨……………二五  
 石州流生花陰陽之卷聞書 六  
 石州流花臺傳書并  
 石州流花傳龍吟抄……………三  
 石州流生花指南……………六  
 石州流生花圖式……………六  
 石州流陰陽根之卷……………五  
 石州流傳書……………五  
 席上譜首之卷……………四  
 席上譜尾の卷……………五  
 剪花翁傳……………四

前卷口傳書圖解……………七  
 專敬流生花のしをり……………六  
 千家花生寸法……………九  
 千家古流生花圖會……………七  
 新流 插花直枝芽……………一四  
 千家 生花圖式……………五九  
 千家 生花の詠……………七〇  
 專正立生花集……………六二  
 專定插  
 燕子花三十瓶の圖……………四六  
 仙傳抄……………二  
 專朋插花集……………六二

〔リ〕  
 相阿彌流生花極秘傳……………三  
 相阿彌流生花傳書……………九七

插花……………六六  
 插花明の色……………四七  
 插花有明之卷……………一〇  
 插花跡河柳……………三一  
 插花口傳記……………一九  
 插花軌範……………九七  
 插花切紙口傳抄……………三七  
 花稽古百首……………二六  
 插花獻備千歲花……………四三  
 插花極傳書拔……………三四  
 插花湖月抄……………五八  
 插花故實化……………一七  
 插花故實集……………二一  
 插花衣之香……………三四  
 插花衣之香并口傳書……………三五  
 插花衣之香附錄……………二七

插花衣之香二編……………三〇  
 插花衣之香三編……………四〇  
 插花衣之香四編……………四  
 插花櫻農香……………三  
 插花四季園……………三〇  
 插花四季詠……………五  
 插花四季の詠……………六  
 插花實形圖……………六三  
 插花捷徑……………七四  
 插花正傳……………一五  
 插花新常盤草……………七〇  
 插花大樂抄圖會……………六五  
 插花竹田百瓶……………三七  
 插花千草集……………五  
 花千筋の麓……………三  
 插花千々の花……………六

插花直枝芽……………一四  
 插花蝶の友……………四七  
 插花帳秘錄……………三三  
 插花筑紫百瓶……………九二  
 插花千歲松……………四二  
 插花月のさかえ……………四  
 插花月の湊……………四六  
 插花圖式……………六七  
 花常盤草……………三七  
 插花獨習自在……………六〇  
 插花錦のかがみ……………五八  
 插花庭之松……………五〇  
 插花野路の枝折……………四  
 插花のしをり……………七八  
 插花の菜……………六〇



挿花の榮……………六四  
 挿花之榮り……………六六  
 挿花の趣味……………七七  
 挿花のしるべ……………六六  
 挿花の法式……………六三  
 挿花萩之霜……………一八  
 挿花濱名の海……………四〇  
 挿花早合點……………三六  
 挿花春の錦……………四〇  
 挿花らん手引種……………四九  
 挿花獨案内……………五四  
 挿花獨稽古……………二六  
 挿花獨稽古……………五五  
 挿花秘傳書……………四七  
 挿花秘傳圖式……………二二

挿花百花選……………三三  
 挿花百華撰……………五三  
 挿花百花百瓶圖……………三〇  
 挿花百媚……………五〇  
 挿花百練……………三三  
 挿花美術之詠……………五七  
 挿花二葉松……………四四  
 挿花法指南……………五七  
 挿花四時之詠……………五〇  
 挿花正風花鏡……………五一  
 挿花本草……………九七  
 挿花松の茂り……………五〇  
 挿花松の翠……………五八  
 挿花千種の錦……………六六  
 挿花水揚之譜……………五二

挿花水揚秘法……………六四  
 挿花水揚百法秘訣……………五七  
 挿花水揚法……………七七  
 挿花柳の緑……………三七  
 挿花蓬の香……………三九  
 挿花代々の花……………三七  
 挿花錦の波那……………三七  
 挿花忘草……………三三  
 増補兼備傳(松月堂)……………三五  
 増補立花大全……………九八  
 草木出生傳……………一八  
 草木性譜……………三六  
 草木傳……………九五  
 草木の出生……………八一  
 草木保育剪伐法……………五八

草木養之卷……………四〇  
 草木養之卷……………五一  
 草木養之卷……………九二  
 席即生花手引草……………三九  
 祖山流地の卷……………八二  
 〔夕〕  
 體意之卷……………五二  
 替花傳秘書……………三  
 大極譜……………九六  
 大典 家元代華集……………七六  
 體用相應之卷……………六四  
 田邊和氣子刀自遺稿……………六四  
 環の絲……………七五  
 竹屋流傳書……………八二

〔千〕  
 千秋流生花傳書……………四九  
 千秋流生花兩儀卷……………五〇  
 千艸之壽……………五三  
 千種の錦……………六八  
 竹器圖式……………五一  
 千筋之籠……………一三  
 知足庵挿花集……………六五  
 千歳松……………六三  
 茶席挿花集……………三六  
 茶道と花道……………七九  
 茶の湯と生花……………六〇  
 茶の湯と生花……………六〇  
 茶の湯評林大成……………八  
 茶花稽古集……………八六

〔テ〕  
 傳書(石州流)……………九五  
 傳書四方之薫……………四六  
 中央草下圖會(松月堂)……………三五  
 中卷九十二ヶ條口傳書……………九五  
 中巻口傳百廿ヶ條……………九五  
 中級之卷……………一六  
 中傳口訣抄……………七九  
 中傳三光の卷……………六八  
 中傳百ヶ條……………九〇  
 女子職業案内……………六七  
 千代之榮……………八四  
 千代のためし……………六五  
 圖式 盛花投入花之榮……………八三  
 解説



轉傳花詠集……………九六

〔ト〕

東海流活花傳習書……………七六  
東山花傳抄……………九五  
東山新流生花濫觴……………五三  
東山新流插花三才卷……………九六  
東山新流譜傳卷……………五五  
東山流秋の夜話……………五五  
東山流花器全圖……………九六  
東山流禁花之辨……………三三  
東山流口傳覺書……………三三  
東山流古代之花形……………九六  
東山四季賞花集……………二七  
東山流生花入門……………三七  
東山流花薄精輯……………九八

南宗瓶華譜……………八一

〔二〕

錦の鏡……………五四  
錦のかいみ……………五八  
錦廼薫……………五五  
錦の波那……………六七  
錦の幣……………五二  
錦の幣後編……………五二  
日用百科寶典……………六七  
日用家之寶……………七五  
日本新花道に就て……………八七  
如山流中御傳之卷……………五三

〔ノ〕

後百花式……………九六  
野山の錦……………九四

東山流香花山策起原……………九五

東山流瓶花体添取合……………三四  
當世垣のぞき……………九六  
唐八景盤……………九五  
東肥群芳百瓶……………三七  
東插花蝶乃友……………四七  
當流萬年青秘傳之圖解……………九五  
當茶之湯評林大成……………八  
常盤艸……………三七  
常盤草百瓶圖解……………八七  
獨習生花秘傳書……………七七  
獨習投入花……………八一  
床飾之卷……………八二

〔ナ〕

拋入花傳書……………六

〔ハ〕

白色御傳書……………九  
萩の霜……………一九  
はしめ草……………二六  
八代流百花選……………三三  
花香々美……………六七  
花かいみ花心粧の卷……………七四  
花影……………七六  
花供養塚集……………五九  
華包……………七三  
花の志をり……………六六  
花の枝折……………七八  
花の菜……………七三  
花の姿見……………六〇  
花の素……………八七  
花粧玉手箱……………七五

拋入岸之波……………二  
拋入と盛花……………七七  
拋入と盛花の秘訣……………八二  
拋入花薄……………三三  
拋入花薄精微……………三三  
拋入花の菜……………七八  
拋入華の圖……………三三  
拋入花盛花圖譜……………七九  
盛花ひとりけいこ……………八三  
秘傳插花獨習自在……………六〇  
盛花實體寫真百瓶……………九  
投入盛花十二月……………八三  
投入盛花寫真圖說……………八一  
投入盛花寫真白景……………八一  
投入草木の出生……………八一

花環の作り方と其心得……………七九

花環花束花籠の作り方……………八四  
葉らん手引種……………四九  
葉蘭遺芳……………五五  
春の錦……………四〇

〔ヒ〕

秘奧御傳書……………九六  
美術之詠……………五七  
微笑體意の卷……………五三  
微笑流燕子花百瓶圖……………三三  
活花四季の眺……………九六  
活花四季百瓶圖……………三〇  
微笑流傳書……………五〇  
微笑流花形集……………七一  
秘傳花……………九六



平城桐後軒井上團子口授二〇

〔ホ〕

- 坊觀流盛花……………八三
- 法合頭書……………九六
- 法持坊茶道の生花極秘書二〇
- 盆栽聚會圖錄……………六六
- 盆瓶花
- 本插花百練……………三三
- 本朝瓶花史……………二二
- 本挿瓶養花集……………三三

〔マ〕

- 松のしをり……………七三
- 松のしつく……………四九
- 松のひとし保……………五五
- 松の翠……………五九
- 松の翠再編……………四二

〔ヘ〕

- 瓶花規範抄……………三三
- 瓶花軌法……………二〇
- 瓶花群載譜……………三三
- 瓶花挿法……………五五
- 瓶花圖彙……………八八
- 瓶花譜……………一〇〇
- 瓶花要導集……………九六
- 瓶華類纂……………五五
- 瓶花論……………四四
- 瓶花論……………六六
- 瓶史……………一〇〇
- 瓶史月表……………一〇〇
- 瓶史國字解……………二九
- 瓶史草木備考……………九六

秘傳花鏡……………七七

秘傳書……………七七

秘傳圖式……………三三

比都彌知草……………六六

獨生羽蘭圖會……………四八

ひとり稽古……………七七

百器物語……………四四

百器圖解……………一五

百瓶花序……………六六

〔フ〕

- 伏陽館 生花秘傳之卷……………四〇
- 御流
- 二葉流傳書……………八五
- 古川流生花獨稽古……………九九
- 文人式瓶華……………八三
- 分牀分傾識(松月堂)……………三五

松山流生花百ヶ條……………九六

萬歳樂……………四四

〔ミ〕

- 三日月之卷……………一〇
- 御門流稽古手引……………五五
- 御流 梅ヶ香……………五三
- 御流
- 未生 骨法指南……………九一
- 新流
- 未生 環の絲……………七五
- 生
- 未生流皆傳書……………九六
- 未生流
- 未生 花術三才卷……………四〇
- 未生流
- 未生流規矩之卷……………九六
- 未生流
- 未生流赦書……………三七
- 未生流
- 未生 插花百ヶ瓶圖……………三〇
- 未生流
- 未生流傳書……………五〇
- 未生流
- 未生流傳書……………八〇

盛花投入の新研究法と  
其の挿方……………八四

盛花投入花之朶……………八三

盛花投入標準花型圖鑑……………八五

盛花之枝折……………八四

盛花の秘訣……………七九

盛花瓶華集……………八三

盛花瓶花秘法……………七六

〔ヤ〕

保田式 投入盛花實現挿法……………八六

〔ユ〕

- 有毒植物圖說……………九六
- 有毒植物圖譜……………七〇
- 夕顔御傳書……………九六

〔ヨ〕



養活傳……………三七  
 養活秘録……………三三  
 庸軒流生花秘書……………三三  
 庸軒花粧玉手箱……………三七  
 容真御流三才之卷……………三五  
 呦々齋瓶花全書……………二七  
 能く保つ水揚秘法皆傳……………二八  
 義政公御式目……………二六  
 四方の薫り……………三三

〔リ〕

利久傳生花百箇條……………二五  
 立花池坊流  
 四師隨身口授卷……………二六

立華訓蒙圖彙……………七  
 立華綱目大成……………九六  
 立花時勢粧……………六  
 立花指南鈔……………五  
 立花書院飾……………四  
 立華指要大成……………二〇  
 立花初心抄……………四  
 立華正道集……………六  
 立花指南大全……………三五  
 立生千華式……………九  
 立花全書……………一〇  
 立花大全……………五  
 立華圖會……………九

立花圖編……………一〇  
 立花傳書……………一〇  
 立花傳書……………一八  
 立花秘傳撰花雜錄……………一一  
 正法眼藏撰花雜錄……………一一  
 立花百瓶……………四  
 立華百瓶圖……………八九  
 立花秘要抄……………七

〔ロ〕

六角堂地坊並門弟立花砂  
 物圖并口傳書下の卷附……………四

〔ワ〕

嫩之卷……………四〇  
 索引……………終

年號索引

〔三書〕  
 大 化 二下い 天 應 三下い 天 養 六下ろ 元 永 六上は  
 大 寶 二下は 天 長 四上い 天 福 七上は 元 曆 七上い  
 大 同 三下は 天 慶 四下は 天 授 八下い 元 久 七上ろ  
 大 治 六下い 天 曆 五上い 天 正 十上ろ 元 應 八上い  
 大 永 九下ろ 天 德 五上い 天 和 十一上い 元 亨 八上い  
 大 正 十三上い 天 祿 五上ろ 天 明 十一下は 元 德 八上ろ  
 大 安 六下ろ 天 延 五上ろ 天 保 十二上は 元 弘 八上ろ  
 大 壽 六下ろ 天 元 五上ろ 天 天 壽 四上ろ 元 中 八下ろ  
 〔四書〕  
 天 平 三上ろ 天 喜 五下は 天 仁 和 四下い 元 龜 十上ろ  
 天 勝 三上は 天 仁 六上は 天 仁 平 六下ろ 元 和 十下い  
 天 寶 三上は 天 永 六上は 天 仁 安 六下は 元 祿 十一上ろ  
 天 寶 三上は 天 治 六下い 天 仁 治 七上は 元 文 十一下い  
 天 神 三下い 天 承 六下い 天 元 慶 四上は 元 治 十二下ろ



文	文	文	文	文	文	文	文	文	文	文	文	文	文	文	文	文	文	文	文
久	政	化	祿	龜	明	正	安	中	和	保	永	應	曆	治					
十二下	十二上	十二上	十上	九下	九上	九上	九上	八下	八上	八上	七下	七下	七上	七上					
正	正	正	正	正	正	弘	弘	弘	弘	弘	弘	白	白						
安	應	元	嘉	治	曆	化	治	和	安	長	仁	鳳	雉						
七下	七下	七下	七下	七上	五上	十二下	十上	八下	七下	七下	三下	二下	二下						
永	永	永	永	永	永	永	平	正	正	正	正	正	正	正	正	正	正	正	正
久	長	保	承	祚	延	觀	治	德	保	長	平	慶	中	和					
六上	六上	六上	五下	五上	五上	五上	六下	十一上	十下	九上	八上	八上	八上	八上					
安	安	安	朱	至															
貞	元	和	鳥	德															
七上	六下	五上	二下	八下															

【五書】

【六書】

安	安																		
政	永																		
十二下	十一下																		
承	承																		
和	銅																		
四上	三上																		
長	長																		
治	治																		
十二下	十二下																		
保	保																		
六下	六下																		
元	延																		
六下	六下																		

【七書】

【九書】



曆	曆	德	養	養	寬
應	仁	治	和	老	政
八上る	七上は	八上い	六下は	三上い	十二上い
應	應	應	應	興	國
安	長	保	和	和	八上る
八下い	八上い	六下る	五上い		
寶	寶	寶	應	應	應
	德	治	龜	仁	永
	九上る	七下い	三下い	九上は	八下る
觀		靈	寶	寶	寶
	應	龜	曆	永	永
	八上は	三上い	十一下る	十一上は	

【十六書】

【十七書】

【二十書】

【二十四書】

【二十五書】

康	康	神	神	建	建	建	建	建	建	建	建	建	建	建
平	保	護	龜	德	武	治	長	保	曆	永	仁	久		
五下は	五上る	景	三上る	八下い	八上る	七下る	七下い	七上る	七上る	七上る	七上い	七上い		
		雲	三下い											
嘉	萬	萬	萬	乾	康	康	康	康	康	康	康	康	康	康
祥	延	治	壽	元	正	應	曆	安	永	元	治	和		
四上る	十二下い	十下は	五下る	八上い	九上る	八下る	八下い	八上は	八上は	七下い	六下る	六上る		
慶	慶	壽	齊	嘉	嘉	嘉	嘉	嘉	嘉	嘉	嘉	嘉	嘉	嘉
長	雲	永	衡	永	吉	慶	曆	元	禎	祿	應	承	保	
十上は	三上い	七上い	四上る	十二下い	九上い	八下る	八上る	八上い	七上は	七上は	六下は	六上は	六上る	
寬	寬	寬	寬	寬	寬	寬	寬	寬	寬	寬	寬	慶	慶	
	保	文	永	元	喜	治	德	仁	弘	和	平	應	安	
	十一下い	十下は	十下る	七下い	七上は	六上る	五下は	五下い	五下い	五上は	四下い	十二下る	十下は	

【十一書】

【十三書】

【十五書】



附録(其一)

年代早見

本書はしがきにも記してある如く、親切な古人と對話してゐるほど氣持ちのよいものはない。何回同じことを繰りかへし問うても答へて呉れて倦むことはない。然し著書年代の箇條に就て「享保辛亥仲秋」と云ひ切ることが屢々ある。さうすると聽く者が享保何年のとやら、さては紀元何年か全く分らない。此の年代が知れなければ調べるのに好都合と云へぬ。此の時に當つて享保なれば頭字の字畫が八畫であるから年號索引中の八畫の所を見ると享保がある。其の下に十一上はと教へて呉れる。十一は附録十一ページで、上は十一ページ中の上段である。はは上段中の横列符號であるから、は列中に享保がある。そして附録二ページ上半に、十千十二支の配當割經十行緯三段中、辛亥の所がい列五行目内左方に在るのを見出すであらう。されば以下享保年代の所と對照し、享保年間の下段い列五行目内左方を見ると直ちに紀元二千三百九十一年享保十六年であると云つて呉れる。又何の何年或は紀元何年は干支が何に當るかど繰るのは前述の反對にすればよい。例へば元祿元年は二ページろ列四行目内右方であるから、十一ページ上段のろ列四行目内右方に戊辰であると直ぐ教へて呉れる。

本書發行後百年間に渉る空欄を設けて置いたから、各自に書入れて置かれない。







十一 九 八 七 六 五 四 三 二 一

1501	1500	1499	1498	1497	1496	1495	1494	1493	1492	1491	1490	1489	1488	1487	1486	1485	1484	1483	1482
八	七	六	五	四	三	二	和承	仁明	九	八	七	六	五	四	三	二	美長	十四	十三
1521	1520	1519	1518	1517	1516	1515	1514	1513	1512	1511	1510	1509	1508	1507	1506	1505	1504	1503	1502
三	二	觀貞	二	天安	三	二	齊衡	三	二	五文德	三	二	嘉祥	四	三	二	美長	一〇	九
1541	1540	1539	1538	1537	1536	1535	1534	1533	1532	1531	1530	1529	1528	1527	1526	1525	1524	1523	1522
五	四	三	二	七陽成	一八	一七	一六	一五	一四	一三	一二	一一	一〇	九	八	七	六	五	四
1561	1560	1559	1558	1557	1556	1555	1554	1553	1552	1551	1550	1549	1548	1547	1546	1545	1544	1543	1542
三	三	二	昌泰	九	八	七	六	五	四	三	二	平寛	四	三	二	八光孝	八	七	六
1581	1580	1579	1578	1577	1576	1575	1574	1573	1572	1571	1570	1569	1568	1567	1566	1565	1564	1563	1562
二	一〇	一九	一八	一七	一六	一五	一四	一三	一二	一一	一〇	九	八	七	六	五	四	三	二
1601	1600	1599	1598	1597	1596	1595	1594	1593	1592	1591	1590	1589	1588	1587	1586	1585	1584	1583	1582
四	三	二	天慶	七	六	五	四	三	二	一六朱雀	八	七	六	五	四	三	二	三	二

附四

上段い ろ は 下段い ろ は

十 九 八 七 六 五 四 三 二 一

1602	1603	1604	1605	1606	1607	1608	1609	1610	1611	1612	1613	1614	1615	1616	1617	1618	1619	1620	1621
五	六	七	八	九	一〇	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一	二	三	四
1642	1643	1644	1645	1646	1647	1648	1649	1650	1651	1652	1653	1654	1655	1656	1657	1658	1659	1660	1661
二	三	二	一	三	四	二	二	一	二	三	四	五	三	二	四	三	二	三	四
1682	1683	1684	1685	1686	1687	1688	1689	1690	1691	1692	1693	1694	1695	1696	1697	1698	1699	1700	1701
四	五	二	二	三	四	五	六	七	八	三	二	三	四	五	四	二	三	四	二
1702	1703	1704	1705	1706	1707	1708	1709	1710	1711	1712	1713	1714	1715	1716	1717	1718	1719	1720	1721
二	三	四	二	三	四	三	二	三	四	五	六	七	八	九	五	二	三	四	二

附五

上段い ろ は 下段い ろ は



十 九 八 七 六 五 四 三 二 一

1722	1723	1724	1725	1726	1727	1728	1729	730	1731	1732	1733	1734	1735	1736	1737	1738	1739	1740	1741	
五	六	七	治	三	三	四	三	四	五	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四
1742	1743	1744	1745	1746	1747	1748	1749	1750	1751	1752	1753	1754	1755	1756	1757	1758	1759	1760	1761	
二	三	應	二	三	三	四	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	
1762	1763	1764	1765	1766	1767	1768	1769	1770	1771	1772	1773	1774	1775	1776	1777	1778	1779	1780	1781	
四	五	長	二	三	二	三	二	四	五	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	
1782	1783	1784	1785	1786	1787	1788	1789	1790	1791	1792	1793	1794	1795	1796	1797	1798	1799	1800	1801	
三	四	天	二	二	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六	
1802	1803	1804	1805	1806	1807	1808	1809	1810	1811	1812	1813	1814	1815	1816	1817	1818	1819	1820	1821	
二	二	天	二	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六	一七	
1822	1823	1824	1825	1826	1827	1828	1829	1830	1831	1832	1833	1834	1835	1836	1837	1838	1839	1840	1841	
二	二	二	二	二	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六	

附六

上段い ろ は 下段い ろ は

1842	1843	1844	1845	1846	1847	1848	1849	1850	1851	1852	1853	1854	1855	1856	1857	1858	1859	1860	1861
二	三	元	二	二	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六
1862	1863	1864	1865	1866	1867	1868	1869	1870	1871	1872	1873	1874	1875	1876	1877	1878	1879	1880	1881
二	三	元	二	二	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六
1882	1883	1884	1885	1886	1887	1888	1889	1890	1891	1892	1893	1894	1895	1896	1897	1898	1899	1900	1901
二	三	元	二	二	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六
1902	1903	1904	1905	1906	1907	1908	1909	1910	1911	1912	1913	1914	1915	1916	1917	1918	1919	1920	1921
三	三	元	二	四	四	二	二	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三
1942	1943	1944	1945	1946	1947	1948	1949	1950	1951	1952	1953	1954	1955	1956	1957	1958	1959	1960	1961
二	三	元	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六	一七	一八

十 九 八 七 六 五 四 三 二 一

1842	1843	1844	1845	1846	1847	1848	1849	1850	1851	1852	1853	1854	1855	1856	1857	1858	1859	1860	1861
二	三	元	二	二	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六
1862	1863	1864	1865	1866	1867	1868	1869	1870	1871	1872	1873	1874	1875	1876	1877	1878	1879	1880	1881
二	三	元	二	二	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六
1882	1883	1884	1885	1886	1887	1888	1889	1890	1891	1892	1893	1894	1895	1896	1897	1898	1899	1900	1901
二	三	元	二	二	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六
1902	1903	1904	1905	1906	1907	1908	1909	1910	1911	1912	1913	1914	1915	1916	1917	1918	1919	1920	1921
三	三	元	二	四	四	二	二	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三
1942	1943	1944	1945	1946	1947	1948	1949	1950	1951	1952	1953	1954	1955	1956	1957	1958	1959	1960	1961
二	三	元	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六	一七	一八

附七

上段い ろ は 下段い ろ は







2202	2203	2204	2205	2206	2207	2208	2209	2210	2211	2212	2213	2214	2215	2216	2217	2218	2219	2220	2221	2222	2223	2224	2225	2226	2227	2228	2229	2230	2231	2232	2233	2234	2235	2236	2237	2238	2239	2240	2241	2242	2243	2244	2245	2246	2247	2248	2249	2250	2251	2252	2253	2254	2255	2256	2257	2258	2259	2260	2261	2262	2263	2264	2265	2266	2267	2268	2269	2270	2271	2272	2273	2274	2275	2276	2277	2278	2279	2280	2281	2282	2283	2284	2285	2286	2287	2288	2289	2290	2291	2292	2293	2294	2295	2296	2297	2298	2299	2300	2301	2302	2303	2304	2305	2306	2307	2308	2309	2310	2311	2312	2313	2314	2315	2316	2317	2318	2319	2320	2321	2322	2323	2324	2325	2326	2327	2328	2329	2330	2331	2332	2333	2334	2335	2336	2337	2338	2339	2340	2341	2342	2343	2344	2345	2346	2347	2348	2349	2350	2351	2352	2353	2354	2355	2356	2357	2358	2359	2360	2361	2362	2363	2364	2365	2366	2367	2368	2369	2370	2371	2372	2373	2374	2375	2376	2377	2378	2379	2380	2381	2382	2383	2384	2385	2386	2387	2388	2389	2390	2391	2392	2393	2394	2395	2396	2397	2398	2399	2400	2401	2402	2403	2404	2405	2406	2407	2408	2409	2410	2411	2412	2413	2414	2415	2416	2417	2418	2419	2420	2421	2422	2423	2424	2425	2426	2427	2428	2429	2430	2431	2432	2433	2434	2435	2436	2437	2438	2439	2440	2441	2442	2443	2444	2445	2446	2447	2448	2449	2450	2451	2452	2453	2454	2455	2456	2457	2458	2459	2460	2461	2462	2463	2464	2465	2466	2467	2468	2469	2470	2471	2472	2473	2474	2475	2476	2477	2478	2479	2480	2481	2482	2483	2484	2485	2486	2487	2488	2489	2490	2491	2492	2493	2494	2495	2496	2497	2498	2499	2500
------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------

2302	2303	2304	2305	2306	2307	2308	2309	2310	2311	2312	2313	2314	2315	2316	2317	2318	2319	2320	2321	2322	2323	2324	2325	2326	2327	2328	2329	2330	2331	2332	2333	2334	2335	2336	2337	2338	2339	2340	2341	2342	2343	2344	2345	2346	2347	2348	2349	2350	2351	2352	2353	2354	2355	2356	2357	2358	2359	2360	2361	2362	2363	2364	2365	2366	2367	2368	2369	2370	2371	2372	2373	2374	2375	2376	2377	2378	2379	2380	2381	2382	2383	2384	2385	2386	2387	2388	2389	2390	2391	2392	2393	2394	2395	2396	2397	2398	2399	2400	2401	2402	2403	2404	2405	2406	2407	2408	2409	2410	2411	2412	2413	2414	2415	2416	2417	2418	2419	2420	2421	2422	2423	2424	2425	2426	2427	2428	2429	2430	2431	2432	2433	2434	2435	2436	2437	2438	2439	2440	2441	2442	2443	2444	2445	2446	2447	2448	2449	2450	2451	2452	2453	2454	2455	2456	2457	2458	2459	2460	2461	2462	2463	2464	2465	2466	2467	2468	2469	2470	2471	2472	2473	2474	2475	2476	2477	2478	2479	2480	2481	2482	2483	2484	2485	2486	2487	2488	2489	2490	2491	2492	2493	2494	2495	2496	2497	2498	2499	2500
------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------

十 九 八 七 六 五 四 三 二 一

上段

ろ

は

下段

ろ

は

上段

ろ

は

下段

ろ

は







附録 (其二)

圖書館の利益

圖書館ほど重寶で有益なものはないと思ふ。一度圖書館の門を潜れば、それだけ知らず識らずの間に學びの道を辿るのである。扱各自が目的の頂上に登つて後を顧みたま時、初めて未研究者の知識や腕前の如何を圖り知ることが出来るのである。花書を繕くに當つて、其の書の内容悉くが著者自身の説であると信じては誤であると本書のはしきにも述べて置いたが、假令轉載したものでも理窟に適つたものは覺て置いて採用するのがよからう。研究の歩の進むにつれて、此の説は誰の説であること云ふことが判明して来る。又著者が眞面目であると云ふことが分つたならば、其の著書を繰りかへして讀むがよい。さうする中には書中の意味も會得せられるものである。十分に會得が出来た以上は、實地にそれを行ふのは容易なことである。

一個の頭腦に何程這入るか

昔は全科醫と云つて何病にても一人で治療したが、現今分科となつて専門家が殖れて來た。花道も同じことで、十分に研究しようと思つたならば、眞面目の専門家に隨つて學ばねば心髓を得ることが出来ない。世に云ふ八百屋式の花道以外に、抹茶何流、煎茶何流、香道、盆石、刺繡、裁縫編物と、



何も彼もの看板を懸けてゐる者もあるが、一個の頭腦でさう澤山の奥義を極められようとは思はれない。それでは多くの技藝を一人で覚えられないかと云ふに強ちさうでない。何程でも覚えられるけれど、それでは一部分の量が減る譯で、一藝に達してゐないと云ふのである。達してゐないものなら、故實と云ひ技術と云ひ、その價値は知れてゐるではないか。

### 七八歳の女兒と中學生

長州の萩に行つた時、圖書館の所在地は大略聞いてゐたが、さて行つて見るとさう容易に見つからない。それで其の四つ辻の角に在る小さい菓子店に「ごめんなさい」と聲を掛けると、「ハイ」と答へて七八歳位な一人の女の子が出て來た。「ねえちゃん、圖書館の在る所知らないの」と尋ねると、「ハイ存じてゐます」といふ立派な標準語での明瞭な答に「それでは何所」と更に問ふと、「此所を眞直ぐにお出になりますと、左に廻る辻がございませす、其を少し行きますと公園がありまして、そこからはもう近うございませす」と教へてくれた。

某市に下車して圖書館は何丁ほどあるかと尋ねると、變な顔付して知らない振りをした。手控には所在地の町名が記してあるから、電車に乗つて車掌に町名を云ひ切符を買つた。下車して尋ねたが知れない。近所の人にも問うたが分らない。殊に梅雨期で篠衝く雨の中を蝙蝠傘をさして一軒一軒洋館らしい所を尋ねて廻つた。或る通の屋敷らしい門に中學生が三名兩宿りをしてゐたから、「君、此邊に

圖書館はないか」と聞いた。すると「知らない」と答へて、一人に向ひ「君知らないか」と言葉どかけた。問はれた者は小首を傾けて「市中にはないせ」と云つて更に他の一人に向ひ「お前知らないか」と問うたが、その者は無言であつた。三人ながら知らないものとして「それでは失敬」と云つて、附近の女學校へ這入つて、教師に圖書館の有無を尋ねた。「お耻しいことではありますが當市には市立と云つては御座いません、元個人で經營してゐましたが、主人が死亡後書籍全部を家計の都合上商人に賣り飛ばしてしまつたと云ふことです。外に師範學校附屬圖書館がありますか」と云ふ。因てそれより師範學校附屬圖書館に行つて、一通り閲覽を濟ませ、停車場へ引返した。

假令市立の圖書館がなくても、師範學校の附屬圖書館があるのを知らないでゐる中學生と小かな家に住み、年も十歳に満たない女兒が、既に圖書館の何物であるかと云ふことを知つて、直ぐに明答を與へるのとの差は論するまでもないことである。

### 圖書館の盛衰

圖書館の閲覽者を多くさせようと又少くしようと、館長及び主事主任の意嚮で如何にでもなると思はれる。熱心な館長は或は土地の富豪を説いて金を出させ、或は死藏書家を説いて公衆の爲に書籍を寄贈せしめる。それが爲に新建築も成り、備附の藏書も増加する。そして土地の徒弟などに來館を勸めて學校以外の社會教育に努める。誠に喜ばしきことである。閲覽者の少い所にはそれ相當の理由が



裏面に存在してゐるやうに思はれる。主事主任も餘り熱心でなく、又教育會の方よりも經費を十分に支出しない爲に書籍の購入も十分ならず、従つて活氣を失ひ情氣を生じ、土地の兒童も書物の少い爲に二度とは行かないやうになる。

### 空地があれば斯くしてほしい

山口縣立圖書館(山口町)に這入つたが、家屋は日本風の質朴なものであつて、掃除が行き届いて紙屑の無いのは氣持ちがよかつた。圖書館以外にも種々の参考品が配置よく陳列してあつて、何れも見ても利する所があつた。閲覧者に於いて互に注意するのもかも知れないが、至極靜肅であるのには感心した。靜にして讀書すると云ふことは相互に利益である。

山口縣阿武郡立の萩圖書館も前述と大差はないが、館前の空地に植物を植ゑ、それ／＼小石川植物園の如き白い札を建て、一般閲覧者の參考資料に供せられてゐるのは、我等植物に接近してゐるものには殊に嬉しかつた。

### 某圖書館主任の話

書籍を借覽調査中題號の違つてゐるのに内容が同一であるのを見出し、出納係に注意すると、「フォーム」と合點せられた。「何分にも澤山の書籍で、それ／＼部類が違ふので、斯様のことが出来る」として別の所へ入れられた。版權の賣買毎に内容の同じものを表題を變へて出版するから、廣告を目當に買ひ入れる圖書館は時によると無駄經費を支出せねばならぬ。又名高い書肆は良い書物のみ出版するものと信じて書籍を購入すると云ふ主任が多數ある。これは當然であるが、然し大書肆でも各専門家を雇つては居ないから、その書店を購着してかかる著者が無いでもないとは、東京の某氏に聞いた所である。

### 書庫が欲しい

編者が各地の圖書館を廻つて遺憾に思つたのは、書庫のないため閲覧室と共に書籍の悉くが焼失した一事である。岐阜に下車して電車に乗り、車掌に圖書館迄と云ふと、「圖書館はつひ此の間焼けました」と云ふ。それではせめてその焼跡でもと云つて其所で下車した。焼跡には焦げて黒くなつた材木が横たはり、表通りに新しい板圍が半分できてゐた。他で聞いて見ると漏電から火を失して全焼したと。惜しいことには書庫がなかつた爲圖書まで焼いたのである。

青森へ行つた時圖書館の受附で聞いたが、「焼けまして其の後本館の建築は出來ず、圖書が中々集りません、現今では少數の書物しかありません。」と同情に値する話であつて、現在は官舎の一部を利用してゐた。これなども書庫が不完全であつた結果である。

現今未だ圖書館の建築に取り掛つてゐない所があるが、一朝火を失した時は、大切の書籍が烏有に歸してしまふ。又集めようとするれば絶版の物もあつて、中々容易な業でない。つく／＼書庫の必要を



感じるのである。

函館に行つて雪中を歩いて公園に入つた。大變に立派な鐵筋コンクリートの倉庫が一棟目立つてゐて、何れの所有か知らないが、位置と云ひ構造と云ひ安全なものであると思つた。そして圖書館はと云ふと、木造で大建築とは云へない有様であつたが、後で聞いて見ると、彼の立派な倉庫が書庫であつたのは、館長の明を賞するに足りる。本館建築に先だち、不燃焼物で書庫を作られたのは喜ばずにはゐられなかつた。

### 病氣に罹らないでね

編者が越後の新潟より下車して直江津に逆行の途中、宮内驛に停車したのはもう夕刻近くのことである。土地は氷つてゐる上に、雪が降つて来て殊に寒い日であつた。その短い停車時間中一つの悲劇が起つた。この驛で二十三歳位の一婦人が乗車して、自分より一つ隔つて向ふの座席に腰を掛けた。窓の外には五六人の年増が見送りに來たらしく、今汽車が発車しようとして云ふ刹那に窓近く寄つて来て、動き始めると同時に「病氣に罹らないでね」と淀んだ聲で注意した。腰を卸した其の婦人はまた立上つて「姉さん……もごぶ……じで」と、言葉も途切れ／＼に別れの挨拶をした。此の別離の状は尋常一様の旅行などではない。汽車は徐々に動いて一間餘りも見送り婦人を後にした時、編者は直ちに首を窓外に突き出し、顔に雪の降りかかるのを構はずに後振り向いて様子を眺めて見た。姉と稱する彼の婦

人は汽車の此方へ體軀を向けて、左の袖を眼に當て、少し俯向いてゐた。車中の婦人も座席の後の背板に靠れかかつて、同じくハンカチフを眼にして頭を得上げなかつた。其の時五十近くの人の相の悪い古洋服を着け、中折帽の縁を前下りにかぶつた男が、婦人に對つて「ねねさん、心配しちやいけねえ男が附いてゐるから」と慰撫の如きことを云つたが、婦人は一言も答へないでゐた。次の來迎寺で、多數の乗客が車中に繰り込んで來たので、婦人も頭をあげた。それより五つ目の柏崎驛に來るまでは人に知れないやうに時折そつとハンカチフでにじみ出る涙を拭つてゐた。隣席の乗客も同情の眼を婦人に注いでゐたが、質朴な家庭に育つた田舎娘が、沈み行く淵は果して何處であらうか。又別れを惜んで互に言葉を交した姉妹に再び逢ふとき悪い病にも罹らないで會へるであらうか。五十男が云ふ如く、心配しないで幸福な所に行くであらうか、幸福な所へ行くと知りつつ別を惜んで泣くものであらうか。此の悲惨な有様を目前に見た編者は斯う想つて見た。花道に遊ぶ婦人達は下情に暗いものが多く、殊に近來世の好況につれて身分不相應なる衣服を纏ひ、高價な帯を締め、頭にまで黄金や寶石の類を用ゐ、尙これにも満足せず、彌が上にも奢侈を好むのは實に慨嘆の至りである。世は好景氣と云つても大戦に幾分でも關係のあるものばかりが利得を占めたので、日本國民全部がさまで裕福になつた譯ではない。多くの者は物價の暴騰又暴騰に當惑し、頗る困難を感じてゐる。前の哀れな婦人にも思ひ較べて奢侈の惡風は斥けるやうに勉めて欲しいものである（大正九年二月十八日汽車中にて記す）



歴遊の途次北陸を通過の際、來迎寺驛より十四五名の女の子がドヤ／＼と車内に這入つて來た。之を引率してゐる若者五名は何れも酒氣を帯びて、「ヤ揃つたか」と、互に顔見合せて頷き、一人の男は車窓より半身を突き出して「あなた方安心なさいよ、決して悪くはしませんからな」と大聲での挨拶。見送つて來た人達は田舎風の男女合せて二十名許り。中には笑つてゐるものもあり、愁ひ顔をしてゐるものもあり、只無意味にボンヤリ立つてゐるものなどもあつた。汽車が動き始めると、車中の若者一同は聲を揃へて「萬歳々々」と連呼した。その中に汽車は靜に動いて構内を離れた。女はと見ると、無言の儘俯向いてゐるのが最も多く、顔に憂を含んで今にも泣かんとせるもの之に次ぎ、笑へる者は極めて少し。汽車が各驛に停車する毎に柏崎驛からも二十人ばかり、鯨波驛からも高田驛からも其の他の驛からもそれ／＼一人或は二人宛の同じ連中らしい者が乗車した。彼の酒氣を帯びた男連は、無禮にも猥褻の言語を發し、俗語を連發して、他の乗客に迷惑を與へること甚しい。左腕に赤布を着けた乗客専務車掌が來て「お靜に願ひます、他のお客様のことをお思ひ下さい」と至極穩に諭した。若者は「此の女達の無聊を慰めるためだ」と答へ、暫時は沈黙してゐたが、車掌が隣室へ去ると若者は大聲で「お靜に願ひます」と車掌の言葉の眞似をし、又も俗語、淨瑠璃、口三味線等、以前と同じやうに騒ぎ出した。隣席に居た老婦人が一人の女に行く先を尋ねると、紡績會社だと答へた。編者は初め

てそれと知つて、これが所謂地方へ狩出しに行くこと云ふのであるかと思ふと、同乗した女と曾て自分の手で花の道を教へた女との比較が腦裡に涌いて來て、他人ながらもつく／＼不惑に思はれた。成るほど労働は尊むべきである。けれども此の多人數の女の中には、紡績の意外な好況のため賃銀の云々に引かされて自ら出稼ぎするものもあらう、生活の困難上親より強ひられて否むこともできず之に従ふものもあらう、友達が行くからとて無意味に行つて見たいと吊り込まれるものもあらうが、紡績女工が如何な生活をしてゐるか、如何なる待遇を受けてゐるかは、編者が今更述べなくても既に定評のあるものである。同じ聖代の空氣を吸ふ者でも、親の膝下を離れて八時間の労働勤務を終り、共同寄宿舎に假り寝の夢を結ぶ者と、父兄の保護の下に毎日女學校に通學するもの、裁縫專修の學校に通ふもの、又は學校を卒業して生花茶の湯などの稽古をしてゐるもの等と比較して見れば、その幸不幸は論ずるまでもなく明なことである。前者の賃銀は貯蓄せられ、やがて幾年かの後には相當の金高となり、衣服調度の資料となるのである。後者は労働と云ふやうなこともなく、其の上に自分の欲する所の着物小間物等も母に強請つて隨時手に入れることが出来るであらう。けれどもそれを左ほごに有難く思はぬ者が多いやうである。中流以上の家庭に生れ、何するともなく日を送つてゐるものは、人生は斯の如きものであると思ひ、少しでも上等の品を好み、知らず識らずの裡に身分不相應な品物を身に纏ふやうになるのである。又虚榮心の強い母親は、近所の娘に負けてはならぬと工面して街ふ。



親として子を思はぬものはないけれど、分限の度を越してまで虚榮をはるには及ばないではないか。編者の見聞した所によれば、父は早く死し、少しの遺産で男の子を育てたが、只可愛と云ふばかりで、子供の云ふが儘にして育てあげ、成人の後母親の云ふことを聞き入れぬと愚痴を滾す母親があり、母親の死後、人と交るのに、長年の間母親に甘えた悪習慣があるため、人に譲ると云ふことを知らず、世間より氣儘者よと陰口を云ひ譏られる者もある。そして其の本人は如何であるかと云ふに、他人もやはり母親の如く、自己の云ふが儘になるものと思ひつめて事に當るから、他人が母親の如く無理なことを聞いてくれぬと氣に入らない。と云つて他人の云ふ通りに従ふのは氣儘者の性質として苦しく遂には自ら孤獨の身にならねばならぬ。さう成ると、「皆が自分を除外者にしてしまふ」と云つて愚痴をいふ。是等の人は男女に關はらず自己の言行を直せばよいのである。けれども長らくの間悪い習慣を通して來たものであるから、急には改められず、従つて人に嫌はれるのである。斯様な難物に作り上げたのは、最初母親が子供に良い教育をしなかつた罪である。と云はねばならぬ。されば女が賢い息子を持つとも馬鹿息子を作るも自己の精神の如何によることであるから、將來を思ふなら一刻も教育を忽諾にしてはならない。

附 録 終

大正十三年一月十二日印刷  
大正十三年一月十五日發行

定價 金貳圓五拾錢

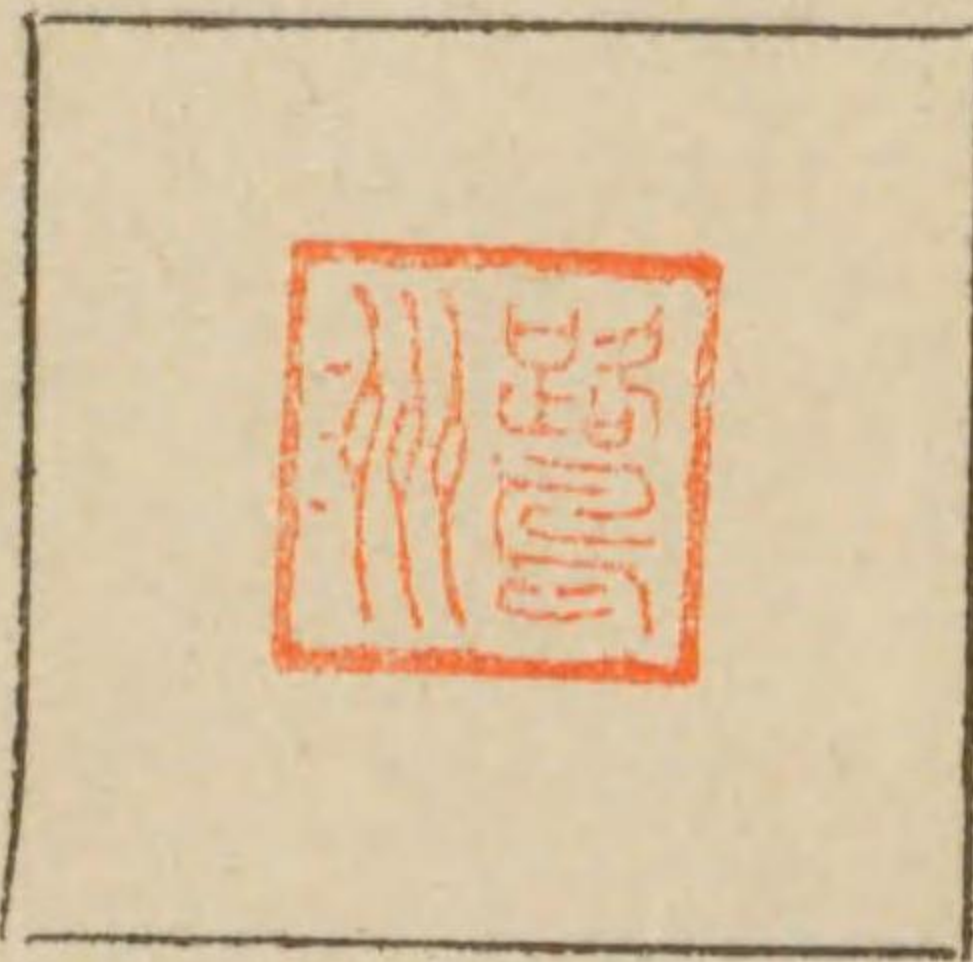
著 者 小 林 鷺 洲

發 行 者 平 元 良 作  
東京市京橋區南小田原町二丁目九番地

發 行 者 前 田 梅 吉  
大阪市南區鹽町四丁目四十六番地

印 刷 所 千 野 印 刷 所  
東京市芝區西久保廣町十六番地

不 許 複 製



東京市京橋區南小田原町二丁目九番地

發 行 所 大 日 本 華 道 會

振替東京二一〇九五番  
大阪市南區鹽町四丁目四十六番地

發 行 所 前 田 文 進 堂

電話船場一九九九番  
振替大阪一二四七二番







160
173





